1996年5月1日発行（毎月1日発行）通巻第二一号 1995年3月13日第三種郵便物認可

JAPANESE ROCK NEWSMEDIA

J-ROCK magazine

6
400YEN
Volume 13
JUNE 1996
月刊ジェイロックマガジン

LUNA SEA / B'z / 黒夢

FIRST ANNIVERSARY AND RENEWAL

JUDY AND MARY　布袋寅泰　SIAM SHADE　Eins:Vier　筋肉少女帯　L'Arc~en~Ciel　斉藤和義

FEATURE『J-ROCKの掟』インターネットに「CYBER J-ROCK magazine」誕生
http://www. J-ROCK. com

NEW ALBUM NOW ON SALE
IN TRANCE
F·S·B
FEEL SO BAD
1st VIDEO NOW ON SALE
ENDORPHINE GROOVE
ZAVL-1001
4,800yen(tax incl.)
NEW ALBUM
IN TRANCE
01 F・S・B
02 したたかになれ
03 勝負だ!!
04 THEME OF D.K.
05 UTOPIAN AND REALIST
06 いつも心にFIRE
07 オタンコナス
08 我は愚かなり主よ救いたまえ
09 AM 8:58
10 IN TRANCE
11 よかった
ZACL-1031/3,000yen(tax incl.)
ZAIN RECORDS
LIVE JUMPIN' BUTT Ver.3
"IN TRANCE"
'96.5.16 (thu 博多 DRUM Be-1
CALL092-712-4221: BEA
'96.5.18 (sat 大阪 W'OHOL
CALL06-357-7500: SOUNDCREATOR
'96.5.25 (sat 東京 渋谷 ON AIR EAST
CALL03-5704-3200: DISK GARAGE
FEEL SO BAD オフィシャルファンクラブ
[BADMANIA]
〒106東京都港区六本木4-8-7 六本木嶋田ビル6F
入会方法 ¥80切手+返信用封筒を同記の住所まで

CONTENTS

6 June 1996 J-ROCK magazine

COVER ARTIST
LUNA SEA

COVER PHOTOGRAPHER
MASANORI KATO

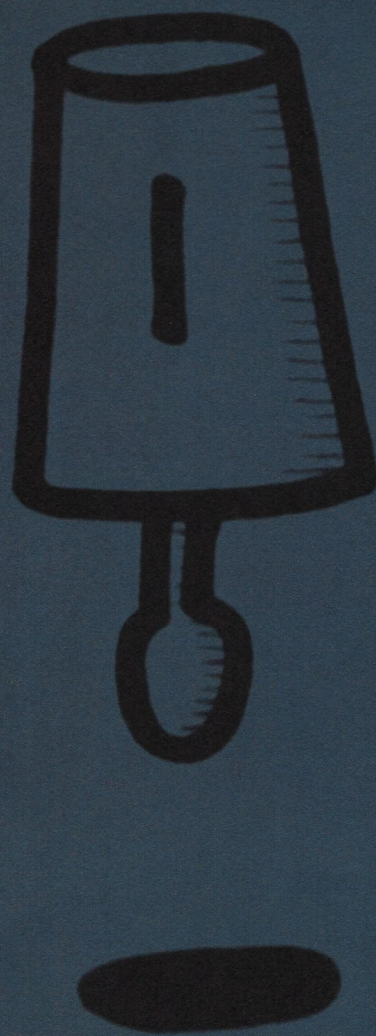
EDITORIAL DESIGN
HIROSHI SHIRAE
TOMOYUKI OHNISHI
Doing

6月号 ©ジェイロックマガジン社
1996年5月1日発行（毎月1日発行）通巻第二一号
発行：株式会社ジェイロックマガジン社
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 8F
PHONE：06-214-1751／FAX：06-214-1761
印刷・製本：株式会社大伸社
発行人：辻村和周　編集長：里居正裕

アーティストニュースを見よ。

本誌は、日本の音楽に焦点を当てていく専門誌としてここに名乗りを上げる。
まず本誌中のJ-ROCK ARTISTS NEWSを見てほしい。基本的に、ここでセレクトしたアーティストたちに注目していくつもりだ。このアーティストたちは、編集部が次の5つの条件を基に際限の無い論議を行い、独断と偏見のもとにセレクトしている。

1. ルーツ（ロックスピリッツ、ブルースフィーリングを持っている）
2. 実力（歌唱または演奏力がある。声に魅力がある）
3. クリエイティビティ（作詞・作曲能力に優れている）
4. パフォーマンス（カリスマ性がある。ライブパフォーマンス、ビジュアルがいい）
5. 生き様（芸能人、タレント化していない）

以上の5項目を有していれば、当然認められるべきで、そうしたアーティストを選出した。

柔らかいこたえを探すラジオ。floating system #0004 ポトフ "pot-au-feu"

『MOTHER』から1年半。彼らはその時間を血と肉に変えて『STYLE』という新しい生命体を生み出した。そこにあるのは純粋な音と歌。だれもが陥りがちな過去への束縛をはねのけ、あくまでも自分達が感じたままの五人五様の鼓動だけが脈打っている。
彼らにとって、新作『STYLE』とは一体どういうアルバムなのか。そこに注ぎ込まれたものは何だったのか。また、スレイヴと呼ばれるファンへの思い、最近の音楽事情に対する考えなど、今のルナシーにしか語れない言葉を聞いた。

RYUICHI

●ニューアルバム『STYLE』の詞って、私には瞬間的な感情を大切にしているように思えたんですが、自分自身で一番伝えたかったことは何ですか。

RYUICHI（Vo、以下R）：今ってボーッとしてるといろんな出来事が起こるから、傍観者になって毎日過ごしても何の不安もないと思うんですよ。でも同時にそんな中で、そろそろ自分達が明日とか未来とか好きな物や嫌いな物を選んでいかなきゃいけないのかなと気付き始めてる時代でもあると思うんです。だからそれを自分自身で選んでいこうよって。その辺が一番言いたかったことに近いかもしれないですね。もしかしたらそこに答なんかないのかもしれないけど、みんなが詞や曲を聴いてそういうものを探そうと思うきっかけになってくれたらというか、何かを誘発するような部分があったらいいなって。俺は今こういうことをこう感じてて、こんなことを選んで、こんなリスクもしょってるんだけどって書くと、その姿っていうかアルバムタイトルでもあるスタイルみたいなものが伝わっていって、「ああ自分もそんな風に生きてみようかな」とかおぼろげにでも思ってくれるんじゃないかなってね。

●確かに今回の詞には、「あれ？」って思わされたり「そうだなあ」と気づかされたりしたことがいくつかありました。

R：ただ今回僕の書いた詞が何かのきっかけになったとしても、みんなが今まで全く気付いてなかったんじゃなくて、たぶんどっかで見てたと思うんですよ。自分の視界の中には入ってるんだけど、世の中が混乱してるし、情報が混乱してるから、たまたま見えにくくなってただけで。それが詞になって飛んできた時に、「ああ」って分かりやすくなるっていうね。

●でも、そういう詞って自分自身がきっかけに気付いてないと生まれないと思うんですけど、常に詞を作るという意識を働かせてアンテナを張ってたり？

R：うん、もう5作目なんでね。1作目の詞を書いた19か20ぐらいの時は、約20年っていう自分の歴史がいくらでも詞を書く材料になってくれたんですよ。でも今は、『MOTHER』を書き終えた日からこの『STYLE』を書き始める日までの一日一日がすごく大事になってきたりするんですよね。今も『STYLE』を作り終えたばっかで、何か書こうと思ってもなかなか出てこないんだけど、出来るだけ早い時期に新しい経験をして、日常に思った疑問とかをノートにちょっとずつ書いていく。すると次の作品を作る時に「俺こんなこと感じてきたんだな」っていうのがすごくあって。それはずっとやってます。突然書き始めようとしても、絶対に苦しんで書けなくなっちゃう。

●詞を作る時もメンバーの意見をどんどん取り入れていくそうですけど、基本にはそういったRYUICHIさんの考えがあるわけですよね。そこに他のメンバーの考えが入ることで、最初思っていたことと違う方向に行ってしまったりしないんですか。

R：いやあ、たくさんありますよね。極端な話をすれば、原曲を持ってきた作者が最初に抱いている世界観とメッセージっていうのは絶対にあるはずで、それを僕がただ感じるままに書いて「こんな詞を乗っけたい」と作者に提示した時点で、絶対ギャップがあると思うんです。それで「じゃあ本当は何を言いたかったの」ってディスカッションしていって、それをまたチューニングしていくわけですよ。そして今度はその二人の中で出来た物を他のメンバーにも見せて、「でも、これはこうなんじゃないか。ああなんじゃないか」って話し合う。それはもうバンドをやっていく上で慣れたものというか。一人でやってるわけじゃないからね。逆に言うと一人でやってる物だろうが、バンドでやってる物だろうが、たぶん完ぺきなものがないと思うし、完ぺきなものがないからこそ、ディスカッションして余分なぜい肉を切り取っていくってことは、すごくいいことなんじゃないかと思う。

どうなるか分からない現状がバンドでやってて楽しい

●でも、例えば一人の表現者として「自分だけでやってみたい」なんて思ったり。

R：まあ、あるかもしれないですね。ただ「今どうしてルナシーでやっていたいのか」っていうと、「他の四人が何考えてるか分かんないぞ」っていう部分がまだたくさん残されてるからで。ある時は「何でそんなことになるんだろう」って不安になることもあるだろうし、逆にときめけるような発想もあるだろうけど、そのどうなるか分からない現状が、今バンドでやってですごく楽しいんですよね。

●詞はどんどん分かりやすくなってきてるし、変わってきてますよね。今後の自分の詞に対して課題ってありますか。

R：曲のイメージで詞の言葉遣いとか、世界観とかがずいぶん変わってくるんで、ある意味ではすごく限定された中で、詞を書いていかなければいけない。なおかつ、物語を作るんじゃなくて自分が歩いてきたことを物語にするわけで、そこにはものすごく生き様が出ていくんですよ。だから自分が毎日ボーッとしてたら、いつか書けなくなっちゃうんじゃないかなっていうプレッシャーはすごくあるんですよね。小説とか絵本とか昔の哲学者が書いた本とかいろいろ読むけど、結局「すごいなあ」と思ってもマネするわけにはいかないでしょ（笑）。だからどう考えても自分が音楽とかけ離れたところで体験したものとかが、重要になってきてる…。だからすごく難しいですね。いつも思うけど（笑）。

●でも、それってボーカリストとしても言えることで（笑）。

R：そう。だれかが好きでその歌い方をマネするっていうのは、もう今さらっていう感じですからね（笑）。やっぱり河村隆一っていうボーカルスタイルがどっかにあると思うし、でもそれを自分で絶対こうなんだっていう風に決めたくもないんですよ。どんどん進化し続けていく。そうありたいと願うからこそ、不安もあるしプレッシャーもあるしね。

●『STYLE』のボーカルが、すごくRYUICHIという人間を感じさせてくれるのは、そういうところから来てるんじゃないですか。

R：う～ん、今回は聴いた時に自分の言いたいことが伝わるようにと思ったんですよ。でも、これがすごい難しくて。歌ってる時じゃなくて、自分が一回録った歌をブースから出てきて聴いた時に「ちゃんと詞が伝えられてるかどうか」ってことをすごく気にしてたんです。「言葉が入ってくるようになったな」とか「感情が伝わってくるようになったな」ってね。要はうまく歌おうと思えばいくらでも歌えるようになってきてるんで、逆に自分の唱法にブレーキをかけて言葉をかみしめてちょっと引くような感じで歌っていくというか。だからやってる時は体温が低い感じでクールなんだけど、聴いてる方には言葉が突き刺さってくるってことがすごく重要だなと思ってた。何か歌いすぎちゃうと「あっ、俺すごく気持ち良さそうだな」とは思うんだけど、今度は言葉が見えなくなってきちゃったりしてね。

●うまければいいってわけじゃないのは、一番難しいところですね。

R：あるビデオで、有名な車を作った人がおじいさんになって「世の中には完ぺきなものなんかなくて、だからこそ人間は進歩して行く。で、それに従わなければいけない」と語っていたんですよ。その「従わなければいけない」というのが僕にはすごい突き刺さってきて。確かに完ぺきなものなんかあるはずがない。でもだからこそ進歩し続けようとするし、それに従うってことは、完ぺきなものはないからとあきらめずに、ものすごく前向きに歩き出してるわけですよ。その辺の強さって言うのかな。それが僕の中には大きなものとしてあって。

●進歩していくということは、『MOTHER』から

『STYLE』のように変化するってことも含まれますよね。変わるってことを「売れなくなったら」と怖がる人達も多いんですけど(笑)。
R：ねえ。でも自信過剰なんですかね(笑)。何か40歳になっても50歳になっても歌を歌って飯食ってるような気がしてるんでね。まあ、これからもいろんな時期があって、ルナシーもずっと昇っていくかもしれないし、ある時期から平行線かもしれないし、売れなくなるかもしれない。でも、僕は個人的に「自分は絶対に歌を歌って詞を伝えることを続けていきたい」って思うよりも、自分はそれを求められていく人間なんじゃないかなとどっかで思ってるんですよね(笑)。だからあんまり不安はないですね。売れなくなっても、じゃあ次に売れるものを作ればいいやって。それは絶対これが売れるからって言うことじゃなくてね。僕は、けっして売れるための法則を知っている人達はいないって思うんですよ。例えばものすごいセールスを上げてる小室哲哉さんがプロデュースする人達にしても、小室さんが好きな物を追い求めてやったら時代とマッチしたんだとどっかで信じてるんです。確かに聴きやすい楽曲と、聴きにくい楽曲ってあると思うけど、でも売れるための方法論はだれも知らないはずなんですよね。だから逆にそれをちょっとでも意識し始めたらもう終わっちゃうんじゃないかなっていう。やっぱり自分の好きなものを、時代の中からちゃんとリアルにつかめてるかどうかだけだと思うんですよ。つかめてればそれはたぶん時代と同調すると思うし。僕は結構リアルなことをやってるつもりだから、そんなに恐怖感ってないんですよね。

●"売れる売れない"に関してはうちの読者のページにもよく出てきて、最近特に多いのが「カラオケで歌うために音楽を買ったり聴いたりしてるのがイヤだ」ってものなんですよ。ルナシーの曲がカラオケのために売れてるとは思えないんですけど、自分たちの売れ方についてはどうとらえてます?

R：まあ、こういう風になるだろうなっていう曲作り、詞作り、アレンジですよね。今はそういうものを作ろうと思ってるから幸せだし。でも他のアーティストの人達にカラオケで歌うためにCDを買うファンがたくさんついていたとしても、それはそれでいいんじゃないかなと(笑)。俺たちのファンの中にわずかながらも「カラオケで歌いたいからシングル買いました」っていう人がいたとしても、何かそれはそれでいいかなって思う。

今カラオケって切っても切り放せない状況ですけど、僕もカラオケから教わったことって結構あるんですよ。例えば歌をちょっと歌える人は歌い過ぎて、本人は気持ちいいんだろうけど聴いてる方は何かもうヤダなと思うこととかね。あとお互いを気に入ってる二人がいて、男の子が「DESIRE」を歌ったとするでしょ。彼がなぜそれを選択したかっていうと彼女に対する気持ちだったりして、彼女もその詞を見たときにちょっと気持ちが高ぶってきたりする。そういう自分のリアルな感情と詞がリンクしてる素晴らしさっていうか、「ああ、こういう時に初めて歌い手と聴き手が通じるんだな」ということもカラオケで教えられたりしたんですよね。それにやっぱり詞っていうのはリアルであるべきだし、いろいろな人が感情移入できるすき間が必要なんだとかね。だから何もかも否定するっていうのは良くなくて。まあルナシーのファンがみんなカラオケを歌うためだけに買ってるとなるとちょっと辛いんだけど(笑)、いろんな考え方が出来ると思うんですよ。音楽はもともと自由なもんだから、本当に好きに楽しんでもらっていいし。

●いろんな意見はみんなが真剣だからこそ出てくるものですが、そこにがんじがらめにならずに見方を変えることも知ってほしいですよね。例えばルナシーに限って言えば、東京ドーム前に「あんな広い場所でもファンはメンバーなのか」という意見が来たんですよ。

R：メンバーだって言ってる一番の意味っていうのは、けっしてBGMのように聴いてほしくないし、やっぱり一人ひとりがその曲に対して自分の実体験を重ねていってくれたらどんなにステキだろうっていうのがあるしね。僕の感情だけで歌ってるんだけど、その曲に一人ひとりの思い入れがあった時に出てくるみんなの表情とか熱とか叫ぶ声とか、それは僕には作れないし、そんな目に見えないエネルギーみたいなものをぶつけ合ってその空間自体を作ってるんだということで「ファンもメンバーだ」って言ってるんですけど。

売れるための法則を知っている人はいない

アーティストのカリスマ性っていうのは、アーティスト達の中に飛び抜けた神様がいてってわけじゃなくて、その時に付けていったお客さんの層とか、熱さとか、本当に求めてるかそれとも軽い気持ちかっていう、その辺の度合いによって変わってくると思うんですよ。求め合う力っていうか。そしてそんなものを持ったメンバーがどれだけいるかっていうのが、バンドパワーだと思うんです。だから僕は東京ドームに対して気負いもなかったし、安心して何の不安もなくステージには立ててたんですよ。

●そういうファンだからこそ、逆に「大きくなってほしくない」とか「変わってほしくない」っていう複雑な感情も生まれたりしますが…。

R：これもまた音楽を作る方法論に近いんだけど、そういう方法論を知ってるふりして「人がこう思うだろうからこうしてやろう」っていうのはウソのような気がするんですよね。実はファンの子を一番納得させられるのは、メンバー一人ひとりが本気でときめいてる時の表情とか、動きとか、俺だったら歌声とかだと思うんだけど、そこにちょっとでも「あいつらこうやったらいいだろうな」っていうのがあると、その時にときめきがパワーダウンするじゃない。70%とか80%でライブやったら、もう全員がゲンナリすると思う。それよりはずいぶん変わっちゃったけど、今日楽しそうだねっていう何か分からないエネルギーが全体を包み込むっていう方が必要なんじゃないかな。そんな強さがもう何年も前から売れてくるごとに強くなっていくし、求められてることなんだとも思う。

●そのときめくパワーで作ったアルバム発表の後は、ライブですね。どんな風にやろうと思ってますか。

R：やっぱりその時の感情に素直にっていうのが大きいでしょうね。一番素晴らしいのは、伝えられるってことだと思うから、それに向かっての努力はやっぱりしなくちゃいけないなと思って。

●まずは『STYLE』を聴いて、みんながどういう反応をするかですね。

R：もしかしたら、どんな聴き方しても良いっていうアルバムじゃないかもしれないですね。だから本当に好きな人はものすごくのめり込んでくれるだろうけど、何となく好きだった人はもう聴かないって思ってしまうくらいヘヴィなアルバムかもしれない。でも、それが誘発してもっともっとファンだと言ってくれる、もしくは僕達がメンバーだと思える人達が固まっていくというか、僕達に近づいてきてくれるアルバムにはなってると思うんですよね。でも変な話、このアルバムが売れたら面白いですよ。このアルバムが百万枚とか売れると、結構笑っちゃうなあって(笑)。

[インタビュー・山田純子]

SUGIZO

●昨年のドームに関しては、うちの読者からも「あんな大きな場所のライブで、私達はメンバーとして本当に参加できるのだろうか」という困惑した意見がたくさん届いたんですよ。

SUGIZO(G、以下S)：そういう問題って昔からあるんですよ。例えば、初めてホールライブをやった日本青年館の時も、メジャーデビューする時も、武道館をやる時もいっつも同じなの。ただ俺にとってライブというのは、俺たちが演奏してファンのみんなが見に来るんじゃなくて、一緒にライブをやっているっていう気持ちなんですね。俺たちとファンとスタッフのみんなが集まって、その場所だけの何かを作ろうとしている、それがライブだという思いがあるんです。それに今いるファンと俺達だけで楽しいライブをするのは簡単だけど、やっぱりいろんな人にどんどん音を聴いてもらいたいし、いわゆるルナシーのファンにももっとデカくなってほしいし、新しいモノを拒絶してほしくないし、そういう意味では常に戦いなんですよね。

否定派意見と肯定派意見のぶつかり合いでどんどん新しくて大きなものが生まれてきているの。だからドームの時もそうなるだろうなと思ったし、だからこそ俺達はドームをライブハウスにしなければいけないと思った。それは俺たちだけのパワーじゃなくて、ファンの子たちの思いでもあったんですよ。だから責任は俺たちにあるけれども、それと同じぐらい重要な役をみんなが持っている。ライブって百人であろうと、1万人であろうと、それが1人欠けただけで違ったライブになると思うんですよ。それぐらい一人ひとりの"気持ち"とか"魂"とか"思い"っていうのは重要だと思うし、それを大事にしたかった。だから逆に今、いくら大きな所でライブをやっても、俺達とお前達の"友情"ってのは変だけど(笑)、何か求める思いがあれば、絶対にどこでもライブハウスに出来ると思いますね。

●物理的な距離は、もう超越してしまったと。

S：だって俺、渋公だって目が悪いから見えないもん(笑)。目が悪くたって感じられるじゃない。大げさだけどベートーベンは耳が聴こえなくても、音楽を作ってたじゃないですか。だからそういうもっと感覚的なつながりを大事にしないと。俺たちは東京に住んでて、全国のファンのほとんどとはいつもは会えないわけだからね。遠距離恋愛じゃないけど、そんな気持ちでいるわけで、そう思うと日常的な距離って問題じゃないような気がする。

●それをあまり意識しすぎるとアーティストって何にもできませんよね。

S：そうですよね。逆に一つの場所にずっととどまってグルグルやって行くのならいいかもしれないけど、やっぱりやるからにはどんどん広がっていきたいしさ。すごく難しい問題なんですけどね。

●このドームや『MOTHER』ツアーの経験って、当然ニューアルバムの『STYLE』に生きてると思うんですが、僕の印象では特にライブ感覚を意識的にアルバムに詰め込んだのかなと感じたんですよ。

S：それはメンバーごとに全然違うと思いますけど、俺は、むしろ全くそれはないです。もちろんライブでのテンションとか、精神的な行動とかは重要だと思うんで、出来るだけ激しさとか、グルーピーな部分はパックしたいんだけど、逆にライブの音像ってのを信用してないですからね。だって、いいニュアンスとか、すごく気に入ったプレイが出来たとしても、それがどこまで通用するかといえば、そういうもんじゃないと思うんですよ。ライブってもっと大きなものだから。だからレコーディングとライブは切り離して考えています。

すべてを水に流して自分を真っ白にして出来た音

●今回のアルバムに対してはもう一つ"変化"というものを感じて、それを面白がっているんですね。でも逆に『MOTHER』がすごく評価されたアルバムだから…。

S：大丈夫かなと(笑)。最初は自分にとって『MOTHER』というアルバムがすごい怪物だったのね。例えばあれが5万枚しか売れなかったとしても、内容、クオリティー、表現したい部分が、すごく出来たアルバムだったんで、やっぱり同じように考えていたと思うんですよ。だから今回、あれが一番のライバルだったんです。プレッシャーもあったし、「『MOTHER』を越えなきゃ」という脅迫観念がすごくあって。同時に「シンプルにしなきゃ」というのもあったし、とにかくいろんな目標が最初にあったから、実際にレコーディングに入ったら、そういうもので自分ががんじがらめに委縮しちゃって、何にも作れなくなっちゃったんですね。ものすごくドツボにはまったの、今回。物が作れなくなっちゃって、「もういいや。どうでもなっちまえ」って途中で全部捨てたんですよ。

良く言えば"吹っ切れた"、悪く言えば"諦めた"(笑)。「『MOTHER』がどうのって関係ねぇや。何にも考えずにやろう」と思ったし、「シンプルなものを作るって公言したけど、入れたい音は入れたいんだからいいや」と思ったしね。だから、すべてを一回水に流して、自分を真っ白にしたのね。その途端すごく楽になって、たくさんインスピレーションがわいて出来た音なの。でも、それに気付いたのがレコーディングのかなり末期だったんで、忙しくて押したけど(笑)。

●なるほど(笑)。

S：でも、言われたとおり、今までの部分というのはかなり捨てましたね。大事に大事にしていた部分を愛し過ぎちゃうと守りに入っちゃうし、そういうのはつまんないしね。ある意味で「どうなってもいいや」ってなっちゃったんだけど、逆に今思うとそれが自信だったのかもしれない。単純に『MOTHER』より1年半は時間が過ぎていて、その間すごくいろんな思いをしてきたし、いろんなものを吸収してきたし。それで何も考えずに自分を出せば『MOTHER』以上のものが出来るに決まっているから、「どうでもいいや」って思ったの。それが良かったのかな。

●そういう自信は昔から持っていた?

S：俺、自信がすごくあるときもあるし、だれよりもないときもある(笑)。俺は特にそうなんですけど、今までは完ぺきなビジョンがあって、イメージがあって、行き先の光がちゃんとあって、それを追いかけて歩いていくんだけど、今回は初めて出来上がるまでアルバムの顔が見えなかったんですよね。だから、最後まで本当に「これで大丈夫かな」という疑問があったけど、何かに導かれるままやってきたというか、手探りで糸をたぐり寄せてきたような気がするんですよ。

●音も表現も「荒削り」な感じでザラッとして、原石みたいに感じるんですけど、そういう原点に行こうという意識ってありました?

S：…原点よりも、リアルなものというか、手触り感とか、質感とか、感情の伝わり方というのに、幕がかかってない裸のまま状態。怖いものも、捨てるものもない、服を着る必要がないというような一番裸の感情を出すことに成功したというかね。別にやっているときは、いつもの通りやっているだけで、そんな執着はなかった。ただ、ニュアンスの方を大事にするようになって、カッチリしたプレイよりも「気持ち良いニュアンスだからいいじゃん」というジャッジの仕方をしてて。でも結果的にそう聴こえたのは精神的に裸になったし、頭を使うのを途中で断念したからかもしれない(笑)。

●(笑)「荒削り」と言った中には、ギターが今まで以上にひずんだ音でザクザクとリズムを刻んでいるように思えたからなんですけど、二人のギタリストにそういう意識は?

S：INORANにはあったと思いますね。俺はそれよりも曲を生かすための存在だったり、クリエイターとかプロデューサーみたいな人だと思うんですよね。その人がプレイヤーとしての自分に、ギターを弾いてもらっているというと

ころがあって…。それは曲が求めるんですよ。今回は「グルービーなものがほしいんだ」と曲が言ったから、そういうプレイになったと思うんです。もちろんそのグルーブという意味でのリズムって、昔と比べたらすごく自分の中での重要さは増えてきているんですけど、でもそれは意識したものではないんですよね。

●それだけにバンドとしてのリズムの一体感が、今までの中では一番濃厚になりましたよね。

S：それは俺も思いますね。それに何と言っても真矢とJのプレイヤーとしての力量がものすごく上がってきてますよね。やっぱり二人のリズムの強力なビートが変わってくると、いい意味で自然とギタリストもビートも変わりますよ。逆にどんなにギターが良くてビートを引っ張ろうとしても、タイコとベースがヤワだったら絶対にそう聴こえない。だからギターがそう聴こえるのもタイコとベースのお陰のような気がするし、バンドのプレイヤーとしてのみんなの成長があると思いますね。

●ギタリストのSUGIZOさんってクリーントーンやロングトーンとか、それこそいろんな音色でプレイするんですが、プレイしてる音色によってその時々の心理状態って違うと思うんですね。例えばロングトーンを弾いている時ってどんな気分ですか。

S：引っ張って、引っ張って、引っ張ってよだれが出ちゃうような気持ち(笑)。その時は空を翔んでいるような感じ。でも、引っ張ってないと落っこっちゃうというか、ターってジャンプしているだけ。実際は飛べなくて力尽きると落っこちる。その飛んでいる状態を出来るだけ引っ張っていたいという。そういう気持ちになるときが多い。

●じゃあ体にも力が入っていたり(笑)。

S：するし、結構変なポーズで弾いている。でも本当に気持ちいい時は体は全く力んでない。感情と指と弦とアンプがちゃんと一致したときは、体が音の一部になっているような気がして、そうなった時は絶対にうまくいく。逆に自分で「弾いているな」って思う時や楽器が自分の体の一つになってない時はダメですね。

●じゃあ、ひずんだダーティーなサウンドでリズムを刻んでいる時は？

S：グイグイ腰をグラインドさせているような気になりますね(笑)。飛んでいる気持ち良さと、地べたにベターっと張り付いてがんじがらめになっているサディスティックな気持ち良さの両極端があるような気がします。

●よくフレーズの中でエフェクターでピッチ(音程)を過激にアップダウンさせますけど、そういう時は？

S：とにかく突き抜けたいときにしますね。感情を表現する音が足らないときに、もっと行きたいときにウワ～ン！ってやると痛いところにカーンって入ってくるみたいな、かゆいところに手が届くみたいな(笑)。

●じゃあクリーンなアルペジオの時。

S：音のひと粒ひと粒がすごくおいしそう(笑)。うまく言えないけど、食べたくなっちゃうような触感。ナイフのようなときもあるし、泡のようなときもあるし、消えちゃいそうだけど実は一番強そう。とにかく弾いていて気持ちいい。

●SUGIZOさんってノイズにもすごく関心があると思うんですけど、曲を作る時って表面的な過激さよりも、その中にある美しさにひかれているってことないですか。

S：例えば「TRUE BLUE」は本当はノイズだらけなんですよ。ノイズをたくさん重ねると自然にそれが浮遊感とかキレイに聴こえたりして、感情が行っちゃってて音程にならないという感じなんですね。歌うんじゃなくて叫んでいるような。ライブでもそうなんですけど、すごい自分がブワァーンと高まってしまうと、もうチマチマしたフレーズなんて弾いてられないんですよ。もうかきむしるだけ。その感覚がすごく好きで、時にはそれがすごい美しく感じたりもするしね。逆に研ぎ澄まされたすごく繊細でクリーンなんだけど、それが一番ナイフみたいにとがって血のにおいがするような暴力的に感じる時もある。"美しい"ものと"みだれた"ものって対極にあるようで、実は背中合わせのような気がするんですよね。だから、その間をすり抜けるのが好きみたい。ノイズまくりの曲なんだけど、それがすごくキレイな曲だったりとか、すごいヘヴィな曲なんだけど、クリーントーンがカツンって入って来てキレイに聴こえたりとかね。

●『STYLE』にはそんな感情があふれるほど詰

美しいものとみだれたものの間をすり抜けるのが好き

SUGIZO

め込まれているわけですね。今回ソングライターとしてはどうでした？

S：自分にとって一番新しかったのは1曲目ですよね。あれはいい意味であんな風になったけど、実はもっと50年代や60年代のオールディーズのスタンダードナンバーっぽくしようと思ってたんですよ。それでいろいろ試みたんだけど、全く曲が受け付けなくて。俺が書く曲って二面性があるんですよ。本当に自然に生まれてくる場合と、実験クン的な気持ちから出来る曲(笑)。「こういうこと試してみたいなぁ」って思っているうちに自然に出来るんだけど、例えば今回のこの曲もそうだし、「1999」って曲もそうだし、前でいえば「CIVILIZE」とかもそうなんですけど。現代音楽の作曲家っていろんなアプローチとか挑戦しながら曲を書くじゃないですか。そういう部分に近い。逆にメロディアスの曲とかは自然にわいて出てくるんですよね。

●でも、この曲を1曲目に持ってくるのもすごいですよ。

S：すごいですよね(笑)。別に深い意味はなくてたまたまなんですけど、いまだに「いいのかなぁ」って思ってます。俺は本当は「G」から始めたかったの。「いきなり入ったらカッコいいじゃん」って。でも「それよりも、面白いことやろうよ」って声が多くて。

●ルナシーのサウンドやSUGIZOさんのアプローチには、すごく映像的なイメージが同居しているんですよね。だから将来は映画音楽とかの方向に行きたくなるんじゃないかと。

S：分かられておりますねぇ(笑)。俺の夢ですね。いつかサントラはやりたいです。

●例えばどんな映画の音楽をやってみたいですか。

S：一番好きなのは「ブレードランナー」、それとか「2001年宇宙の旅」みたいなSFモノも好きで、最近では「ストレンジ・デイズ」とか「セブン」。いわゆる日常的なものでは出来ないですよね。

●単純なラブストーリーは辛い(笑)。

S：一番挑戦かもしれないけど、結構苦手で、どっちかといえばトリックものの方がいいし、あと坂本龍一さんの「戦場のメリークリスマス」とか好きだし、フランス映画なんかいいですね。時代劇はイヤですけど(笑)。

●でも「ブレードランナー」はいいかもしれないですね。

S：「ブレードランナー」のサントラは大好き。俺みたいなとがっているミュージシャンが自然にやった音がサントラには合ったりしますよね。最近ほとんど海外のサントラって、そういうミュージシャンのオムニバスが多いし。例えば「クロウ」とか「ナチュラル・ボーン・キラーズ」とかそうだしね。サントラは最近面白い。やっぱり映画音楽は好きだな。

●じゃあ、今後を楽しみにしてますね(笑)。

S：ゴットファーザーみたいなテーマを作りたいですね(笑)。

〔インタビュー・西原　朗〕

INORAN

自分にウソをつかず、より自分らしくありたい

●この前会った時はトラックダウンの最終日でしたけど、最近は作業的に落ち着いてリラックス状態って感じですか。
INORAN(G、以下I)：う～ん、取りあえずはっていうぐらい。落ち着くって言ったら、こうやって取材受けて、プロモーションして、アルバムが出て、このアルバムを表現出来たツアーが終わったなあって思える最終日が終わらないとね。
●じゃあ、今はまだ始まりって感じなんですかね。
I：まだ下準備って感じ。
●ニューアルバムを聴かせてもらったんですけど、すごく生々しい音ですよね。だから勝手に東京ドームでのライブや『MOTHER』のツアーで得たものが、具体的な形として出てきた結果なのかなと思ったんですが。
I：まさにその通りだし、その時の思いっていうのは入ってるし。『MOTHER』を出してからこれを作るまでに思ったことはすべて入れてますね。やっぱりツアーは大きかったですよ。
●『MOTHER』っていうアルバムは、ライブでさらに完成度を高めたっていう気がしたんで、その実感を元に『STYLE』は荒々しさとかそういう所を出そうという流れになったのかなって。
I：そこまで意識的にはやってない(笑)。曲ってやっぱある意味では自分の子供っぽいところがあるんで、いつまでも完成するってことはないんですね。人間と一緒で80歳で死んじゃう人がいて、そこで完成したかっていうと完成してないですよね(笑)。そういうニュアンス。
●じゃあ、レコーディングが終わった瞬間でも「まだまだ」っていう意識が強いんですか。
I：まだまだっていうか、その瞬間にはもうこれ以上出来ないとか、これがベストだって思ってますけど、あとは聴いてもらった人がどう感じて、ライブに来てまたそこでキャッチボールをして。まあ、みなさんで育てていくんですよね。自分も育てるし。
●でも『MOTHER』と『STYLE』を比較すると、ルナシーの核っていうものは変わってないと思うんですが、やっぱり表面的なものは大きく変化したし、『MOTHER』がすごく評価を得た分、そのチャレンジに怖さはないのかなと。
I：中は変わってないし、表面的に変わったとしても変わらなきゃウソだと思うんですよ。『MOTHER』を作ってから、1年ぐらいたってるし。
●でも一つ当たれば、そこにハメていってしまうというのはよくあることじゃないですか。
I：自分にもそういう曲調とかはありますよ。自分が好きなものっていうか、変わらないものっていうか。でも一人で作ってるわけじゃないし、核には五人がいるわけだしね。俺はとらえ方としてファンとかメンバーとかスタッフとか携わってくれる人達とかそういうルナシーな人達で作り上げたアルバムって感じがするから、これだけ大人数いると、表面的には変わるのが当然かなあって思ってるんですよ。まあ、俺は1年間過ごしてきたわけだし、それは毎日会う人の髪の長さが伸びたのが分からないけど、たまに会うと伸びたっていうのが分かるみたいなね(笑)。ちょっと違うかな(笑)。
●ギターアプローチに関してはキーボード的だとよく言われてるんですけど、例えば演奏を絵に例えるとバックグラウンドを描いてるんだとかって意識はないですか。
I：う～ん、そうは解釈してないんですけどね。他の4人のすき間とか自分が表現できるところでやってるぐらいで。
●色合いの人って感じがしてたんですけど、『STYLE』ではあんまりそういうところに固執していない気がして。これは何か自分の中で変化があったのかなと。
I：どうでしょうね。うちって最初に個人で曲作ってきて、それをみんなで合わせるんですよ。今回30曲ぐらいあったんですけど、その最初の感触とか、その曲を持ってきた人の思いとか、そういうところを大切にすることに比重を置こうかなって思ったアルバムで。昔はギターで言えばSUGIZOと打ち合わせしたりしてたんだけど。
●今回はどうしてそういう感情的な方に引かれたんでしょうね。自然な流れですか。
I：うん、そう。それにこれだけいろんな人に聴いてもらってるし、これからも聴かせたいし、また聴いてない人にも聴いてもらいたいしね。そういう期待されている部分と、自分を投影してくれてる人とか、一生懸命応援してくれる人に無責任なことは出来ないって部分と、やっぱり自分も人生かけてるんで自分にウソをつかず、より自分らしくありたいかなって思った時に、感情っていうのはやっぱり大事かなって。
●本当の自分を見せたい。
I：うん、今の自分とか。それがライブだと思うんですよ。今回のアルバムってその時の感情に近いものはありますね。
●本当の自分を見せていくっていうのは、ルナシーというバンドがスタートした時からあった気持ちなんですよね。
I：うん、あったと思いますよ。でも、やっぱり責任感とかがだんだん増してきたし。
●自分の感情を押し殺してたら、音楽をやる意味なんてない？
I：そんなこともない。今はイヤですけど、そういう時もあるかもしれないし。要は気分屋なんですよ。自分は気分屋なんだと思うから、気持ちを出したいっていうか。
●『STYLE』のギターに関しては、今までに比べて構造的にシンプルだと思うんですね。ルナシーはギターが2本なんだという当たり前の印象を強く受けました。
I：俺はそれよりも五人なんだっていう風に感じます。細かい位置的に言うと、俺はベースとかドラムとかに近い部分があるし、そこでも考えるとこがあるから、ギター同士ではあんまり考えないしね。高い所に行った時はボーカルがいるし、ベースより下に行きたい場合もあるし、五人の中に組み込まれてるって感じ。
●サウンド的にはタテにリズムでザクザクっと行った感じが耳についたんですけど、今回はギタリストとしてリズムに気持ちが行ったとか？
I：二人では話してないから分かんないですけど(笑)、俺はリズム的なところは結構興味のあったとこなんで、割とそういう思いが強くて。だからそうなったかもしれないですね。
●それだけにバンドの一体感がさらに濃厚になったって印象もありますよね。
I：やっぱね、みんなバラバラであり、一人ひとり広がってきてるんですけど、合わないところは全く合わないし、重なるところは余計重なってきたなっていうか。これだけ長くやってると、影響し合う部分ってありますよね。顔が似てくるみたいにね(笑)。『MOTHER』の時と音楽性が交互したメンバーもいるし、自分のタイプとは逆の曲を作ってあいつっぽいとかね(笑)。何かバンドやってるなあという感じは、今回しました。
●自分自身では影響受けたなって思うところはあります？
I：何だろうなあ。俺は結構フラットなタイプなんで(笑)。もちろん影響は受けるけど、これといってはないですね。出す音とか、そういうところでかなあ。
●INORANさんのギターには看板になるような音がたくさんありますけど、そういう音は弾いてる時によって気持ちの持っていき方とかが違うんですか。例えばひずんでるギターでリフを刻んでる時と、クリーンなトーンでアルペジオを弾いてる時の気持ちって。
I：どっちがどっちっていうのは別にないですね。クリーンでアルペジオ弾いてても、頭振ってる時とかあるでしょう、俺(笑)。普通に考えたらおかしいですもんね(笑)。
●アルペジオを聴いていると、やさしい気持ちで弾いてるのかなあとか思うんですけどね(笑)。
I：俺はそういう一般的のとはちょっと違いますね。その時のひらめきで「曲のここでアルペジオ」って決めちゃう場合もあるし。俺の中では必ず

しもアルペジオがそういう感じってことは全然ないです。ひずみもそうだし。

●今回のアルバムは従来のイメージからだと「ここは何かきれいな音が来るんじゃないかな」と思ってても、ちょっとひずんだようなストロークが入ってきたりとか。予想を裏切るところもありますね。

I：それがうちなりの感情の入れ方とか、音色の選び方だと思うし。何でしょうね。その辺、感覚的につけてるから、よく分かんないんですけどね（笑）。だからクリーンな音が減ったと思ってると思いますけど、ひずみに気持ちが行ったっていうんじゃなくて、クリーンも大切にしたいがためにっていうか、バランスですね。

●ニューアルバムの話からははずれますが、ルナシーのツインギターって他にないコンビネーションだと思うんですよね。ギターで今までにない音を作ろうとしていることが感じられたりして。そういう実験は楽しみだったりするんですか。

I：そうですね。やりたいことですね。だからやっぱりギターで言えば何十年も弾き込んだ古いギターはいい音しますよね。新しく作ったギターっていうのはそういう意味では勝てない。でも勝てるところがあるんじゃないかと。まあ、ギターに関してはそういう気持ちでいますね。だから認めてるけど、新しく突き進みたいっていうのがある。でもギター以外は使わないなんて、こだわってないですけどね。まあ最低限は自分を入れようと思ってやってるぐらいで、キーボードは入れたくないとか全くないですよ。その辺は柔軟に考えてます。ただ出来ないから入れようっていうのはイヤですけど。

●『STYLE』でのソングライター、アレンジャーとしてのチャレンジは、どういうところになりますか。

I：そこでも言えるんですけど、自分を投影できるものっていうか。自分の気持ちを入れられるもの、気持ちいいものにした。それぐらいかなあ。

●『MOTHER』を意識したプレッシャーとかは？

I：プレッシャーは、俺全然ないです。

●「越えなきゃいけない」じゃなくて「越えられて当たり前だろ」っていう感じ。

I：うん。越えてないんだったら出さないですよ。

●じゃあ全く逆で自信というのは？

I：自信はだんだん日に日に。だから比べるっていうのは、自分でもやってるけど、みんなの判断に任せるって感じで。

●自分の中から曲がひらめく時の心理状態ってどういう？

I：どうでしょうね。俺書きとめないんですよ。だから作曲する時っていうのを決めて、バァーっと作っちゃうんですよ。例えばツアー中に悲しいことがあった、バラードを作ろう、そういうタイプじゃないんですね。だからすごく楽しいことがあって悲しいことがあって感動することがあって、そこから作曲期間に入ったらそのいろんな思いが入ってる曲が出来るっていうか。まあ、もちろん悲しいことがあったって作ることもあるけどね。

●ルナシーってアルバムのレコーディングの時に、方向性さえメンバー同士で統一したりしないんでしょ。

I：全く話さないですね。まあ合うとこは合うし、合わないとこは合わないから（笑）。アルバムに入る前に曲順だけは、みんなで決めるんですよ。その道筋が決まった後は、みんな好き勝手にやる感じですね。だから決まり事もないんで、モメる時はモメます。

●メンバー五人で曲をまとめることって想像つかないんですけど、その場にいてどうですか。

I：（笑）うちって民主主義じゃないんで。多数決は多数決なんですけど、一人がヤダって言うとやんないんですよ。ハタから見るとすごく大変だと思うだろうし面倒くさそうだろうけど、僕らはそれが普通だと思ってるから。

●今回のアルバムが例えばルナシーの問題作として迎えられたりするのはどう思います？

I：いや、全然いいと思いますよ。本当に今まで以上にこのアルバムは聴く人が自分を投影できるとか、入れるアルバムだと思うから。曲も千差万別で面白いし、否定もしてくれていいと思うし。

●自分の中では問題作ではないんですよね。

I：ある意味では、肉とか血を詰め込んだから、客観も分かんないし主観も分かんない。そういう意味では重すぎて。

●このアルバムの後って当然ツアーになると思うんですが、『STYLE』以前の曲がこのアルバムに感化されて変わるんじゃないかという期待があるんですよ。

I：そうですね。そういう期待は今までよりはデカイですね。っていうか、半年後はどういうアルバムになっちゃってんのか自分でも分かんなくてワクワクする。聴いてくれた人がどういう思いで参加しに来てくれるかっていうのでも変わると思うしね。自分もどういうものを入れるか分かんないし。期待で胸いっぱいなアルバム（笑）。

●ドームでやった経験っていうのも次のツアーで出てくるでしょうしね。

I：出てくると思いますよ。

●ドームの時には、いつもと違う観客との距離感を感じたりはしませんでした？

I：物理的には遠いけど、気持ち的には遠いとは思わなかったですよね。

●三階のスタンドなんか影しか見えないんですけど、それがすべて一つになってるのには僕も震えが来ました（笑）。ステージから見てるとどうでした？

I：巨大な生き物のような感じ。一人ひとりを見ちゃうとやっぱ遠くて小さいけど、やる気な一人ひとりが集まって、あれだけ大人数になればなるほど、すごいものが出来るんだなという。だからもう大小の融合的な、どっちのメリットもとってしまえと。

●東京ドームでやったりバンドが巨大になるにつれて、「ファンって『離れていってしまった』」という感覚になりがちみたいなんですが、そういうことに対してはどう思います？

I：う〜ん、さらに近くに行ってる気持ちで俺はやってるんですけどね。そう思ってるからこそこういうアルバムが出来たし。まあ、その気持ちは分かりますけどね。俺も好きなバンドがメジャーに行ってしまって悲しいっていうのがあったし。でもそれでは割り切れない所をやりたいなあと挑戦してる最中だし。

●だからこそ『STYLE』でやったように、さらに生身を見せていかなければいけないと。

I：うん。だからどんどんファンが増えていけば、ルナシーの中で一人ひとりのファンが作ってるパーセンテージでは小さくなるけど、存在はデカくなっていくんだよっていうか。役割は大きいんだよっていうか。そんなニュアンス。今回のアルバムもルナシーという曲を作ってる核の五人が、参加してるみんなの「こういうの作ってほしい」って思ってるのを、俺のフィルターを通して作ったつもりだから。だから今回のアルバムの曲にはそういう感じが出てると思いますよ。

●メンバーであるファンの気持ちも曲になっているということですね（笑）。

I：（笑）そうですね。

［インタビュー・西[illegible]朗］

ファンが増えるほど、一人ひとりの存在はデカくなる

INORAN

J

●『STYLE』はルナシーのにおいとかリアルさが伝わってくる生々しいアルバムですよね。そういう感覚を意識して取り入れようとしたんですか。

J（B）：そういう部分もありますね。

●例えばレコーディング前には東京ドームでのライブがあったんですけど、その影響が大きかったとか？

J：いや、それは全然ないですね。っていうか、『IMAGE』から『EDEN』『MOTHER』って感じで全部が線でつながってるから。そこだけピックアップしてという2ことはないです。ただ、『MOTHER』を出してからツアーをやったり、東京ドームをやったりいろんなことを経験してきたから、それも今回のアルバムの中で自分を形成する要素として含まれているのは事実なのかなとも思う。

●『MOTHER』は、全体的には広がりを持ったきれいな印象ですけど、Jさんのベースだけは荒々しくていい意味で浮いてたと思うんですね。『STYLE』は全体的に荒々しい感じなんですけど、これってJさんがみんなを引っぱっていったとか（笑）。

J：（笑）どうなんだろう。ただ一つだけ言えることは、今のレコーディングの技術を使えば、きれいにしようと思えばだれでもきれいに出来るんですよ。でももっと忘れちゃいけないことってあるだろ…って思ったのは、正直言ってありますね。何でこのフレーズを弾くのかとか、何でこの音が必要なのかとか、そういうのを全部はがしていった時に、何にも残らなかったら俺たちバンドとして存在する意味ないだろって。もっともっと質感のあるっていうか、リアリティーのある音。「これが俺だよ」って言えるフレーズが出来てるか出来てないかとか、空気が変わっちゃうような音とか、そういう部分。だからって前のを否定してるわけじゃなくて、前のは今これからやろうとしてる裸になったことが出来てからでもバンドとして遅くないんじゃないかなと思って。今ってロックってだれでも出来るでしょ。そうじゃないところに行きたかったっていうのは事実なんですよ。

●音を聴いてると、その思いはメンバーに伝わってるように思えますけど。

J：メンバーの意識としても、もっと本物になりたいと思ってると思うから。それに今までの方法論を焼き直してもね。「ROSIER」が売れたからって「ROSIER2」を書けばいいのかっていう問題にもなってくるし。全然そういうところを無視して、自分の中でさらに上に上がるためにはどうすればいいかというかね。

●でも、実際のところ「ROSIER2」を作ることって楽ですよね。それをしないで挑戦していくのがルナシーなんですけど、すごく勇気のいることじゃないですか。

J：それはすごく当たってると思いますね。でも、怖いこと好きなんですよ（笑）。っていうか、極論から言っちゃえばそういう通常の、今までやってきたものに対して刺激を受けない自分がここにいて、でも自分達が刺激的にならないと、聴いてる人達とか見に来てくれる人達とかに刺激って与えられないじゃないですか。もちろん分かりますよ、そういう部分って（笑）。でも何か「ROSIER」があるからいいだろうという感じ（笑）。

●じゃあ、曲が思い浮かばなくて逃げ出したくなるなんてこともない。

「うまくなりたい」っていうより説得力がほしい

J：『MOTHER』以降ないですね。『EDEN』の時はそういうのにすごく縛られていた自分がいたんだけど、よくよく考えたら求められているものが書けたとしてもそこに何が待っているのかっていう（笑）。それが自分にとって良いことかって考えると、正直言って全然つまんないことだったりすることか、楽しいことか楽しくないことか悲しいとですよね。何で怖いのか。売れなくなるからっていうことでも、そこで例えば売れて、車買いました、家買いましたってなっても、「俺の夢ってそんなだったかなあ」って思っちゃうっていうか。しょせんそこでのバカし合いみたいなのは全然くだらないなと。リスナーのみんなもそういうところを否定してるはずなのに、求めてたりしてね。まあそういうのも大切かもしれないけど、俺にはそういう気持ちが欠落してると思うんで（笑）。

●でもそれは大切なことですよね。Jさんのベースってきれいとかうまいって音じゃなくて感情に響く音だと思うんですけど、それはそういう気持ちの部分から伝わってくるんだと思うし。でも、逆にテクニックを磨けばいいってわけじゃないから、自分のベーススタイルを作り出すのは大変ですよね。

J：そうですね。でも、もともとロックってルールがないじゃないですか。そういうところにあこがれたし、すべてが自由であるべきだっていうか、そういうところから始まってるから。だからあまり何も考えてないですね。ベースに関しては、きれいに弾いたらそれがすべてかっていうとすごく疑問だし、人間がやってるんだからもっと引っかかってもいいんじゃないかなあと思ってる。だって俺はまだ全然発展途上だし、ヘタだし。じゃあ、ヘタでいいじゃんっていうか（笑）。普通はそこで「うまく弾かなきゃ」とか脅迫観念ってあるでしょ。そういうこと自体がロックじゃないなあと思ってて。だって俺が初めて聴いたセックスピストルズとかって、全くそういうこと問題じゃなかったし。何かだんだんそういうところから外れてきて、ソフィストケイト（せんれん）されていって、だんだんロックのカッコ良さが違う方向に行ってるような気がするんですよね（笑）。だからそういう部分を自分の中に残しておきたいなあと。だから「うまくなりたい」っていうより説得力がほしい。音ボーンって鳴らした時に「あっ、スゲエ」って思われるような、小手先のじゃなくてね。

●先日会ったときに、『STYLE』でのJさんのテーマは「無になること」って言われてましたよね。ライブだとテンションも上がるだろうし、何となく想像出来るんですが、スタジオで無になるってすごく難しそうなんですけど。

J：でも最近出来てるんですよね。その中に入っていくっていうか。何かうまい表現が出来ないんですけど、時間の感覚もなければ、ご飯もいらなければ…たぶん普通の人には理解してもらえないかもしれないけど、全然普通じゃないってことですね（笑）。

●テンションを上げて無になるってわけではないんですよね。

J：うん。そこに作為的なものが全然入らないというか（笑）。自分って珍しいと思うんですけど、録る時にベースのアンプを置いてあるブースの中に一緒に入っちゃうんですよ。で、アンプを目の前30センチぐらいのところに置いて、上半身裸になって（笑）、裸足になって、体全部でベースの音を感じてたいっていう。そういう自分が震えるような、自分が楽器の一部になるような…でもそんな風に言うとちょっとカッコ良すぎるから、どういう表現をしたらいいのか分からないんだけど、何かその中から誘発されるものを求めてたりするんですよ。だからレコーディング当日になって弾いてるフレーズが全然違うとか、そういうのもいっぱいありますしね。下書きをしてきれいに弾く音じゃなくて、突発的な音とか偶発的な音をパッケージできたらすごいカッコいいだろうなと最近思ってて。だってその時って、その時しかないじゃないですか。そういう方向に頭が行っちゃってる。だから僕ライブとかって好きなんですよ。すごく刹那（せつな）的だし。

●話を聞いてると「うん、うん」って感じですけど、でも実際はすごく難しそうな気が…。

J：そこまで行く作業っていうのは、結構地獄ですね。

●地獄…。

J：今自分が置かれている状況とか、バンドの地位とか、名誉とか、未来への希望とか不安とか、過去への安心感とか、そういうのを全部一切排除して、別にこの世の中に俺が存在しなくてもいいんじゃないかっていうぐらいまで落とした時に生まれてくる音なんですよ。それでカッコいいものが生まれた時っていうのは、俺はまだ音楽やる意

味があるかなって思う。ある程度この世界にいて「こうすれば売れるだろう」とかって頭で考えられちゃうし、それはすごいことだと思うんですけど、逆にそういうことに束縛されていくのはなくしたいし、昔に比べれば今はもうゼロに近いですね。そういうところからカッコいい音が生まれてきた時に、初めて自分が求めてるものに近くなれるかなって。でもそこまで行く作業っていうのはすっごく辛いですね。

●でも、そこまでして生まれた音に自分が納得出来たときの喜びは大きいでしょう？

J：そうですね。でも結構、賭けですよ。そこで生まれてこなかったらいつでもやめてやろうと思ってるから（笑）。

●（笑）じゃあ、今回は生まれてきたんですね。

J：今回は飛ばしましたねえ（笑）。

●Jさん一人でもそれだけ考えがあって、さらにルナシーにはあと四人の考えがあるんですけど、その中での自分の役割って何だと思います？

J：ガソリンであり、ブレーキであり。どっちにしても消耗してしまうんです（笑）。

●（笑）ガソリンっていうのはどういう部分でですか。

J：う〜ん、あおり屋さんですかね。でも、みんながそうだと思いますよ。うちのバンドって五人で変な刺激のし合い方をしながら核融合してると思うんですよ。たぶん他のバンドさんの前に、五人がライバルだと思うんです。だからルナシーって枠の中で競い合いがあって、パッと見たらどんどんどんどんバンド単位で成長してきてるっていう。すごく良い場所にいると思いますよ。ただ毎日毎日が吸収したり吐き出したりの作業なんで、結構死ぬの早いかなって（笑）。

●逆にそういう中にいて、これだけは変えたくないものってあります？

J：自分であることですかね。あとは、何で音楽始めたかとか、何でバンド始めたか、そういうところにいつも立ち返ること。

●そういう気持ちを忘れそうになることもある？

J：いや、忘れられれば、もっとルナシー売れてんだろうなって（笑）。結局だれかに操られるためにバンドやったわけじゃなくて、自分たちのやりたいように今までずっとやってきて、今こういうメインストリームの中にいられて、それを続けていくっていう。だからこういう業界からしてみたら扱いにくい存在だと思いますよ（笑）。

●そうでしょうね（笑）。最近、"カラオケで歌うため"の音楽が売れていることを嘆く読者のハガキがよく来るんですけど、ルナシーの曲がカラオケで歌うためだけに売れているとは思えないですしね。その意味ではファンの質も高くなると思うんですけど。

J：理想は自分の中で今あるんですけど、百万人総コア計画（笑）。

●何ですか、それ（笑）。

J：例えばルナシーを聴いてる子たちが、ルナシーに対してみんなコアであったらすごいカッコいいなと思って。でもそれって、要はバンドにかかってると思うんですよ。

あとカラオケだから嫌なのかなとも思うんですけど、自分もロックに入る時ってピンナップを見て「何だろうこの人達」って興味を持ったんですよ。それとカラオケとどう違うんだろうと。それが流行なのか、流行じゃないのかっていうのは俺には分からないけど、そういう状況とかに対してイライラしてるような気がするのね。だから否定も肯定もしないレベルに行ってほしいなと思うんですよ。もっと「いい音楽作ろう」とか「いい音楽聴こう」とか思った方が、もっとレベル的にアップしていくかなって。それはそれでほっとけばいいんじゃないっていうかね。

●でも音楽って本当はそういうものなんですよね。

J：そう。何かもともとロックって自由な発想でいたのに、だんだん閉鎖的になっていってるような気がするし、その閉鎖的な部分がロックなのかもしんないけど…。

●ルナシーというバンドに対しても、昔と今を比べて「変わった」とかいろんな意見が出てくるし。

J：「それじゃあ19歳のころに戻りましょうか？」って感じですよね（笑）。でもあの時はあの時で一生懸命だったし、今も一生懸命で。もちろん俺の根本にあるもの「だれにも負けないよ」とか「頭なんか下げないよ」とか「だれの犬にもならない」って気持ちでやってるのは全然変わってないし、でもそういう「変わってないです」ってことは、言えば言うだけ自分の弱さとして出てきちゃうような気がするのね。「じゃあ変わってやろうか」って思ったりもするの。あと言えることは、

毎日が吸収したり吐き出したり、死ぬの早いかなって（笑）

J

そのリスナーの子たちも何年も年月を重ねてきていろんな発見とかもあるわけでしょ。「君も変わったよね」っていう部分も絶対あると思うんだ（笑）。こういうことを文面にしちゃうと冷たく感じると思うんだけど、でも本当に俺が言いたいことは好きか嫌いかだけなの。カラオケで歌ってるから嫌いとか、売れてるからヤダとかって言うのは、そもそも好きじゃないんだって。そういうレベルで話をしてると、日本のロックっていうのはもっともっとクソになっていくような感じがする。こういうメインストリームのシーンの中に演歌がいたって、民謡がいたって、ロックがいたっていいじゃない。そういうシーンが出来ていけば、日本の音楽って確固たるものが出来てくると思うのね。何かそういう部分をブチ壊していくためにやってるのに、いつまでたっても何も変わらない。何も変わってないのはリスナーもなんじゃないかなというのはすごく思う。

●ルナシーが音楽に真剣に取り組めば取り組むほど、ファンの子たちも音楽を聴いて成長していくと思うし、同時に真剣になりすぎて熱くなってしまうし（笑）。

J：うれしいことではあるんだけどね。みんな真剣に考えてくれるから、そういう問題っていうのがいっぱい出てきて。

●では、最後にもうすぐツアーも発表になると思いますけど、私自身は『STYLE』を聴いてライブの予想がつかないんですね。Jさんはどうしたいと思ってます？

J：今回自分が作った曲には、繰り返しのシンプルなコード進行が多いんですよ。だからもっとライブに"のりしろ"をつけるっていうか、ライブがどこから始まってもいいし、どこで終わってもいいっていう感じにしたい。もっともっとカオス（混沌）にしたいんですよね。いわゆる今までのコンサートって感じから脱却できれば面白いかなあと思ってるんですけど。

●また、そういう面白そうな方向に行くわけですね（笑）。

J：（笑）『MOTHER』ツアーの時から、毎日違うメニューでライブやって、何かその日をすごい特別なことにしたくて。

●表現者としても、その場でのハプニングを自分たちに取り入れて見せられるってことは一歩前進って感じだし。

J：そうじゃないと、もう僕らにとって刺激的な音楽っていうのは生まれてこないような気がする。

●でも、こうやって語ってもらったことを読者やリスナーが本当に分かるのはライブだと思うんですよね。

J：そうですね。ぜひ、いらしていただきたいですね。私は逃げも隠れもいたしませんって書いといてください（笑）。

［インタビュー・山田[illegible]子］

真矢

●うちの読者って雑誌のテイストに合わせてか、言いたいことをハッキリ言う人が多いんですが、東京ドーム前には「ルナシーがどんどん巨大になって、ついにドームでやる。それでも私達をメンバーと呼べるんだろうか」というハガキをきっかけに、"ルナシーとファンの関係"というテーマで盛り上がったんですよ。真矢さんはファンのそういう気持ちをどう思います？

真矢（Ds、以下S）：「何を求めるか」だと思うんですよ。俺の東京ドームでやってみた印象って「すごく気持ちの良い」なのね。でも俺ら五人がいくら頑張って、素晴らしくいい演奏をしても、その回りにいる5万人の雰囲気が良くなかったらこれはクソですよね。ドラムソロを観てもらったら分かると思うんですが、ソロをやってる時の主役って客席にいる人で、俺じゃないんですよ。いつもそう心がけてるしね。じゃあ、何で実質的な距離がある中で、あれだけ気持ち良くて、成功したと思えたのか。それは5万人が一つになったとかじゃなくて、さっき言った「何を求めるか」ってことになるんです。ライブハウスのように距離の近さを求めるのだったら、ハッキリ言って今のルナシーに付いてきちゃダメだと思う。でもそうじゃなくって、距離とかそういうものを全部飛び越えられるんだという自信があって、そういうものを求めているのなら、分かってもらえることだよね。俺は「その自信がある人ばっかりだ」って確信してるんです。だから、ファンの人達はメンバーだって言えるし。

●じゃあライブ前からドームでの物理的な距離なんて問題じゃなかったと。

S：全くね。ドーム前にあった大きな不安ってただ一つ、ドームに立ったことがない"ってことだけ。会場がデカいとか、そういうことは眼中になかったし、そもそも音楽に距離は関係ないと思うんですよ。音楽っていうのは絶対に距離を越えるし、ましてや時間すらも越えるっていう、俺にとってみれば特別な次元の存在だから。

●僕もドームでのライブは見せてもらったんですが、ルナシーとファンの関係っていうか、会場全体の雰囲気に他のアーティストとは少し違うものを感じたんです。

S：ライブとかCDを創るのって、下世話な表現なんですけど、精神的にオーディエンスとSEXしているような感じなんですよ。自分だけが気持ち良くなってもどうしようもないし、しかも裸にならなければしようがないですしね。ひょっとしたら他の面白さがあるのかもしれないけれど、やっぱりうちのライブって自分をがんじがらめにして精神的に裸になれない子が見ていてもつまんないと思いますよ。自分がライブを楽しむために、日ごろのウップンをぶつけてやるとか、そんなのでもいいんで、心と心のつながりを大切にしているの。だから、距離感とか近くなきゃ嫌だとかそういうことを求めている人だったら、答えは「アレ？」ってなりますよね。

●バンド自体は常に音楽的に上を向いていますけど、ファンとの関係についてもまだまだ上を見ていると思うんですよ。ファンとルナシーの関係の理想形はどんなものですか。

S：それは、本当になってみなければ分からないんですけど、もっともっと精神的に近くなっているものでしょうね。変な言い方だけど、うちって暴走族の集会みたいでしょ（笑）。違うことをして

「ロッカーはこう」なんて夢物語はどうでもいい

てもベクトルは同じ所を向いていて、みんなで創り上げてくれるってことではね。それにこれを夢物語で終わらせたくないから。「こうなればいいね」なんて非現実的な話じゃなくて、「こうなるべきなんだ」っていう現実的にすごくやりたいんですよ。だから、ツアーの移動の時も俺はサングラスとかしない。よっぽど酒を飲み過ぎて目がはれてる時は別だけど（笑）。それこそ、どスッピンで追っかけの子の前とか歩いてる。そうするのもその子たちとの間に垣根を作りたくないからなんだよね。大げさな言い方をすれば家族だから。家族の前でサングラスするヤツなんていませんよね（笑）。本当にそういうつもりでやっているんですよ。俺やせてないでしょ（笑）。「ロッカーはやせてなきゃいけない」とか「ロッカーはこうじゃなきゃいけない」ってあるけど、そんな夢物語はどうでもいいじゃないかって。インタビューでもファンのこと怒ったり、やさしい言葉をかけたりするのは、それが理由。

●ライブでの激しいドラミングには、ファンのエネルギーのフィードバックがあると思うんですが、それはどういう形で真矢さんの中に入ってきます？

S：まず、雰囲気ですね。本番前なんか、客席を見るとファンのパワーに負けちゃいそうな時もありますよ。ピーンと張り詰めたものがあって。あとは、耳で聴いたり、五感で感じますよね。だからドラムソロの時とか、一番目に付くのって座っている子なんですよ。ほんと目立つし、ムカつきますからね。でも逆に2時間半のライブの中で10分のドラムソロがあれば、その10分を一生懸命やれなかったことで、この子は悔しくないのかなとも思いますけどね。それでライブが充実したのかなと、かわいそうになるんですよ。だから、そういう子がいるとこっちもテンションダウンするし。

●そういうのを見ちゃうと、「何で自分たちの音楽で立たせられないんだ」って思ったりしません？

S：あります。で、それによってその子達から学ぶことが多いし。例えば会場にいる全員がノッてくれていたらそれは素晴らしいことなんだけど、気持ち良いだけで終わっちゃうじゃないですか。でも、何とかして立たせられないかなんて考えると、発展もあるだろうし。実は今のドラムソロのスタイルってそこから始まってるんですよ。ほら、俺のソロって、必ず客席の声と一緒になっているでしょ。それってライブハウス時代に初めてドラムソロをやった時に、たたきまくったら客がみんな白けちゃって（笑）。「これじゃ、イカン」ってなったことがキッカケになってんですよね。

●でも激しいドラミングですから、よくマラソンランナーがなるランナーズハイ状態に突入したりってこともあったりするんでしょう。

S：ドラマーズハイですね（笑）。ええ、なりますよ。それは毎回と言っても過言じゃないですね。いつもドラムソロから後って、あそこで何をやったかとか、何をきっかけに次の曲にはいったかとか、ほとんど覚えてない。覚えているのはライトの光とその状況だけですね。それもひどく酔った時みたいに、ある時は覚えていて、ある時は記憶がなくなって、また戻ってとすごく断片的なんですよ。でも、そうじゃなきゃ、満足して終われない自分が別にいるんですけどね（笑）。

●そうなると、プレイにどうしても当たり外れが出たり。

S：今日はすっげえ最悪だったとかってありますよ。そういうことって「同じチケット代を払ってもらうんだったら、いつも完ぺきなものを見せてあげなきゃお客さんに失礼だ」とか、「プロとしてイカン！」とかって意見がいっぱいあるじゃないですか。でも、俺はそうじゃないと思うんですよ。例えば、チケット代5000円を払ってもらって、最悪なライブを見せましたってなったら、その時の最悪のライブは他では出来ませんからね。他で見られない一面を見られたってことで喜んでもらわなければ（笑）。

●ハハハ。それこそライブは生き物だってことですね。

S：白けたライブが出来ちゃったってのは、見てる側の人にも原因があるからね。

●リズムってのは音楽の核で、ルナシーの音楽の核を真矢さんが生み出しているわけなんですが、それって自分にとってどういうことなんですかね。

S：バンド的にもライブ的にも心臓部分ですよね。だからこそ不安定でいたいというか、きっちりたたきたくないんですよ。人の心臓って緊張したら早くなったり、落ちつくとゆっくりになって不安定なものじゃないですか。それを表現したい。ライブになるとこっちも緊張してますよね。

だからレコードよりも速くなるし、テンションが上がればもっと速くなる。それは当たり前っていう世界でやってますから。そういう波がほしいんですよ。「リズムがしっかりしないとバンドがしっかりしない」ってよく言われますけど、でもいいんですよ。他の人が合わしてくれればね（笑）。わがままにやってますから。

●わがままですね（笑）。じゃあ全く同じ演奏は二度と出来ないんじゃないですか。

S:絶対不可能（笑）。公演の数だけバリエーションがあるという。で、俺ってドラムをたたく時に音を出すってことを大切にしてないんですよ。

●していない？

S:そう。スネアがいい音とかはどうでもいいんです。たたくまでの気持ちの持っていき方とか、テンション感をすごく大切にしてるんですよ。それはレコーディングの時も最高にたたいて3テイクまでですね。それ以上たたいたら、自分がつまらなくてドラムになんない。レコーディングも一緒で。だから、俺はレコーディングでもライブでも、自分で自分のプレイに鳥肌が立たないとダメですよ。そういうときめきがないと。

●いろんなタイプのドラマーがいて、確かに小手先だけはうまいんだけど、全然心に入ってこないことってあるじゃないですか。でも真矢さんのドラムは、単にビートを刻むだけじゃなく心に入っていこうって感じがあるんですよね。

S:まさにその通り、俺の原点なんですよ。俺、ガキのころから打楽器に興味があったんだけど、それは祭り太鼓とかをボンってたたいたら音が出るでしょ。その原始的なものに強く魅力を感じて。それにビビビビッて体がしびれたんですよ。そこにも魅力を感じたんです。俺って譜面全く読めないんですね。この"おたまじゃくし"はどれだけ伸ばすんだとか、黒いのと白いのとか全く分かんないんですよ。そりゃ譜面を読めた方がベターなのかもしれない。でも読めないからこそ、音楽を聴いて、全部耳でコピーするでしょ。それが今の俺を作ってるのね。

●どういうドラマーか見えてきました（笑）。ではニューアルバム『STYLE』に話を移しますが、僕は今までの作品を否定するわけじゃないんですけど、以前の音っていろいろなフィルターがかかってたような気がしてたんですね。今回はそれがずいぶん少なくなったかなって。

S:それはまさにその通りです。僕の中では『MOTHER』ぐらいから変わってきたのかな。この『STYLE』を含めて、ルナシーで5枚の作品を作ってきて、全部自分たちの最高だっていうテンションを見せてきたんですけど、はっきり言って『MOTHER』以前で見せてきたすべてっていうのは自分のきれいな所のすべてなの。でも『MOTHER』からは汚い所もすべて見せるようになって。ルナシーっていう原石があるとしたら、以前はその一角だけを磨き上げて来たって感じ。もちろんそれも一生懸命やってきたから、全部が全部気に入ってるアルバムなんですけど。今回は「原石のままでどうか」って感じなんですよね。

●前作に比べて「リズムの一体感が充実してる」と感じたんで、そのことをSUGIZOさんに聞いたら「リズムセクションの成長」ってことを強調されて。

S:SUGIZOさんがそんなことを言ってましたか、うれしいですよね（笑）。自分でもそう思います。でも、それは練習したから出来たもんじゃないですよね。さっきからの繰り返しになりますけど、自然にですよ。古臭い言い方になるんですけど「継続は力なり」っていう言葉を、その通りなんだって実感出来たんですよ。俺はバンドをやって7年目になるんですけど、その7年がなかったら出せない音ですよね。それだけだと思います。人工的に練習しても、マンネリズムみたくなっちゃいますしね。

●今回、曲を仕上げていく中で、真矢さんのテーマは何でした？

S:"今"です。今のルナシーっていうのが頭にあって、それは曲を聴いた時に感じたものなんですよ。その思い浮かんだものでたたいてみる。だから、曲を聴いた時にワクワクした感じがないとダメ。

●曲順だけは先に決めるそうですね。

S:初めに決めないと、特に俺がダメでね。今回は曲順を定めて、俺の中に一人の主人公を作ってから録音したんですよ。

●11曲のドラミングにはストーリーがあるわけですね。

S:具体的には言いたくないんだけど、仮にSTYLEくんだったらSTYLEくんの一貫した物語が俺の中にはあるんですよ。そういうのが思い浮かばなければ俺はダメ。ときめかないの。要するに、良いのは聴いて風景やにおいが広がる曲だよね。

音よりたたくまでのテンション感を大切にしてる

●今回のドラムはジャストな感覚からだんだん離れて行っている気がするんですけど、それは正解ですか。

S:間違いなく合ってますよ。あくまで、僕の中でですけど、そんなのはクソだと思ってますから。世の中にはそういう素晴らしさを認めざるを得ないドラマーっていっぱいいるんですけど、俺の性に合わないというのが分かってますから。

●そういった意識は以前から？

S:どんどん、それが強くなってきてますね。さっきも話したように音楽に対してすごく自由な所から始まってますから。だから、一生懸命バイトして買った安い中古のハイハットを初めてたたいた「チッ」って音は忘れないし、今思えば悪い音だったんですが、感動があるじゃないですか。音の善しあしじゃなくて、そういう原点に返っていってます。で、その強さってのはこれからもどんどん拡大していくと思いますよ。

●僕の中で『STYLE』っていうアルバムは問題作だっていう意識があるんで、どう迎えられるのかが一番興味深いんですよね。

S:俺もそうなの。俺の興味はね、リリースした後のファンレターはどんな反応なんだろうとか、こうやって雑誌の取材を受けてどういう具合に取り上げられるんだろうとか。あと、今の音楽シーンでは小室さんなどがはやってるわけだけど、その中でどういった位置づけになるんだろうってことですよね。でも、うちって自分達が誇れるようなものしか出さないから、それを聴いて「いい」って言ってくれる人は抱き締めたくなっちゃいますね（笑）。

●最後にライブに挑む前の気持ちをうかがいたいんですけど、これまでの『MOTHER』ツアー、ドームでのライブとこの『STYLE』のツアーとでは違いってあるんですかね。

S:どうなんでしょうね　相変わらず、イヤでしょうがないんでしょう。

●イヤ？

S:ライブ前って不安でしょ。気持ち良く終わった最後を見たいっていう気持ちで、一番疲れてる状態なんですよ。だからそれは変わらないと思いますよ。

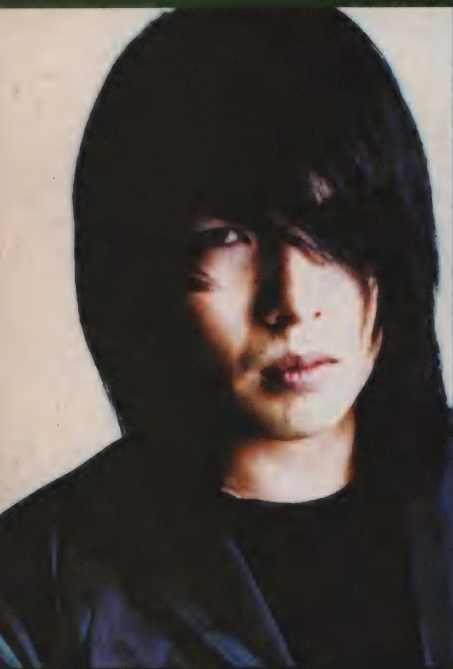
●『STYLE』がどう迎えられるのか興味があるだけに、次のツアーではその不安からくる疲れが大きいかもしれないですね。

S:大きいでしょうね。例えば『STYLE』からの曲を4曲目にやるってなると、3曲目はそのことが頭の中でいっぱいでドキドキしてるんでしょうね（笑）。

●じゃあ、その光景を思い浮かべて楽しみにしています。

S:そうですね。楽しみにしてて下さい。

［インタビュー・西原　朗］

真矢

J-ROCK'Sバイブル

ジェイロックマガジンの読者が、日本のロックを熱く斬る。

ジェイロック・バイブル

4月27日発売　定価1300円(税込み)
A5版サイズ／モノクロ／208ページ

ISDN4-916019-01-6 C0073 P1300E

これでいいのか、日本のロック。

音楽ユーザーによる、最新邦楽ロックシーン

ジェイロックマガジンの人気コーナーTRIBUNEの単行本化。95年度（'95／4〜'96／3）のJロックトピックスを振り返りながら、掲載されなかった多くの過激発言を含め、フリーク達の熱い声をテーマ別に再構成。音楽ユーザーの目から見た今の邦楽シーンを示す、まったく新しい音楽書です。

業界就業者の方も、きっと刺激されるはず…。

●お近くの書店にない場合は、郵便局備え付けのブルーの振込用紙に、住所・氏名・電話番号および「ジェイロック・バイブル」と記入の上、1610円（本体1300円+送料310円）を下記口座までお振り込み下さい。
口座番号：00980-1-51829
加入者名：(株)ジェイロックマガジン社

これでいいのか、日本のロック。

ギョーカイ関係者必読！

小室哲哉、ビジュアル系、B'z30万人スタジアムライブ、タイアップetc...
音楽ユーザーによる、最新邦楽ロックシーン総括！

「こういうのは参考になりますよ。面白い！」— 黒夢 清春・人時

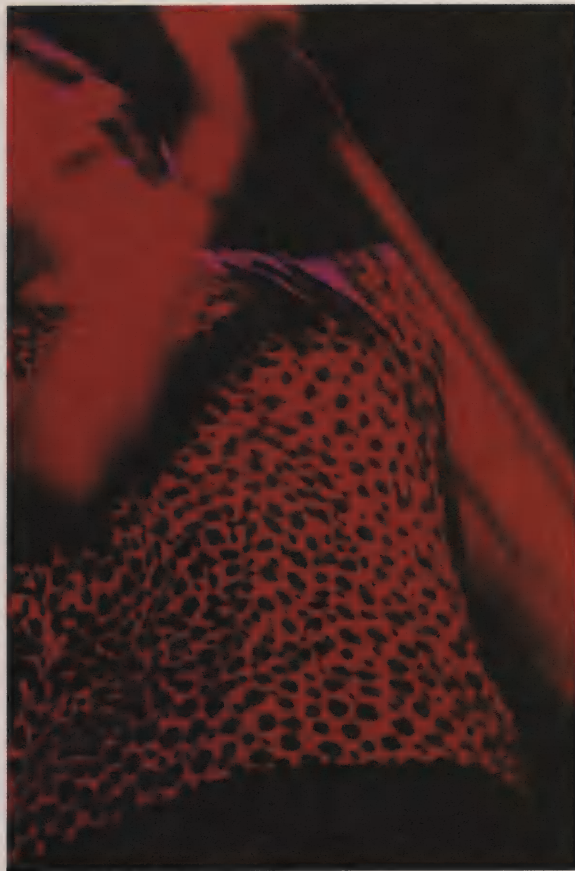
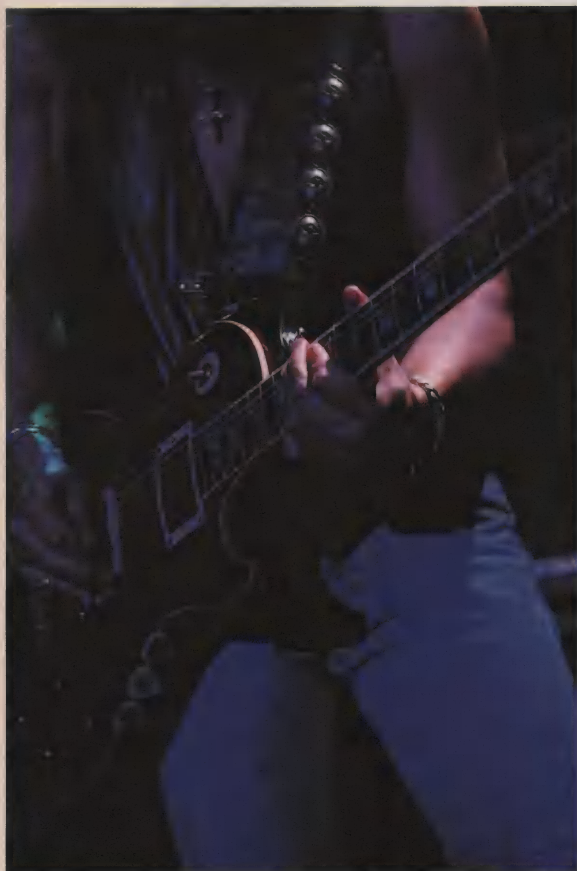
初のビジュアル散文集
「トゥー・ハーフ」
好評発売中
定価1600円（税込）
四六判サイズ　上製本　144頁オールカラー

ISBN4-916019-00-8 C0095 P1600E

TWO HALF
大黒摩季
MAKI OHGURO

お問い合わせ
(株)ジェイロックマガジン社 〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8MACビル8F TEL 06-214-1751　FAX 06-214-1731

B'z

LIVE-GYM '96 spirit LOOSE

March 30th 1996 at Kobe World Kinen Hall

1996年3月30日　神戸ワールド記念ホール

B'z

「この街で、またこの言葉を叫ぶのをずっと楽しみにしてました。『B'zのLIVE-GYMにようこそ!!』」と声を張り上げた稲葉。その言葉に沸く聴衆の歓喜に満ちた声が、轟音となってホールを揺らした。

僕はこの日、”稲葉浩志“というボーカリストのすごさを改めて実感した。「いまさら彼の実力を知ったのか」とファンから文句の一つも出るかもしれないが、B'zのライブを幾度か体験し、彼の力量というのは十分に分かっているつもりだったのに、このステージで何度もシャウトしステージを駆け回る彼のボーカルパフォーマンスに圧倒されてしまったのだ。テクニック、音域、パワー、存在感、ステージング、フィーリングなどロックボーカリストが必要とするすべての点において彼は突出しており、一声を発したときの周りの空気を変えてしまう瞬発的な威力がすさまじい。特にテンションの高ぶりを押さえ切れず発せられる強烈な感情優先のシャウトが圧巻だ。非力なボーカリストのシャウトは猫の鳴き声のような奇声くらいにしか聞こえないが、彼のシャウトは正真正銘の心の叫びである。果たして、現在のJロックシーンに本物のシャウトができるロックボーカリストが何人いるだろうか？　紛れもなく稲葉は本物のシャウトができる希少なロックボーカリストだと言えるだろう。B'zの良きサポーターである明石昌夫が彼のことを「声にロバート・プラントの成分があるボーカリスト」と語ったことがあるが、その言葉の通り稲葉のノビのあるハイトーンにはプラントに通じるものがある。それは”余裕“や”貫録“といった類のものではなく、聴く者の意識を刺激するのはエキサイトした彼のほとばしるエナジーそのものなのだ。また、声だけでなく腰をエロチックにくねらせたりするセクシーな動きや、マイクスタンドを自在に操るアクションなどのステージングからも、”バンドのフロントマンとしての存在感“はもちろん”ロックボーカリストとしてのカリスマ性“をも痛切に感じさせた。

ツアータイトル通りプレイされるナンバーは最新アルバム『LOOSE』が中心。アルバムリリースから4カ月という月日が過ぎてからスタートしたツアーだけに、その間に聴き込んだナンバーが初めてステージで披露されたことがオーディエンスには新鮮だったようで、爆発的にテンションを上昇させるよりも、まるで一つ一つの音を確かめるように真剣に耳を傾け、ライブというシチュエーションを楽しんでいる。

タイトなビートを刻むドラム、曲にスケール感を持たせるキーボード、そして迫力あるベースと、サポートメンバーの布陣が、このステージ上ではB'zサウンドを築く重要な”メンバー“として強いバンドの結束力を見せ、巨大なホールを自在にダンスホールやライブハウスにさえ変えてしまう。

ダンサブルなデジタルビートを過去のモノとし、エネルギッシュなハードロックやブルースを基盤としたダイナミックなロックサウンドを大音量で聴かせる彼らのサウンドの変ぼうが、明確に現れているのはやはりキーボードの音色ではないだろうか。シンセサイザーが作り出すシャープでカラフルな音色から、ほとんどのナンバーで耳にできたハモンドオルガンが奏でるほこりっぽい音色への転換は、彼らの目指すロックの方向性を印象付ける。

この最強なロックバンドの中心人物は、寡黙なギタリスト松本孝弘。絶大な存在感を誇る彼は定評あるテクニカルなプレイよりも感情の込もったナキのフレーズで楽曲にいろんな表情を持たせ、ソロタイムでは彼の持つ世界ともいえる70年代ロックのムードを会場全体に漂わせていた。

ライブが後半に突入すると稲葉、松本、明石のフロント3人のアクションも激しくなり、初めて耳にするライブバージョンのナンバーでさえ、体を胸の奥から揺さぶられるようなハイテンションで押し迫ってくる。以前のナンバーにもハードさをさらに加え、ここぞばかりに攻撃に徹するB'z。ステージから放たれる音を逃さず受け止めるオーディエンス。その間には強いチカラが働き、二者の関係を固く結び付けている。それはアーティストとファンの関係ではなく、音楽を発する者と受け止める者、そして同じロックを愛する者という単純でいて一番強いきずななのだ。

ハードなブルースサウンドでロックファンをうならせたものの、今まで彼らにキャッチーさのみを求めて来たファンへ問題提議した一昨年の『LIVE GYM 1994 THE 9th BLUES』。良い意味で”お祭り騒ぎ“的で開放感にあふれた昨年の『LIVE-GYM Pleasure '95 BUZZ!!』。そして今回の『LIVE-GYM '96 spirit LOOSE』。ここ3年のツアーの内容を見ただけで、B'zのスタンスが自由になったことが分かる。別に今まで何かに縛られていたのではなく、バンドとしてのスケール感や表現性が増したということだ。昨年、今まで慣れ親しんだ制作プロジェクトを解体し、もう一度二人でゼロからサウンドを作り始めたという効果が、過去のナンバーを見つめ直すことになった『BUZZ!!』であり、マニアックな部分を継承しつつもB'zサウンドとして消化した今回のツアーに現れている。

”ストイックな面とゴージャスな面を兼ね備え、よりロック的に、より開放的になった“。僕にはそんな印象が今回のツアーにある。しかし、ツアーはまだ始まったばかりだ。後日に控えている大阪公演では、この神戸から一段とスケールの増したB'zに出会えることだろう。

［文・石田博嗣］

BREAK
RASH
RECORDS

ブレイクラッシュレコーズでは今、右記コンセプトに賛同できる、エネルギッシュなアーティスト（バンド、個人を問わず）を募集しております。我こそはと思われる方は下記宛まで、写真・プロフィール・デモテープ（CD、DATも可）をお送り下さい。

RELEASE SCHEDULE

第1弾!
4月26日発売　GLAD all OVER
／Rebirth

第2弾!
6月発売予定　SHADOW TRAP OF MIRRORS
／タイトル未定

第3弾!
9月末発売予定　超大物インディーズバンド

この後も続々リリースの予定!!　第4弾はアナタかも知れない…

ブレイクラッシュレコーズ

■ 商品・アーティスト等の詳しい問い合わせ先：ブレイクラッシュレコーズ
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 7F　TEL 06-212-3435　FAX 06-213-7855

DISC REVIEW

[GREEN]
modern grey

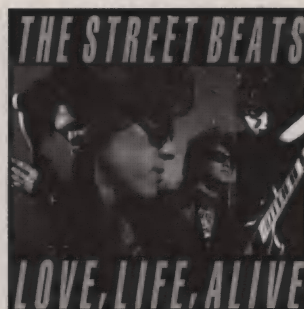
まだ知ることのない空間へと導かれていくような、どこまでも続く奥深い神秘的な世界を思わせる1曲目「Beautiful Day」のイントロダクション…。今までにない印象を与えながら始まるモダングレイの2ndアルバムは、"時間の流れ"というベーシックコンセプトに沿って作られている。彼らに従来あった"透明感"や"浮遊感"といったサウンドイメージは、よりロック的に、よりポップに彩られ、さらに突き抜けた骨太さと広大さを見せる。キーボードによる効果音や、様々に表情を変えるギターのサウンドとメロディー、センス良く絡むベースなどの遊び心ともいうべき彼らの個性がふんだんに織り込まれ、聴く者にさらに強烈なイマジネーションをかき立てるのだ。そこに大西のボイスとノスタルジックな詞が重なり、モダングレイ独自の絶妙なバランスが生まれる。この「GREEN」は、現実と非現実の間をさまよう不思議な時の流れを感じさせ、彼らの無限大に広がる音楽の可能性がいっぱい詰まっている。　（文・村田圭子）

メジャー、インディーズシーンには膨大な数のアーティストが存在し、毎週のように音源が大量にリリースされている。その中からジェイロックマガジンで紹介できるのはわずか5枚。各スタッフがどんなところにインパクトを受け、そのアイテムを推薦しているのかが一目瞭然に分かるように6項目5段階のグラフを添付した。その独断と偏見に基づいた項目についての説明は以下の通りである。

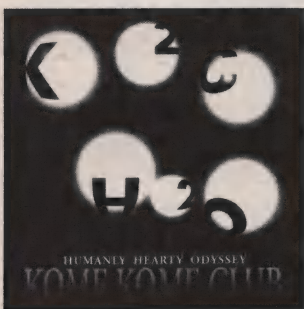
- ●ハード：重厚かつ強靭な迫力あるサウンド。
- ●ソフト：ポップ感覚を重視した軽快なサウンド。
- ●テクニック：テクニックを駆使したプレイが織り込まれている。
- ●フィーリング：テクニックを超越した感情的なプレイが織り込まれている。
- ●マニアック：表現したいと考える音楽を追究した深さ。
- ●キャッチー：不特定多数のリスナーに支持されやすい聴きやすさ。

[LOVE UNLIMITED ∞]
DREAMS COME TRUE

吉田美和のソロアルバムと同様に、新作の第一印象も「歌がうまい」のひと言に尽きる。たぶんこの印象は、今後も彼らの新作を聴く度に間違いなく感じられるだろう。吉田のテクニックうんぬんでは語れない、あくまでも感情の琴線に触れる歌声は、聴く者に新たな刺激を与えずにはいられないのだから…。

ただ前作では、彼女の持つ包み込むような温かい歌声が全面的にフィーチャーされてクラシカルな映画のサントラ的な壮大さを感じさせたために、このまま手の届かないアーティスティックな世界へ行ってしまいそうな不安がうっすらとよぎった。しかし新作では彼女の声と絡み合うリズムが独特のグルーブを生み、聴く者をグイグイと巻き込んでいく。ボトムをしっかり固め、渦巻く音や声の塊をたたきつけてきて、ライブ的な生々しさが楽しめる。そこにあふれる力強さとリアリティー。彼らの原点ともいえるこの二つの要素を作品として表現できる限り、彼らが私達を置いて遠くへ行ってしまうことはないはずだ。　（文・やまだじゅんこ）

[LOVE,LIFE,ALIVE]
THE STREET BEATS

TVのニュースを見る度に、将来の社会に対する不安が一つ増える。新聞のトップ記事は偉い人たちの悪行と悲惨な事件ばかりを報道し、片隅にある4コマ漫画ですらブラックジョークが強過ぎて笑うどころか逆に考えさせられてしまう。こんなメランコリックな時代に僕たちはもがくように生きているのだ。しかし、この狂った世界の中でネガティブになりがちな気持ちをポジティブに向かわせる何かが、ザ・ストリート・ビーツの最新アルバムには秘められている。「突き抜けていこう」「豪気にいこう」と叫ぶØKIの声と、その言葉を後押しするように一緒に歌うSEIZIのギターが胸の一番深いところを震わせ、とがったビートとそう快なR&Rサウンドが「愛」を伝え、「哀」に立ち向かう勇気を与えてくれるのだ。負け犬のようにほえるだけのメッセージソングを歌っているヤツもいるが、何度も傷みを知りながらも着実に「夢」に向かって進んでいるビーツのメッセージからは、そんなヤツらには絶対に出せない体温を感じる。　（文・石田博嗣）

[H_2O]
米米 CLUB

「やはり米米は、華やかなエンターテイメント性だけじゃなく、優れたソングライティングの才能も持ち合わせている」。そんなことを改めて実感してしまった米米CLUBの最新アルバム。この高いクオリティーやアレンジ力は、10年選手である彼らの"貫録"だと言える。カールスモーキー石井のノビのあるボーカルが映える楽曲は、ルーツでもあるソウルやファンクミュージックの血が脈々と流れながらも、時には軟派に、時にはみだらにと米米特有のムード感をカラフルに漂わせている。そして、程良い遊び心は忘れられていないものの、彼らのもう一面でもある毒々しいまでのコミカルさは影を潜め、洗練された上質なポップアルバムとして完成しているのだ。また、昨年メンバーの脱退劇があり6人になってしまった米米の再出発的な意味も含まれる本作品。アルバムタイトル「H_2O」は水の元素記号であり、"水"は「お水系」という言葉も含め様々な深い意味を持つ。この"水"が、今後どんな方向へと流れて行くかに興味を引かれる。　（文・樹音檸檬）

[月も笑ってる]
kyo

なぜかJロックシーンでは"ボーカリスト"の地位が異常に低い。"○○というバンドのボーカリスト"としてなら支持率も高いのだが、ソロで活動しているアーティストとなると話は別だ。ボーカルとしての力量ではなく、ソングライティングの才能の方に評価のポイントが移ってしまう。まるで「曲を書かなければアーティストじゃない」と言わんばかりの風潮がある。そんなシーンへ、昨年7月に解散したバンドのボーカリストがソロデビューした。当然、彼はシンガーソングライターとしてデビューしたのではなく、"ロックボーカリスト、kyo"として復帰したのである。だからデビューシングルである本作品の歌詞はkyoのペンによるものだが、作曲は彼ではない。さて、頭の固いロックファンは、それだけで彼を"アーティスト"として認めないのだろうか？　テクニックだけでは出せない彼のハートフルなボイスが、自分のメンタルな部分をさらけ出した歌に、いろんな表情を与えているというのに…。これってロックの基本だと僕は思うのだが。　（文・南出哉稔）

JUOY ANO MARY

MIRACLE NIGHT DIVING TOUR '96

March 6th 1996 at Osaka-Jo Hall

NO MARY

JUDY AN

1996年3月6日　大阪城ホール

大阪城ホールで、より力強いバンドの存在を発揮

ジュディマリ・パワー絶好調とばかりに届けられたアルバム『MIRACLE DIVING』は、前作『ORANGE SUNSHINE』で多くの人のハートをとりこにした彼らの人気を不動のものにしたようだ。今Jロックシーンで、元気いっぱいのオーラを一番感じさせてくれるバンド、ジュディ・アンド・マリー。そのオーラを先頭切って放出している人物は、キュートなハイパーボイスで等身大の自分を思い切りぶつけてくるYUKI。今回のアルバムで彼女は、いつもの歌声に力強さと女性らしさを加え、ボーカリストとしての大きな成長をのぞかせている。またバンドのサウンド面においても前作よりさらに多彩な表情を見せ音楽センスの幅の広さも聴かせているのだ。このツアーは、そんな彼らの頼もしさをライブで体験できる絶好の場となることは間違いない。しかも今夜の大阪での会場は初の大阪城ホールということで、ますます、どんなライブを見せてくれるのかと期待が膨らむ。

見渡す限り若さではち切れそうな男の子、女の子でほぼ埋められた会場の客電が落とされると、はじけ飛ぶポップコーンのように歓声が一斉に飛び交う。アルバム『MIRACLE DIVING』のオープニングSEが静かに流れると、会場の空気は次第に1曲目「Miracle Night Diving」のスタートを予感させていく。待ち切れないとばかりに高まる歓声を前に現れたのは、照明によってステージを覆うベールに映し出された恩田、YUKI、TAKUYAの拡大シルエット。巨大な三つの影は、まるで今日の彼らの気持ちの高ぶりを象徴しているかのようだ。

ベールが一気に落ちてステージ全ぼうが姿を見せた時、爆発したようなヘアスタイルに真っ赤な超ミニワンピースのYUKIは、両腕をいっぱいに広げて歓声を受け止める。ミディアムテンポのオープニングナンバー「Miracle Night Diving」では、その重く激しいサウンドに負けない、しっかりとした力強さで放たれるYUKIの声が飛び込んできた。レーザー光線とカラフルな照明に導かれ、さく裂するTAKUYAのノイズギター、強烈な恩田のベースラインが暴れ出し元気よく始まった「ステレオ全開」。ボーカリストであるYUKIの気持ちをダイレクトに表現しているこの曲は、親しみやすいメロディーを伸び伸びと歌う彼女のボーカルにより、聴く者の心にストレートに響く。

「ハ〜イ！ ジュディ・アンド・マリーです。こんばんは〜。会いたかったよ、大阪！ 今日はこんなに広いところでやるけど、うちらメチャクチャ近いつもりでやるからついてきてね〜」。元気百パーセントのYUKIのMCに反応するファンの表情は笑顔でいっぱいだ。

「Little Miss Highway」「RADIO」が披露され、ステージと客席がほんのり汗を感じるころ、YUKIは「なんか、こんな大きなところで出来るなんて信じられなくてさ…」とフレンドリーな口調で話し始めた。前日に大阪城ホールの下見をするためにバスに乗っていたら、窓から見えたホールにYUKIが感動して泣いてしまったこと、10年ぐらい前に恩田とTAKUYAが偶然に大阪城ホールで同じラウドネスの公演を観たという話から、TAKUYAがそっと「今日、10年たってやっとラウドネスに追いついたね」の言葉が飛び出すなど、しばし感慨深い時間が流れる。その空間にさわやかな風を送り込む勢いで流れ出した「ドキドキ」の優しいメロディーとYUKIの歌声から、今このステージに立っている彼らの思いが伝わってくるようで、私は胸の奥の方が熱くなるのを感じた。

五十嵐と恩田による超強力ソロを怒とうのごとく聴かせた後、真っ白なアフロヘアー、サイケなロングドレスに着替えたYUKIとサッカーウェア姿のTAKUYAが再び登場し後半へと突入。まるで〝ここから暴れるぞ〟と言わんばかりにステージがライティングにより一瞬、黄金色に輝いた。「Oh! Can Not Angel」、最新シングル「そばかす」とアップテンポの曲がパワフルにフル回転し、YUKIとTAKUYAがステージ上の左右の階段やスタンド席に近づくために作られたサブステージへと動き回る。それを観ながら観客も気持ちを抑えられないように、飛び跳ねたり、踊ったりして楽しんでいる。

JUDY AND MARY

「そろそろ準備運動は済みましたか〜。もっともっとやりたいか〜。次の曲を聴いたら、ノックアウトしちゃうよ、『Over Drive』！」。豪快なライトが曲を盛り上げながら、いつしかYUKIの歌声にも迫力が増す。ギターソロではTAKUYAが大きなアクションで観客をあおり、エンディングに差し掛かるころにはYUKI、TAKUYA、恩田の3人が飛び跳ねるといった場面も出現。ステージの熱気がムンムンと沸き上がり始め、観客の感情の高ぶりも最高潮に達しようとする直前、彼らのライブには欠かせない「LOLITA A-GO-GO」が盛大にスタート。会場中の興奮がパチンと音を立ててはじけ、「ここをライブハウスにするゾ〜」と叫ぶYUKIの声に応えるように会場の空気が、たちまちライブハウスに変わっていくのを感じた。それは彼らから発せられるパワーを、集まったすべての観客が受け止め、互いの気持ちが一緒にならないとけっして生まれないものだ。

〝大阪城ホールが小さく見えた〟、これが今日のライブで最も実感したこと。それは、この会場が単なる人気の象徴として選ばれた場所ではなく、彼らが一歩一歩着実に歩んできた結果に過ぎないことを納得させる。ジュディ・アンド・マリーにとってもう、会場のサイズは大した問題でなくなってしまったようだ。YUKIのボーカリストとしての進歩は今夜のライブでアルバム以上に感じられたし、サウンドを引っ張っていく力強い存在であることもしかり。今後その力をバンドとしてどんな形で表現していくのか今からワクワクだ。

〔文・村田圭子　撮影・高木昭仁〕

PLAYLIST

1	Miracle Night Diving	8	帰れない2人	encore	
2	ステレオ全開	9	Oh! Can Not Angel	1	Cheese"PIZZA"
3	あなたは生きている	10	そばかす		
4	Little Miss Highway	11	Over Drive		
5	RADIO	12	自転車		
6	ドキドキ	13	LOLITA A-GO-GO		
7	KYOTO	14	プラチナ		

4th FILE

TEXT by Akira Nishihara
PHOTO by Makoto Kanehara

音楽が、それぞれのアーティストの生き方、考え方を音というフィルターを通して伝えているものである以上（時としてそうでないものもあるが…）、彼らの人間性とその音楽を別ものとして考えることはできない。
アーティストたちは日ごろ、音楽以外のどんなことに興味をひかれ、何を感じて、何を考えているのだろうか。このコーナーは、彼らの音楽に対するストレートな思いから、あえてポイントを少しはずし、それ以外の様々なモノやコトに託された強烈な「こだわり」や「思い」を、赤裸々に語ってもらうことで、その人間性を感じる場を提供したいと思う。
ここに語られる心情も、彼らの心から生まれる音楽に触れる一つの貴重なチャンスであるに違いないのだ。

今回、このコーナーに登場するのは筋肉少女帯で華麗なギタープレイを聴かせる橘高文彦。

彼の現在の関心事は今後の自分自身の人生。彼はこれを〝自分道〟と呼ぶ。自分は必ず20代で終わってしまうともがき苦しんだ10年間。自分の生活すべてがロックであるという境地に達し、ファンに生き様を見せることに心を躍らせる今。彼がどのように再生し、その出来事は彼の音楽に何を産むのだろうか？

「俺には今まで趣味って呼べるようなものがなかったんですよ。確かに音楽が趣味だったこともあるかもしれないけど、さすがにこれだけ音楽やってて『音楽が趣味だ』っていうのもいやらしいしね。30歳になってようやく見つけた趣味が、自分を俯瞰（ふかん）で見て、自分の人生がどうなって行くんだろうって観察すること。〝自分道〟っていうんですか。

俺は、20代のころって人生が終わるのかミュージシャンとしての生命が終わるのかは分からないんですけど、絶対20代で死ぬもんだっていう考え方だったんです。運転免許も持ってないし、映画館も人生で3～4回しか行ったことないし、ディズニーランドだって行ったことないんです。ずっと俺はそういう人生を否定してきたわけですよ。なぜなら自分がかわいそうだから。俺にはそういう彼らとは違う人生があるから、彼らみたいな人生をうらやましいと思っちゃいけないって考えて生きてきたわけです。20代の自分はいわゆるロックスターのお手本を模倣していたのかもしれない。俺にとっての一番のロックスターは、ランディ・ローズというギタリストなんですけど、来日が決定した途端に彼が飛行機事故で死んじゃったっていうのがあまりにも生々しくて、俺もきっとああなるんだな、いや、ああなったらいいなとさえ思ってた。

そんな風に考えてたから、当時いろんな雑誌で『俺は25、6歳で死んだら本望だ』みたいなことを言ってたんだけど、年齢が25歳に近づいてくるとどんどん不安感が増して来るんですよ。そんな時にね…こいつウソついてるなって思わずに聞いてほしいんですけど（笑）、ツアーの最中、九州のホテルで悪魔を見たんです。これは他に例えようがないから悪魔としか言いようがないんだけど、1メートルぐらいの緑色の物体が俺のベッドに座ってたんですよ。俺は鏡台の辺りにボーッと座ってて、何かを感じるから振り返ったらその悪魔が座ってらっしゃって。彼の雰囲気があんまりフレンドリーだったから逆に怖くてね。一般的にあるオカルトっぽい悪魔の感じだったら思わず笑っちゃうんですけど。すごく温かい空気が漂ってくるから余計に怖くてね。

『ついに来たか』。俺は別にそいつに魂を売ったわけではないけど、そこから人生いろいろ辛い思いをし始めてね。精神的な病気になったり、気が付くと死に向かっていくような感じになってて、結構暗い20代の10年間だったな。

それがこの前30歳の誕生日を迎えて突然、人生を前向きに考えるようになり始めて、結局人生は何度でもやり直しがきくし、今までなかった人生も今から歩めるって思えるようになったんです。これはニューアルバムのテーマ〝再生〟とも不思議にリンクしてるんだけどね。

今はね、90歳になっても金髪でマーシャル並べてフライングV弾いてるロッカーがいたらカッコイイだろうなってね。これから10年も20年もロッカーをやっていける幸運に恵まれたとしたら〝生き様〟をステージやインタビューなんかでみんなに見せていこうと思ってて、それがすごく楽しみ。だから、今までずっと否定してた結婚なんかもしてみようかなって思ったりね。例えば、結婚披露宴にお客さんを入れてみんなに見せたりとか、子供が出来たら俺の衣装のあまり布で作った衣装を着せて連れて回ったりしたい。そういうことをやってる日本のロッカーってまだ見たことないでしょ。俺みたいな奴がハゲたらどうなるのかとかをアマチュアミュージシャンに見せていくのもいいかな（笑）。もう『自分の生活すべてがロックだ』って思えるようになったから、怖いものはなくなりましたね。死の恐怖は今でもありますよ。でも今は、死にたくないだけで、とにかく生きてたい。

この間、是永さんていう、昔、筋少のアルバムを2枚プロデュースしてくれたギタリストと寿司を食べてまして、『今度のアルバムのギターには生命力があってすごくいい』って言ってくれたんです。『俺、今生きたいんですよ』って話をして。彼は『昔の橘高は死が見えるギターを弾いてた』って言うんです。はー、そういうもんかなーって思っちゃいましたよね」

profile

筋肉少女帯

大槻ケンヂ率いる筋肉少女帯は88年のデビュー以来、一種独特のカリスマ性と、ジャンルにカテゴライズされないサウンドで、その存在を貫き続けている。ベテランの域に優に達している彼らが、2年ぶりに発表したアルバム「ステーシーの美術」のテーマは"再生"。「人生は何度でもやり直しがきく」とばかりに、バンドの健在ぶりを発揮している。

press mania

say too much!!

単なる音楽ファンである僕は極度の音楽雑誌中毒。最近は、毎月毎月手にする愛すべき様々な音楽雑誌（当然このJ-ROCK magazineも含む）の記事の数々や、雑誌にまつわる出来事を、単なる素人音楽好きの目で観察し、音楽メディアのあくなき挑戦に“全く勝手に”一喜一憂するのが妙に楽しい。さて、今月、僕の関心をひいた記事は…

●もう最近では“元ジキル”という肩書が不要になったKEN。ソロ転向後の彼はポップなサウンド作りに取り組んでいたが、最新作『BOY』はメッセージ性が強く、ヘビーな作品となった。そのことについて彼は「事件が日常のものになってしまうような去年がいけないんだよ。それが歌詞に出てしまった」とF誌のインタビューで語っている。ロックというのは生き様の音楽だから、アーティストの思想が楽曲に反映されてくるのは当然だ。彼のように人間性が分かる作品作りをしてくれるアーティストが増えるとJロックシーンも、もっと面白いものになると思うのだが…。まだまだ思想も人間味もない、飾り立てた言葉を並べただけの自己満足作品が多すぎるぞ。

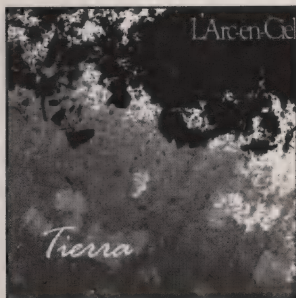
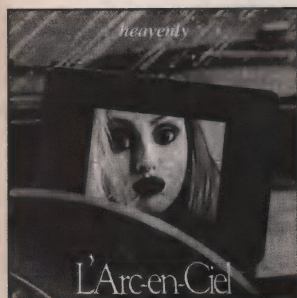
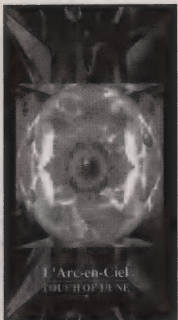
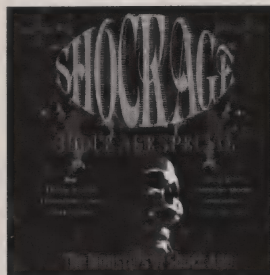
●デビュー13年目を迎える浜田麻里が、T誌のインタビューで「私と同じ世代のミュージシャンが10代狙いというか、一番レコードを買ってくれる層向けの音楽をやっている」「自分と同じ世代に何かを感じてもらえるものを作らなきゃだめ」と語っていた。最近、ちまたに流れる音楽がみんな似たり寄ったりなのは、きっと“一番レコードを買ってくれる層向けの音楽”をやっているアーティストが多いからなのだろう。そして、そんな子供だましの音楽に、大人までだまされているから、ヒットチャートも面白くないんだ。

●デビューしたての新人（失礼！）に対し、過去の経歴を言いたくはないが、あえて言わせていただく。“デランジェ”“ダイ・イン・クライズ”という、現在の“ビジュアル系”と呼ばれるシーンの土台を築いたバンドのボーカリストだったKYO。彼がO誌でのインタビューで、いわゆる“若手ビジュアル系アーティスト”について「（ビジュアルの）理解の仕方が違う」「音楽をやるヤツが尻軽でどうする」といった話題をインタビュアーのI氏（インタビュアーがこの人なら対談かもしれない）と交わしていた。彼が登場してきたころのシーンは、音的に個性の強いバンドばかりで、確かに彼も含めみんな“お化粧”したヤツらだったが、サウンドのインパクトがバンドの個性の象徴だったし、その音楽性を表したような“お化粧”にしても個性があった。しかし、今はどうだろう。みんながみんな同じようなサウンドで、同じようなビジュアルだ。その上、最近は“オシャレ系”と呼ばれるヤツらまでが現れた…。こんなところからもJ誌のように「これでいいのか、日本のロック」って思ってしまう。リスナーはそんなバンドの音の違いを聴き分けられるのだから、もう少し耳を鍛えて“アーティスト性”の有無を聴き分けてほしい。

●G誌に載っていたYOSHIKIのロングインタビュー。そこには彼がただならぬ努力によってツーバスによるあのハイパードラミングをマスターしたことや、異常なまでにクリエイティブに徹する曲作りの話などが語られており、その言葉の節々からは彼がいかに音楽をでき愛しているのかが痛いほど伝わってくる。彼を崇拝するアマチュアのバンド野郎たちも多いが、壮絶なプレイやソングライティングの才能だけをあがめるだけでなく、クリエイティブな面や練習熱心なところを見習ってほしい。そんなバンド野郎たちが、次の世代のJロックシーンを担っていくのだから。

末田 晃
Sueda Akira

featuring

L'Arc~en~Ciel COLLECTION

ALBUMS

SINGLES

VIDEOS

OMNIBUS

L'Arc~en~Ciel's SINGLES, ALBUMS, VIDEOS and OMNIBUS

TEXT by Miki Aoki

【バンド・ヒストリー】

4人の男達はスタジオに集まって、セッションを始めた。別のバンドで活動していた者もいたから、あくまでも軽い気持ちで。ボーカルのhyde、ドラムのperoは同じバンドのメンバー同志。ベーシストのtetsuとギタリストのhiroはかねてから機会があればセッションをしようと声をかけ合う仲だった。

そのチャンスが訪れたのは90年の夏のこと。そのセッションで確かな手応えをつかんだtetsuは同年の暮れ、セッションに応じたメンバー達に「新しいバンドを作ろう」と声をかけた。hydeとperoはためらったが、思い通りの形にならないバンド活動に限界を感じていたことも手伝って、tetsuの誘いを受ける。これが、ラルク・アン・シエルのすべての始まり。正式には91年の2月の出来事だ。

その後、短期間のうちにオリジナル曲を用意し、バンドは同年5月30日初ライブのステージに立つ。大阪難波のロケッツというライブハウスだ。初ライブにしては大入りの、130人という動員を記録。その後もロケッツを拠点として活動し、結成4カ月後の9月には初のワンマンライブを行うまでに成長。徐々に動員数を伸ばしていった彼らは、翌92年3月、ビデオ・プレゼント・ギグを大阪、東京の2会場で開催、用意されたビデオテープが足りなくなる程の人気を博す。このライブで、『ラルク・アン・シエル』というバンドネームを全国に広めるという目的は充分達成された。しかし、活動、人気共に軌道に乗りかけた6月にギターのhiroが脱退、バンドは最初の転機を迎える。リーダーであるtetsuは、以前バンド仲間であったkenに声をかけてみようと考えた。当時、kenは名古屋に住みバンドとは無関係の生活をしていたというから、大きな人生の選択を強いられたことになるが、tetsuと一緒に音楽をプレイできるのならと決心を固め、大阪へ戻って来た。このkenの加入を機にバンドの活動はさらに本格化、ショートツアーで関東方面を攻めたり、オムニバスアルバムへの参加など活動の幅を広げる。また、この時期インディーズレーベルから1千枚限定でリリースしたシングルCD「Floods of tears」(92年11月)は予約のみで完売、という快挙をなし遂げた。

〝アマチュア〟の殻を破ろうとするこのころ、バンド結成当時からのメンバーでドラム担当のperoが年末のイベントライブを最後に脱退し、ロックにこだわらないドラマーsakuraが93年1月に新メンバーとして参加。彼は、その直後、いきなりの1stアルバムレコーディングを経験するこ

ととなる。

彼らはその後もライブハウス凱旋全国ツアーに繰り出したり、着実なホール展開で目まぐるしく成長を続け、94年7月にビデオシングル「眠りによせて」のリリースで、メジャーシーンへ進出…。

95年12月、ラルク・アン・シエルは早くも武道館のステージに立ち、『大物バンド』への切符を手に入れた。彼らはどこまで大きな虹（＝ラルク・アン・シエル／フランス語）の橋を懸けてくれるだろうか？　これからの活躍ぶりにも目が離せそうにない。

【アルバム&シングル・ヒストリー】

ラルクが初めて世に出した作品は意外にもビデオである。『L'Arc～en～Ciel』（92年3月）。完全自主製作された本作は、2曲入りで元々はケーブルＴＶでのオンエア用に撮影されたライブ映像。随所に見られるコマ送りカットの処理が独特の雰囲気を醸し出している。サウンドと同時にビジュアルを大切にするバンドとして映像プラス音で自分たちを伝えようとしたのは正しい選択だろう。5百本が限定で作られライブ会場でプレゼントとして配布されたため、現在は手に入れることが出来ない。しかし、ただでさえビデオ製作はお金がかかるものなのに、メンバーが自腹を切ってまでファンを喜ばせる心意気には感心した。

同年秋にはオムニバスアルバム『GIM-MICK』（92年10月）に参加、「Voice」が収録された。ワイルドな表現だけをロックと限定するのではなく、ち密で繊細なサウンドを打ち出したロックの存在に気付かされる。フワリと音場を広げるサウンドメイクはこのころすでに確立していた。楽曲・演奏共に完成度が高く、当時から実力を備えていたこともうかがえる。全国のロックファンにラルクの存在をアピールした1枚。

ラルクのインディーズ黄金時代は翌93年。数々の音源がリリースされた記念すべき1年だった。その幕開けは1 stアルバム『DUNE』（93年4月）。グラフィカルなジャケットが目を引く。「Shutting from the sky」はサビのメロディーが印象的で、ライブ映えする曲だ。ゆったりとしたバラードの「追憶の情景」ではアコースティックギターが効いている。スパニッシュ・フレーバーあふれるカッティングとフレーズをうまく使い分けたアレンジが特色。このアルバムは、通信販売で1万枚のみ先行限定発売されたスペシャル・ボックス・バージョンと通常盤の2種類が存在する。前者は完売しており現在入手不可能。通常盤にはボーナストラックとして「失われた眺め」を収録。ピアノのみをバックに従えて歌うhydeのボーカリストとしての実力が十二分に発揮されている。

インディーズ時代のラルクはもう1枚オムニバスアルバム『The Monsters Of Shock Age』（93年9月）にも、跳ねたリズムが攻撃的な「予感」という曲で参加している。この音源は他にも黒夢やアインス・フィア、メディア・ユースらが参加している豪華盤だ。

『TOUCH OF DUNE』（93年10月）は、インディーズ時代唯一のセルビデオ。1万本限定で発売されたが、リリース後1カ月で完売。彼らの人気の高さを感じさせた。収録された3曲はいずれも1 stアルバムからの選曲で、サウンドに映像が加わるとイメージが立体的にとらえられ、より彼らが表現したかった世界が理解できる。「As if in a dream」のクリップを見ると空や自然のイメージがよく似合っていて、楽曲の広がり感と完全に結び付く。残念ながらこのアイテムも現在は入手できない。

常に妥協を許さないサウンド作りに挑んで来たラルクがメジャーへ移行することは必然だった。メジャーデビュー・アルバムで通算2作目の『Tierra』（94年7月）も魅力があふれている。ライトで広がりのあるサウンドは前作から引き継がれているが、音楽的に懐の広さがより感じられる1枚。ビデオシングルとしても発売されたデビュー曲の「眠りによせて」でボサ・ノバのアプローチを聴かせるほか、レゲエやプログレ、アンビエント・ミュージック（＝環境音楽）的手法まで飛び出し、まさに"虹色"の色彩が楽しめる。

最新作『heavenly』（95年9月）では、ポップス的な色合いも感じられる。いきなり印象的なサビから飛び出す「C'est La Vie」は特にポップでラルクの新たな側面という出来栄え。アルバムに先行しビデオシングルの第二弾としても発売された「and She Said」（95年5月）がとても興味深い！　彼ら流のサイケ&60年代テイストが満載で、モータウンっぽいリズムにビートルズ的なサウンド・シミュレーションが絡んできたり、昔懐かしいテルミン（アンテナに手を近づけたり離すことでいろんな発信音を出す原始的電子楽器）やメロトロン（サンプラーの元祖）風のサウンドも登場する通向けのサウンドの楽曲。本作では空間を包み込むリバーブ（残響）のベールを取り去って、男気を感じるワイルドな音も聴かせてくれる。また、シングル「Vivid Colors」（95年7月）、「夏の憂鬱[time to say good-bye]」（95年10月）にはアルバム未収録曲がカップリングされているので要チェック！

映像作品の最新作『heavenly～films』（96年3月）はついに武道館の大舞台に立った、生き生きとした彼らのライブアクトが存分に楽しめる。冒頭や途中にはユーモラスなオリジナルCFが挿し込まれていたり、オフステージでの素顔のメンバー達の様子やライブの未収録カット、以前出演したＴＶ番組からの映像なども駆け足で見られるよう編集されていて、ファンにはこたえられない1本だろう。

【サウンド・アナライズ】

どちらかというとポップス系の音楽になじんでいる筆者は、イメージやサウンドを重視した楽曲のアプローチが個性的で新鮮なラルクのサウンドに引きつけられた。ビジュアルの部分とシンクロするように、繊細な表現が曲中に散りばめられ、ソフト・フォーカスっぽい雰囲気を醸し出す空間処理が、独特の広がり感を生み出していて心地よいのだ。曲に描かれる情景的な世界を表現するための音色選びのセンスが優れていることも挙げられるだろう。具体的には、ひずんだ音にのみこだわることのないギターサウンドの多彩さや、積極的にシンセ&ストリングス系の音色を導入したアレンジなどに表れている。

清涼感に満ちたサウンドメイクがhydeのボイスに調和するとき、ラルクの音世界は聴き手をつかんで離さなくなるのかもしれない。また、楽曲の詞とメロディーにも独特の魅力が潜んでいる。詞の世界を絵に例えるなら、抽象的な風景画といったところか。水・空・大地などのキーワードは、詞に表現されたシチュエーションのイメージを広げてくれる。さほどメッセージ性を持たないのも特徴だ。そんな言葉を彩るメロディーがくせもので、なかなか難しく、どうでもいいことだが、とりあえずカラオケ向きではない（笑）。歌わせるのではなく、聴き込ませる働きの方が大きいようだ。タイアップがどうのこうのといったお決まりの話題性をはるかに越えた場所に、ラルク・アン・シエルの音楽は存在しているということだ。

そんな彼らの世界に近づいてみたいなら、心の中に真っ白なキャンバスを用意して、目を閉じて、楽曲を真剣に聴いてみるといい。今まで聴き逃していたサウンドが聴こえてきたり、自分なりの情景がキャンバスに浮かべば大成功。きっとキミの目の前にステキな虹が現れるに違いない。

黒夢

KUROYUME

元気ライブ KANSAI '96 in 大阪城ホール　ホット・サウンド・ジェネレーション

March 3rd 1996 at Osaka-Jo Hall

出演

宇崎竜童&RU CONNECTION with 井上堯之

加納秀人

BORO

黒夢

ヤナギヤクインテット

宇都美慶子

峠恵子

BEREEVE

KUROYUME AT 元気ライブ KANSAI '96 in 大阪城ホール

1996年3月3日　大阪城ホール

レコーディングの鬱憤（うっぷん）を晴らすかのようなエネルギッシュなライブ

イベントがスタートして2時間が経過した、19時10分。場内を物々しいSEが制すると、一斉に至る所から悲鳴にも似た「清春〜」「人時〜」という声が沸き起こる。そんな愛らしい声を「SEE YOU」のイントロダクションがことごとく粉砕し、黒夢ワールドへのゲートが開かれた。やはり黒夢目当てのファンが多く、客席の半分以上が立ち上がって、1曲目からハイテンションで迫ってくる彼らのサウンドに全身で反応する。

「どうも初めまして黒夢です」とあいさつ代わりのMCとメンバー紹介を挟み「Kiss」へ。ムーディーなメロディーをなまめかしく歌う清春は、中性的な魅力を感じさせつつも、その奥に潜む危うさと力強さを輝かせている。そんな彼のセクシーでウエット感のある声からは、強力なフェロモンが噴出しているのだろうか？まるで目に星を浮かべていそうな眼差しでステージを見つめているファン。しかし、そんな彼女たちをトリップした意識から長谷川浩のバイオリンのようなギターの音色が覚まさせる。そして、その音を聴いただけで次がこの曲だと分かるメロディアスなポップチューン「Miss MOONLIGHT」に、我を取り戻したファンの両手が差し伸べられるのだった。

正確でタイトなビートを送り続けるそうる透のドラムがかなめとなり、鈴木秋則のキーボードが広がりを与えるサウンド。そうると人時が絡み、鈴木と長谷川が絡み、その二つの音の上に清春が乗ることによって、二人の黒夢とサポーターではなく、バンドとしての絶大なパワーを発揮する。

二回目のMCでは男性ファンからのたくましい声援が届き、笑みを浮かべる清春。「武道館でもやりましたが…」とひと言入れ披露した「BARTER」は、そんなMCで生まれた和やかな空気を引き裂き、ファンのテンションを瞬間的に上昇させる。大阪初披露となる新曲だが、ヒステリックなギターが暴れる刺激的な曲に、じっくり聴き入る者などいないようだ。さらに、高まる緊迫感を引きずったままパンキッシュなナンバー「Sick」へ突入すると、そうるの高速ドラミングから繰り出されるハイパービートにあおられ、ファンのノリがエスカレート。トリッキーな音を飛ばす鈴木のステージアクションもブチ切れたように激しく、フロントの3人も広いステージを縦横無尽に駆け回り、いつものライブと変わらないエキサイティングなステージが展開されていく。ラストナンバー「BEAMS」では、ヒートアップしたメンバーとファンとの間に最上の一体感を生み、アンコールを求める声の中、黒夢ワールドのゲートは閉ざされた。

今夜のイベントは阪神・淡路大震災被災者支援コンサートで、会場には5百人の被災者が招待された。出演者たちはそんな客席に向かって「頑張って下さい」などのエールを贈り、清春も「黒夢のファンの子も地震に遭って…何て言うかな…すごいこんなの言うの苦手なんですけど…頑張りなさい…頑張って下さい」と言葉を残した。ちょっと突き放した感じがあるものの、彼らしい温かさが込められたメッセージである。

出演者の言葉を統括するようにトリで登場した宇崎竜童は最後に「ここから〝元気〟を発信します。神戸だけでなくいろんな災害に遭った人たちへ。今日はそんなチャリティーです」とコメント。それは、出演者だけでなくスタッフや客席も同じ思いだろう。日本の各地で天災人災いろんな災害に遭い、苦しんでいる人がたくさんいる。僕もそんな人たちの元へ、ここで発信された〝元気〟が届いてくれればと願う。音楽にはそれだけの力があるはずだ。このイベントで生まれた〝元気〟が、今この記事を最後まで読んでくれたあなたへも広がったのだから。

［文・毛刈松佳　撮影・金原 誠］

1. SEE YOU
2. カマキリ
3. KISS
4. Miss MOONLIGHT
5. BARTER
6. Sick
7. BEAMS

X Talking cross

KIYOHARU and HITOKI
黒夢

インタビュー・西原 朗
撮影・金原 誠
interviewed by AKIRA NISHIHARA photographer MAKOTO KANEHARA

出演者にキャリアの差がありすぎて緊張しない

「元気ライブ　KANSAI '96 in　大阪城ホール　ホット・サウンド・ジェネレーション」というチャリティーイベントに出演した黒夢。その共演者というのが宇崎竜童、BORO、ヤナギヤクインテットといった黒夢との共通点を見つけ出すのが不可能とも言えるアーティストたちだったのにはちょっとビックリ。そこで、このイベントに出演することになったきっかけなどを彼らに聞いてみることにした…のだが、待ち合わせ場所に現れた二人の表情にまず驚かされた。彼らは笑顔を振りまいてくれているが、かなり疲れている様子。話を聞くと過酷なスケジュールの中で、アルバムのレコーディングを進めているらしい。しかし、二人はいつも通りのテンションで、イベントのことやニューシングル「ピストル」のこと、現在レコーディング中のアルバムについて語ってくれ、ジェイロックマガジンのチャターボックスにもメッセージを残してくれた。

どうせイベントに出るんだったら黒夢よりも大きな人達とやりたい

●このイベントの事について聞きたいんだけど、イベントに参加することになったキッカケは?

清春（Vo、以下K）：（そうる）透さんだよね。透さんが宇崎（竜童）さんのバンドもやってて、全然色の違うアーティストとやるのも面白いよって。

人時（B、以下H）：「僕らもそういうのやってみたい」っていう話を、透さんと以前にしたことがあったんだよね。

●じゃあ、そうる透さんの話があって、このイベントにつながったという感じなんだ。

K：透さんはね、テレビとかに出たときもいろんな人を紹介してくれるんですよ。ロックだけでなく、いろんな世界があるんだよって。だから、今日のイベントも要はロックなんだろうけど、いろんなロックがあるんだよっていうこと。それに、大御所の人と一緒にやるということにも意義があるし。

●今までも「ラミス・レーション」とかのイベントがあったけど、ああいうイベントというのは出演者に一種、統一感があるよね。でも、今回はロックと言えども異種交流みたいな所をすごく感じるんだけど、これはチャレンジになるのかな。

K：そういうことはあんまり気負ってなくて、単に「ライブが出来ればいいか」って感じ。今、レコーディング中でライブしてないからね。気持ち的には、系統的に近いバンドとイベントをするよりもラクだよね。変な闘争心がないから、逆に安心して出来る部分がある。それにファンも全然違うし。夏に関東の方でイベントに出たんだけど、他のバンドの曲を聴いてムチャクチャにむかついているファンが、ステージに向かって「帰れ、帰れ」とか言っちゃうんですよ。でも今日は、そういうことがないと思う。

●そういう時は、ファン同士も闘争本能が出てイヤな感じだよね。

K：それもあるしね。バンドのロゴが入ったうちわ全員持ってたりね（笑）。イヤだったよな。

H：戦略めいててイヤだね。

K：ファンはそんな意識ないから、会場の入り口で他のバンドのロゴ入りうちわ渡されたら、僕らのファンも暑いしあおいだら涼しいから持ってるのよ。今日はそういうのがないから楽しめそう。それと、僕ら寄りのロックのイベントとかやっても、リハーサルが終わってもホテルに入っちゃったりして、意外と出演者同士しゃべんないですよ。今回は結構いろんな人のところにあいさつしに行ったり、あいさつしに来てくれたりして、本来の〝イベント〟って感じがするね。出演者にキャリアの差がありすぎて緊張することもないし。

●中途半端に近いと気を使ったりするからね。今日はいろんなサウンドのアーティストが出演するけど、他のアーティストへの関心というのは二人とも持ってる?

H：僕は興味がないな。今はもうレコーディングに入っちゃってるから、それしか頭にない。

K：まあ、広い意味でロックなんでしょうけど気にしてないね。ただ、黒夢を見たことない人に見てもらえたらいいなと思うのと、僕らのファンにロックにもいろんな音楽があるんだということを知ってもらえたらいい。こんなイベントにはなかなか出られないもんね。

H：出られないよね。

●黒夢が出るって聞いたとき、意外だったよ。

K：みんなから言われた（笑）。でも、僕らは透さんがいるから安心して出られたところがある。いなかったら出るっていう発想もなかっただろうし、話も来なかったと思う。

H：「出たいな」っていう気持ちはあったかも知れないけどね。

K：それ以前にこんなイベントがあることなんて知らなかったかもしれない。

●こういう動きというのは、以前のビジュアル系と言われている黒夢からは考えられない事だよね。

K：インディーズのころやったイベントと、自分達が主催してやった以外は、僕らはあんまり出てないですからね。お化粧系のイベントは嫌いなんですよ。ファンも重なってたりして、まあ大阪風に言うと「どっちやねん、おまえ!」って（笑）。僕らのときに盛り上がって、他のバンドの時も一緒に歌ってるっていうのがイヤだし、楽屋とかで気を使うのもイヤだからね。

●少し前に学園祭にも出てたよね。あれに関しては黒夢がドンドン幅を広げて自由になってきたっていう感じがしたよ。

K：学祭とかは、もっと出たいな。今日に限らずここに載ってる（ジェイロックマガジンを見ながら）お化粧してない人たち、小沢（健二）君とか、サザンオールスターズとかとやりたいですね。どうせやるんだったらチャゲ&アスカとかミスチルとか自分よりも大きな人達とやりたい。

●挑戦のしがいもあるし（笑）。

K：今日は挑戦とかそんな気持ちじゃなくって、もっと気楽な感じですけどね。

●大阪城ホールでやるっていうのは初めてだよね。以前、「武道館だからって特別意識はしてない」って言ってたから、大阪城ホールでも特別な意識なんてないよね。

K：イベントだからね。結局、渋谷公会堂でイベントをやったときも、ワンマンでステージ立ったときとは全然違ってたもん。今日は、リハーサルの時にやりにくいなとは思ったけどね。

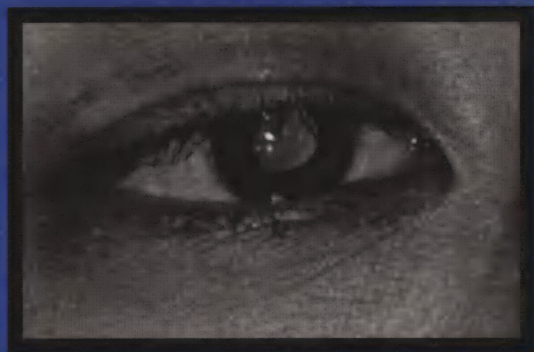
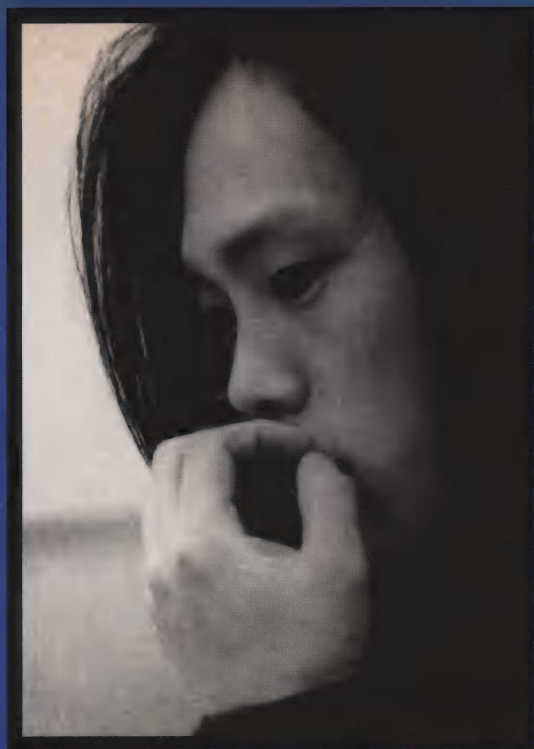
●今って、イベントだという違いはあるにせよ、ステージに立つ何時間か前じゃない。そんな状況の黒夢ってどういう心理状態なのかなって関心があったんだけど、あんまり緊張してないでしょ。

K：緊張は、いっつもしない。今日は特に、二人ともレコーディングで2日間ぐらい寝てないしね。スタジオから朝の5時にうちに帰って、6時にそのまま用意して出てきたんで。その前の日も朝の9時にうちに帰ったけど、11時ぐらいからラジオの生出演があって、その後すぐにレコーディングだったからね。もう最近うたた寝ぐらいしかしてない（笑）。これがデビュー当時だったら、もっと緊張してただろうけど。

H：もっと意気込んでただろうね。もっと「やってやろう」みたいな。

K：今日はちょっと意気込みようがないでしょ。チャリティーのライブだしね。

H：でも、大阪のファンの子に会えるのはうれしい。

●通常のツアーのライブ前っていうのも、そんなに緊張感ってないの?

今度のアルバムはサウンド的な部分で言えば「えっ!」って思うかもしれない

H:いや、違った意味で緊張感はある。
K:今日よりは緊張感はあると思う。ツアーの初日とかって。
H:それはあるよ。1本目、2本目とかは、流れを気にしながらやっちゃうんで。
K:ライブは緊張しないけど、テレビに生で出るときは緊張するよね。
●でも、ステージに出る前っていうのは、精神的に集中してる感じで出て行くんでしょ?
H:テンションは高くなってるんだろうなあ。
K:緊張っていうより「頑張るぞ」っていうような。本番前に2時間ぐらい空いたりすると間がすごくイヤで、早くバーンってステージに出たいって思う。
H:眠くなってくるもんね(笑)。

どんな音楽をやっても黒夢らしくなる自信がある

●レコーディング中のアルバムの話を聞きたいんだけど。
K:その前にね、4月17日に「ピストル」っていうタイトルのシングルを出すんですよ。これは今までのシングルのパターンと変わって…。っていうのは、「SEE YOU」と同じような曲を作っちゃうと選曲の幅がなくなっちゃって、ライブで困るなと思ったんでね(笑)。ちょっと違うタイプの曲にした。割と音数が多くて、ポップさって言うよりも、ハッとさせるっていうところで頑張ったつもりなんだけど。
●かなり、派手な?
H:「なんじゃ、こりゃ〜」って感じ(笑)。
K:っていうか、僕らとキーボーディストの是永さんの共同作業っぽくて、彼のクラブ系が得意という面が強く出てる。でも、ちゃんと歌が前に出てるんですよ。シングルは、そんな感じで。アルバムは、今までの中で一番ロック的じゃないかな。インディーズの時よりもロックしている。
●「SEE YOU」のカップリング曲「COMICAL」でスカっぽいリズムを聴かせたし、どんどん音楽的に幅が広がってるっていうのが見えたから、次のアルバムはもっとバラエティーに富んだものかなって予想してるんだけどね。
H:当たってます。
K:もうレゲエあり、レゲエ・ファンク、パンク、ロックンロール…、あと何だっけ?
H:もっと激しいロック。
K:激しいパンクとか。それに今までみたいな歌モノもあるし、ダンサブルなのもあるし。後は、静かな感じの入り込んじゃうようなものもあるしね。で、その中にシングル曲が入ってるって感じ。シングルもアルバムのイメージに合わせたいと思ってる。
●二人の中にあるテーマは、やっぱりバラエティーってこと。
K:バラエティー(笑)。
●(笑)バラエティーって言うと誤解を生むかもしれないね。
K:何て言うのかな。どんどん、やれない曲っていうのを減らしたいんだよね。何をやっても黒夢らしくなる自信があるから。
H:だれもやったことのないものにすごく興味持っちゃうんだよね。変に探すわけじゃないけど。
●実際、ジャンルの幅を広げていって、どんどん自分達の個性を薄めていく人たちっているけど、黒夢の場合っていうのは連続性がちゃんと感じられるし、イントロで「あれ?」っと思っても曲聞き終わったら「やっぱり黒夢だった」と思えるから、そういう意味でどんどん広げていってほしいな。
K:どんなリズムを導入しても、最新の音とかをやっても、メロディーに対するコード感とか、コード感に対するメロディーとかっていうのは変わんない。そこがもう黒夢なんでしょうね。
H:ただサウンド的な部分で言えば、「えっ!」って思うかもしれない…。

X Talking Cross
KIYOHARU and HITOKI

K:音は、今までの中で一番ヘビー。

H:今までってどっちかと言えばタイトな感じだったけど、「すごくヘビー」とまではいかなかったんじゃないかな。でも今回はかなりね。

K:ギターは原田喧太くんも参加してて。あと佐久間さん。プロデュースは…。

H:半分僕らで…。

K:佐久間さんが半分。あとはシングルがそれぞれ。だから、佐久間さんと一緒にやった曲の方が音数が少ないぐらいだね。玄人(くろうと)を何とかうならせようと思ってね(笑)。

●アルバムトータルの質感として、ヘビーなところを生かしてるということ。

H:そうですね、トータル的にはそういう方向に持っていきたい。

K:パッと聴いた印象はポップで、メロディーもキャッチー。だけど、玄人が聴くと「ちょっと待てよ」って思うんじゃないかな。『feminism』はポップさのためのアレンジがあって、どの曲でもシングルでいけるっていうのがあったけど、今回はそうじゃない。ポップなんだけど、なんかややこしい(笑)。

いつも人時からデモテープと一緒に構成表をもらうんですよ。それには小節数がA8とかB16とか書いてあるんですけど、『feminism』までは8、4、16、32とか偶数だったのが、今回は7とか9とか11とか奇数ばっかりなんですよ。「おっと、これは」と思ってね(笑)。でも、それがテープを聴くと、非常に歌メロが付けやすいように仕上がってるんですよ。だから実は彼が「ひっかけがある」っていう感じをやりたいのかなと思ってるんですけどね。

●出来上がりが楽しみだね。

K:僕らも早く聴きたいって言うか…、まだ歌詞も7曲ぐらい書いてないんですよ。

H:えっ、まだ?

K:…うん。

H:何で? ヤバイんじゃないの、マジで(笑)。

●(笑)じゃあ、このイベント終わったら、また苦しんだりするわけだ。

K:そうなんですよね。フレットレスベースも使うでしょ?

H:うん、使ってる。

K:今回はもう、何種類もいろんな声を出そうって思っているんですよ。低いのから高いのから、シャウトものまで。『feminism』よりもっと、「何だ、この人の歌は」って思わせるぐらい。

素人も、玄人も両方ともうならせたい

●それにしても、どんどん活動の場が広がってくるね。

K:もうそろそろ僕らなんかはね…、全国誌で「黒夢はここに入ってなさい」っていう雑誌に載るのがイヤなんですよ。例えばジェイロックマガジンとかっていろんなジャンルのアーティストを載せてるじゃないですか。甲斐さんもいれば、黒夢もいて、長渕さんもいたり、ディーンとかもいたりするわけでしょ。僕らはデビューして2年ですけど、「黒夢は2年のビジュアル系ですか? じゃあV組!」(笑)。

H:(爆笑)それ最高!

K:5年になってもV組(笑)。で、例えば黒夢が5年たっても、渋谷系の「5年S組には入れてあげないよ」ってあるじゃん。そういうのをブチ壊したい。素人が聴いても、すぐにかっこ良さが分かる。そして、玄人が聴くと、最初は「何だ、ポップじゃん」と思うかもしれないけど、「いや、ちょっと待てよ」って考えるというね。

H:やっぱり玄人の人たちと、一般の人たちって感覚が違うような気がするんだよね。やっぱり見るところが違うから、その両方の感覚を満足させたいって思ってるんだけどね。

K:僕は、もう音楽的に素人だから(笑)。思いついた音を僕が口で言って、それを彼が音にするって感じ。

H:難しいですよー。

●難しい(笑)

K:だってね。この間も喧太くんと三人で話してた時にね、「マーク・ボランが機材いっぱい買ってもらった感じにして下さい」って(笑)。

●……。

K:あと、「濡れた粘土のような音」とかね(笑)。音楽用語も知らないからそんな言葉でしか言えないんですよ。例えば、どっかのバンドの何とかってギタリストって言われても名前も知らないし、曲も分かんないから。「鉄で立てた工場から出る音にしてくれ」とかっていう、そういうディスカッションをしながら(笑)。面白いですよ。こんなこと言ってどういうふうに理解してくれるんだろうって(笑)。

●逆にそれを楽しんでるんじゃないの(笑)。

H:心にもないこと言ってんのかもしれない(笑)。

K:でも、素人ってそうじゃん。玄人は、深いもの、ルーツがあるもの、ややこしいものとか、演奏的にうまいものやアレンジが面白いものとか言うけど、それは素人には分かんないもんね。「すごい」って思うぐらいでしょ。素人って素直に聴いて、カッコいいもの、ポップなもの、聴きやすいもの、入りやすいものっていう、それだけでしょ。だから僕は、両方をうならせたいなって思ってるんです。1年V組とか、あとゼロ年V組、マイナス1年V組っていうのは、わりと素人をうならすことしか考えてないでしょ。それはイヤだし、早く卒業したいからね。雑誌見てると、やたら「メロディーを大切にしたいです」とかって言ってる人たちっているじゃん。そんなのボーカリストがいて、歌がある以上、「メロディーを聞かせる」というのは当たり前だからね。

●両方うならせるためには、絶妙のバランスが必要だよね。

K:何て言うのかな…。いろんなクラスの教室に行けるようになれればいいかなって気がするんですよね。

自信があることをやってる以上売れなきゃいけない

●さっきジェイロックマガジンを読んでくれてたけど…。

K:そうそうさっきねえ、チラッと見えたんですけど、どこだっけなぁ…(ジェイロックマガジンのページをめくる)。これこれ、このコーナー(プレスマニア)好きなんですよ。あっそう、これ(本誌3月号のページをめくりチャターボックスを指す)。どこだっけ僕らに対しての意見で…。ファンなのかなー? これこれ、「黒夢の二人が『売れなきゃしょうがない』と言うのはよく分かる……」を書いた君に言いたいんですけど。

●メッセージ?

K:あのー、「君はファックだ!」(笑)。冗談冗談。「ファンの質を高めてほしい」…。でもある意味で、僕らからしてみれば、ファンの質なんて関係ないもん。だって、それぞれのとらえ方があるからね。例えば、名前は出しませんけど、僕らよりも芸能よりのバンドの人たちだって自分たちのやってることは「ロックだ」って思ってるかもしれない。黒夢に対しても「黒夢はロックだ」って思う人もいれば、洋楽しか聴かないヤツが「黒夢はロックじゃない」って言っているかもしれないしね。それは人それぞれの価値観で。主観だから。もし僕らが外人だったとしたら、方法論は全然違うと思うけど、やっぱり日本人だからね。本当に自由なこと、好きなことが出来るのは売れた後だからね。じゃなきゃデビューしなければいい。21歳ってそういう事を言いがちじゃない(笑)。そう思う年ごろかもね。でも僕らもこういう人を納得させたいんだよね。実はカッコいいんだって。だから、こういうコーナーは参考になりますよ。面白い!

この子とかすごいですよねー(またまた、チャターボックスに目をやる)。「売れるとそれまで派手に髪を立てたり、メイクをしてたのを止めて、大衆受けを狙うバンドが多い。ビジュアルの派手さは売れればもう必要なくなるのだろうか?」……深い!

H:でも、これも賛否両論だね。

●(笑)

H:まっ、いいけど。

●でも、それだけ読んでもらえると、こっちも作りがいがあるよ(笑)。

K&H:ハッハッハッ。

Self Liner Notes

ドラムなら俺にまかせろ!!

斉藤和義『FIRE DOG』

斉藤和義がもろ肌を脱いで、「俺のロック」をたたきつけたアルバム『FIRE DOG』。飾りをはぎコアな表現に向かったこの作品でアーティストとしての認知度を高め、商業的にも大きくステップアップできたのは、彼の音楽の持つパワーのなせる技だ。編集部の一部では本年度ベストアルバムとの呼び声も高い『FIRE DOG』をより深く楽しむため、斉藤和義本人と一緒にそれぞれの曲を解説していく。

「FIRE DOG」

●アンプのノイズでオープニングなんてえらく激しいですね。世間にはびこる、斉藤＝アコースティック＝フォークというイメージなんてぶっ壊してやるって叫びなんですか(笑)。

斉藤(以下S)：もっと単純なんですよ。この曲は、トリオでセッションみたいに録ったんですけど、その時に作ったラフMIXが、バランスも良くていい感じでね。トラックダウンをしちゃうと、バランスはもっと良くなるしノイズも消せるんだけど、このザックリしたニュアンスがなくなるのがイヤで、ラフMIXに歌入れをしたんです。

●綺麗な音だけが音楽じゃないっていう感性ですね。これは僕の勝手な想像なんですけど、この曲ってムード的に「お待ちなさい」ツアーのオープニングを飾るんじゃないかなって。でね、ちょっと複雑なリズムだから、お客さんはどうやってリズムを取るんだろうとか、もう絵が浮かんでるんですけど。

S：一曲目にやる方が、どさくさに紛れていいかもしれないですよね(笑)。

マネジャー塚原氏(以下M)：圧倒するとか言えないか(笑)。

S：ドラムもリズムとりにくいからなあ。レコーディングをやっていても「ゲッ、これってライブで再現するの大変だ」って思ってたんですよ。

「砂漠に赤い花」

●この曲は、一番新しいシングルですが…。シングルへの反応とか、周りの受け入れられ方ってどうでした？

S：「今までとは違うタイプの曲だね」っていう人も多いんだけど、最初のメロディーなんかは、2、3年前から僕の中にあったものなんですよ。出来上がってみるとね、昔の歌謡曲の影響なんかが出たのかなあってね。サビの所を聴き直してるとどことなく西条秀樹の「ギャラン・ドゥ」に似てるなあ、とかね(笑)。ロカビリーっぽいアレンジなんですが、実は俺もアレンジャーもロカビリーってあんまりよく分かんない。だから、「ベースがランニングしてて、リズムがスッカタッカ、スッカタッカいってる」といった、フィーリングを頼りに、二人で「こんな感じだよね」って進行しました。

●(笑)えせロカビリーですか。

「男よ　それが正常だ!!」

●シングル「空に星が綺麗」のカップリングにもなっているこの曲は、オープニングのハードロック的なリフがかっこいい。

S：実は「空に星が綺麗」のシングルカットが急きょ決まったもんだから、カップリングの曲がなくてね。でも、印刷に間に合わないからってジャケットに歌詞が載っていないのはマズイじゃない。だから、ためておいたメモの中から気になる言葉を引っ張り出してきて、それを「七五調に」しておけば最悪ラップか朗読でいいか」ぐらいの気持ちでつなげたわけ(笑)。レコーディングの朝、スタジオに行くのがイヤでね、タクシーに乗ってからも「事故ってくれないかなあ」とか、「着かなければいいのに」とか思ってましたから(笑)。

●この曲ではドラムをたたいてるんですが。"ドラマー斉藤和義"としてひと言頂きましょ

インタビュー・西原 朗
撮影・佐藤潤一
interviewed by AKIRA NISHIHARA　photographer JUNICHI SATOH

ヨレててパワーのない

うか。

S:今回は、スタジオミュージシャンを使うとうますぎて違うな、っていう曲を自分でたたいてます。ヨレててもいいし、そんなにパワフルでなくてもいい。そういうドラムだったら俺、大丈夫だし、逆にスタジオの人はこうはたたけないだろうって。こういうドラムだったら任せろって感じ。でも、俺をスタジオに呼ばないでくれ(笑)。

「何処へ行こう」

●この曲は前作『WONDERFUL FISH』の流れが感じられる曲なんですけど。

S:この曲は『FIRE DOG』の中で一番先に作った。あれは、前のツアーが終わったころだったかな。だから『WONDERFUL FISH』のにおいが少し残っているんじゃないですかね。リズムやパターン的に、宮ニィ(宮内和之/アイス)と一緒にアレンジをやろうと思ったっていう辺りにも前作との共通点があるし、雰囲気も近いんでしょうね、きっと。

●この曲の斉藤さんのエレキギターのカッティングはシュアー(正確)ですね。

S:そうでしょ。デモテープの段階からカッティングを聴かせたくて作った曲ですから。

「僕は眠い」

●斉藤さんがベーシストとしてもデビューした記念すべき曲ですが(笑)。どんな気持ちで演奏しました?

S:これはサギだと(笑)。僕、ベースは目立たない楽器というイメージがあったから昔から触らなかったし。でもこういう曲調だから、最初から全部一人で楽器をやっちゃおうと決めてましたから。で、そのベースなんですが、実は以前一度「大丈夫」のレコーディングでトライしたんですよね。それが全然ダメで…。

●サウンドもフレーズも何だかポール・マッカートニーを思わせる。

S:それは意識しましたよ。それにディレクターの中にチューリップのベーシストだった人がいるんですよ。ベースを録ってる時はその人に、ノセられながらやったし。

●この曲にもドラマーとしてひと言。

S:こういう繰り返すだけのドラムって難しい。ちゃんとリズムを点で打っていかなければならなくて、ずれるとバレますから。逆にいろいろ刻んでいたりする方がごまかせますよね。

「空に星が綺麗　～悲しい吉祥寺～」

●これはシングルでおなじみの曲ですが、某インスタントラーメンのCMソングですよね。CMの出来はどうでした。

S:お話をいただいたとき、「セリフは一切かぶらないで、ただ15秒なり、30秒なりのCMの間曲が流れる」ってことだったんだけど、俳優が「セリフがなけりゃ出ない」って言ったらしくて。「あの人がしゃべっているから曲が聴こえねえじゃないか、バカ」っという感想です(笑)。正直に言うとタイアップって好きじゃないから、やるんだったら、それこそ「タイアップで～す」ってハッキリしてる方がいい。で、チャルメラのおじさんの顔を俺の顔に差し替えたジャケットにさせてくれるんだったらやるってことで。結局は登録商標の問題が絡んできて表は無理だから裏ジャケットでそうしたんだけど。

　この曲のテーマは、「フォークソングを作ろう」なんですよ。僕はフォークとかアコースティックとかって見られ方をしてるわけじゃない。じゃあ、作ってやるっていうひねくれ根性で初めてトライしてみました。「じゃあ、フォークソングってどんなの?」っていう自分への問いかけから始まっていて、日なたぼっこしてる猫とか吉祥寺とか、そういうのを思い描きながら作りました。

「大丈夫」

●これもシングルとしてリリースされた曲なんですが。アルバムを通して聴いていると、さっきの「空に星が綺麗」から「大丈夫」「桜」への流れって、詞の内容にコンセプトがあるようにも受け取れるんですけど。作り手としては?

S:たまたまでしょう(笑)。ただ、「桜」はアルバムの中でも最後に詞を書いたんだけど、「大丈夫」のアンサーソング的なものにしようという狙いはありましたね。

「桜」

●この曲からはジョン・レノンの香りが漂ってる。前作でも「レノンの夢も」っていう曲があったでしょ。斉藤さんにとってレノンってやっぱり特別な存在なのかなあ。

S:僕、ジョン・レノンって好きなことは好きなんですけど、ソロになってからは『イマジン』ぐらいしか聴いてない。でも、確かにこの曲のピアノは、ジョンの音にしようっていう狙いはありました。はっきり言うと、ジョン・レノンとドラマーのジョン・ボーナムとが同じバンドにいたらどうなるかなみたいな発想をしたんです(笑)。レコーディングに使った古いグランドピアノがモロにジョンの音がしたんだけど、ドラムは僕がたたいたんでパワーがないからボーナムにはならなかったんですよ(笑)。

「あの高い場所へ」

●作曲って、自分が作り出すというより、流れているものをキャッチするようなもんだって言ってたでしょ。それを考えると、この曲はスティーブ・ミラーがキャッチし損ねた曲を斉藤さんがキャッチしたような感じがするんですが。彼を好きっていうわけじゃないんですか。

S:そうなんですか?　だれかにベストのテープをもらって一度だけ聴いたことはあるんですけど、印象に残ってないな。

●この曲でのバックはフラワー・カンパニーズ。

S:そうそう。スタジオミュージシャンや知らない人達を集めて即席のバンドでやるより、あるバンドに僕がボーカリストとして入って歌う方が面白いかなっと思いまして。でね、アルバムの中ではこの曲だけ僕が25、26歳のころにライブをやっていた曲なんで、今25、26の奴らとやりたくて。

「老人の歌」

●この激しいギターソロは斉藤さんですよね。もう好きなように弾いているっていうのが伝わって来て気持ちいい。

S:うん。とにかくギターを弾きまくりたかったっていうのもあって。単純に弾いていて楽しかった。2、3テイク録って一番いいのを選んだんですよ。

●ビデオクリップもいい雰囲気に仕上がってますよね。しみじみと始まって。

S:あのオープニングはシベリアの映像なんですよ。以前、監督さんが録っておいた映像にあのおじいさんとおばあさんが歩いていてそれを若者が追い越していくっていうイミシンな映像があって。その雰囲気が曲にはまったんでね。それ以外の雪の中のシーンは秋田でのロケなんですよ(笑)。映像になるとそんなに感じないんですけど真横からふぶいている状態で寒かった。その中で、それぞれの楽器を弾くシーンを撮ったんだけど、指なんか各楽器を弾くその形で固まっちゃうし。

●「すべての楽器を俺がやってんだ」っていう叫びが聞こえて来る。

S:そう、ビデオでも絶対やりたかったの(笑)。

「通りに立てば(飛ばすぜ!　宮ニィ)」

●さて、最後ですが、この曲はブギーっぽい仕上がりですよね。なにかインスパイアーされたものってあったんですか。

S:シングルで録った時はローリングストーンズの「スウィートバージニア」のような雰囲気にしたんですよ。そうすると宮ニィが「この曲には俺だったらこうする」って言うんで、じゃあ、アルバムに入れるだろうからその時にやってって約束してたんですよ。

●だからサブタイトルに宮内さんの名前が入っているんですね。でも、またどうして「飛ばすぜ!　宮ニィ」なんですか。

S:何とかバージョンじゃ芸がないでしょ。だから、別のを考えようと言っていたら、宮ニィが自分の名前を入れてくれって。ずうずうしい奴だなあとも思いつつも、こういう軽快なナンバーに変えてくれたって感謝の気持ちもあったし。曲の最初にハーレーのエンジン音が入っているでしょ。そこからインスピレーションを受けて名付けたんですけど、彼、免許を持っていないから、絵的には後ろに乗った宮ニィに俺が言ってるの、「飛ばすぜ!　宮ニィ」って(笑)。

●アルバムのエンディングを考えたら「老人の歌」はヘビーでしょ。このまま終わったら救われないって思っちゃったんだけど、この「通りに立てば」が軽やかに鳴り出したんで、それこそ光が見えつつ終わっていくような(笑)。

S:よくアメリカ映画で、すごくシリアスにストーリーが幕を閉じたっていうのに、エンディングの字幕ロールでヘビーメタルがかかって、いったい何だったんだろうって思ったりするでしょ。あれにしたかったんですよ。だから曲順も最後の2曲は早いうちから決まってました。

●全曲について話した所で、何か言い残したことがあれば…。

S:私のドラムですね。

●まだあるわけですね(笑)。ドラマー斉藤和義として納得のいくできだったと。

S:う、えっ、そうですね。イヤ。一曲すべてを一人でプレイするってのは前からやりたかったことだからできてうれしかったです。

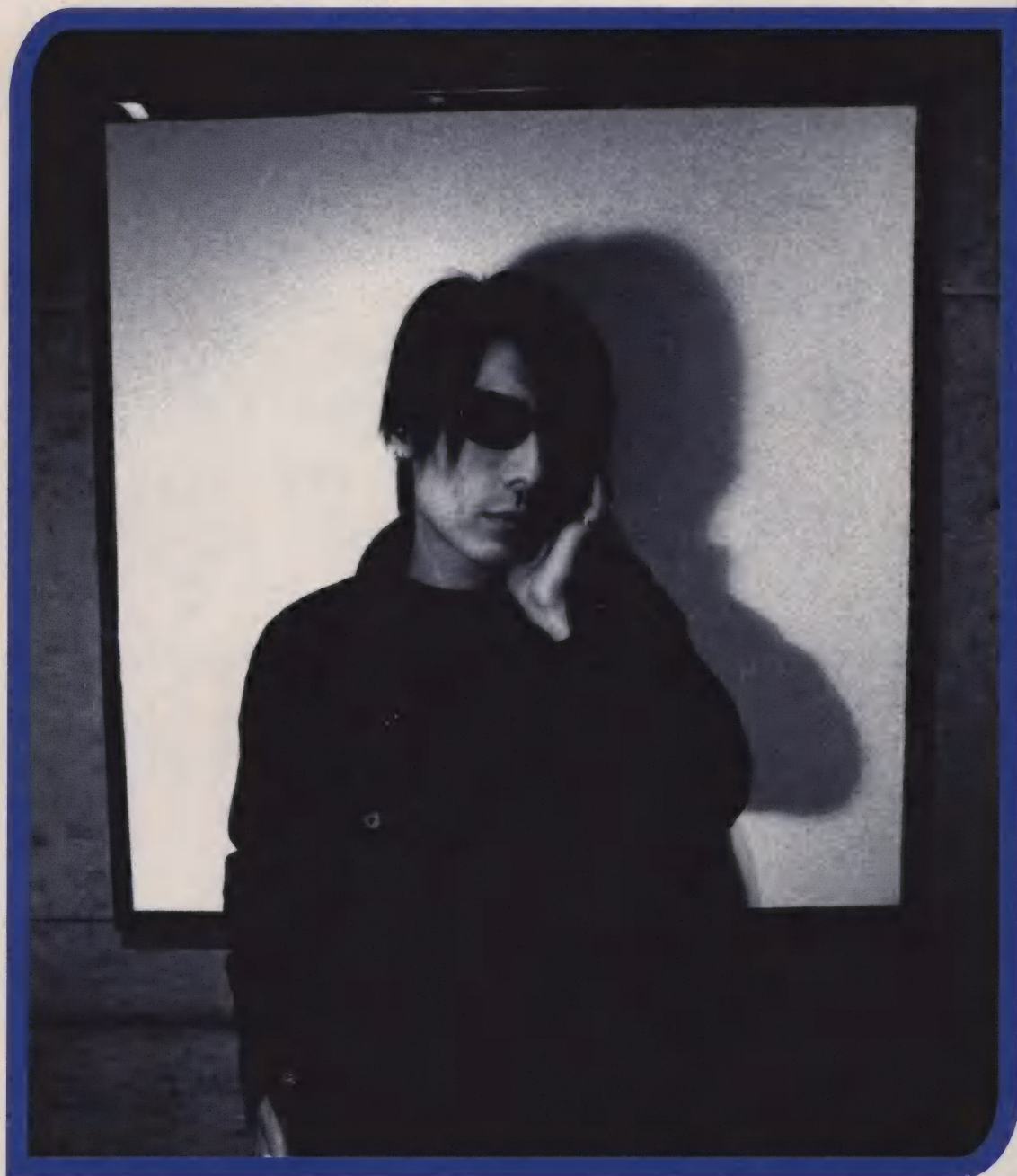
●前にも言ったけど、僕は全曲一人でってのを期待してますけどね。

S:それもやってはみたいんだけど。これぐらいのバランスだからこそ自己満足にならないのかもしれないですしね。

●そう言わずに日本のレニー・クラビッツになって下さい。

X Talking cross

HIROFUMI

Eins:Vier

インタビュー・村田圭子
撮影・高木昭仁
interviewed by KEIKO MURATA photographer AKIHITO TAKAGI

良いと思うものは、その時に自信を持って出す

5月27日発売予定の3rdシングルに先駆けて、急きょ発売が決定したミニアルバム『SONG REMAINS THE SAME』。このミニアルバムは、現在でもライブで重要な役割を果たしているインディーズ時代のナンバー5曲を新たにリメイクしたものだ。

「なぜ、今リメイクなのか?」という疑問を胸にボーカリストであるHirofumiと話す。彼はその理由や、心境、ボーカリストとしての変化などを交えながら、今のアインス・フィアを自分なりに分析してくれた。彼の素直な考え、思いを聴いていると「だからこそ、成長し続けるバンドなんだ」と納得させられる。自分をさらけ出し熱く語る姿は、まるでライブでの彼を見ているかのようだった…。

自分のメンバーに対して「こいつら、やるな」って思えた

●まず一番興味があるのは、インディーズ時代の楽曲だけを集めてミニアルバムを作ろうとした理由なんだけど。

Hirofumi(以下H):ライブでずっとやっているし、すごく重要で盛り上がる曲なので、どんな形にしろ「もう一度、音源化したいな」という気持ちは以前からあったんですよ。それにメジャーになってからアインス・フィアを知った新しいファンの子達から「あの曲が聴きたい」という声が多くなってきて…。そういうこともあって「やりたい、実現したい」っていう気持ちが急に強まったんです。

●それが具体化したのは。

H:5月にニューシングルのリリースを予定してるんですけど、「それに合わせてだったら、ミニアルバムを出してもいいよ」というOKが出たんで(笑)。俺らの中でも必然的に「あっ、ここしかないな。ここでやらないと、これはもう実現しないな」と思ったしね。

●以前のインタビューで、アルバム「Walk」に収録したインディーズ時代の曲「I feel that she will come」について、「曲の完成度とか意識の中で、『Walk』に入るべくして入った曲だ」という話があったんですが、今回の5曲に関しても、そういう気持ちが含まれているの?

H:「I feel～」に関しては、アルバム自体が求めてた曲だったと思うんですよ。今回、その気持ちになれたのはレコーディングする前に曲を煮詰め直してる時でしたね。それまでは「この曲はライブでやってるし、盛り上がるから入れないと」っていう軽い感じで5曲出てきたんですけど、その1曲1曲を一からアレンジし直して、きっちりやってるうちに、いろんなダメな点が見えてきたんですよ。新しいアレンジで仕上がった時に「あっ、やっと表現できるようになった」っていうのはありました。

●5曲を改めて録音するってことで、煮詰め直したという話が出ましたが、実際メンバー間でどういう話し合いを?

H:もう一回、基本に戻ろうと。ベーシックな部分でそれぞれのパートがどう絡んでるかっていう細かい事を意識した上で、メロディーをどう浮かび上がらせるか。基本から煮詰めていくことによって、自然なグループ感が出るという意味で基本に着目したっていう。

●それはインディーズ時代に録音したものを聴きながら「あーでもない、こーでもない」っていう風に?

H:やらなかったです(笑)。それをやると逆に戻っちゃうんですよ。もう何十回とライブでやってきてるから、そこから曲自体が成長してるんで、もう一回聴き直すということは戻る作業になってしまうから。

●じゃあもう、新しい曲みたいな感覚で取り組めたんだ。

H:そうそう。いいこと言いますね(笑)。そういう感覚でした。だからすごく新鮮だったんですよ。実際、〃やりたい〃という思いでやったものの、最初は新曲ほど新鮮にやれない部分があるだろうなという意識があったし。でも録ってるうちに新鮮に思えたんで、逆に驚いてしまいました(笑)。なんかね、「昔はヘタクソだったけど勢いだけはあったよな」っていう、テクニックだけでは出せない勢いみたいなものがあるじゃないですか(笑)。今回、出来上がった5曲を冷静に通して聴いた時に、インディーズ時代の音源より、そんな勢いを実感できたからすごく不思議だった(笑)。だから精神的な部分で、バンドをやり始た時の「やるぞ!」っていう、がむしゃらな発想が今戻ってきてるんじゃないかなって。それが良いか悪いかは分からないけどね。

●出来上がったサウンドを聴いた時はどんな感じだったの。

H:良い意味でのプレッシャーを感じました。なんか「こいつらやるな」って、メンバーに対して思えた(笑)。『Walk』の時と基本的な録り方は同じなんですけど、やっぱり成長してる部分をストレートに感じましたね。『Walk』と違った点を言えば、『Walk』はプロデューサー、エンジニアを含めて全員一緒になって頑張って作ったイメージがあったんですけど、今回は〃一緒に〃じゃなくて、各自の責任みたいな感覚があったんです。

●音作りに関しても、それぞれの責任分担って感じだったんだ。

H:そうですね。後はもう各自がプロデューサーの人とか、エンジニアの人と話し合って。アレンジとか、根本的に全員でやる作業の時はいろいろ言い合いましたけど、それぞれのパートに関しては、どんどん確立してきているから違うパートのヤツは口の出しようがないところまで来てますね。

●良い意味でプレッシャーになったということだから、ボーカルも負けられないって感じで歌入れを?

H:負けられない。ほんとそんな感じでしたよ。でも、俺も一緒に成長して来てるんだから「後は、俺次第ですごいのが出来るぞ」みたいな感覚でしたね(笑)。

●新しく生まれ変わったサウンドをバックに歌った時、インディーズのころと気持ち的な違いってあった?

H:余裕が出て来たっていうか、あわてなくなった。しっかりと曲をかみしめながら歌えるようになりましたね。前は「とりあえず声を出して、メロディーをキープする」っていう、出来上がった音譜をなぞっていってる感じだったけど、今は音譜を探るんじゃなくて、作っていってる感覚ですね。だから感情も入れやすくなってきてます。

●インディーズのころの曲を、そこから成長した形で歌えるってことでジーンとくるものはなかった?

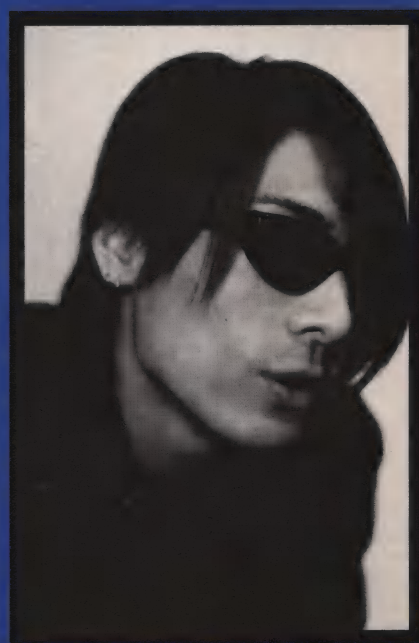
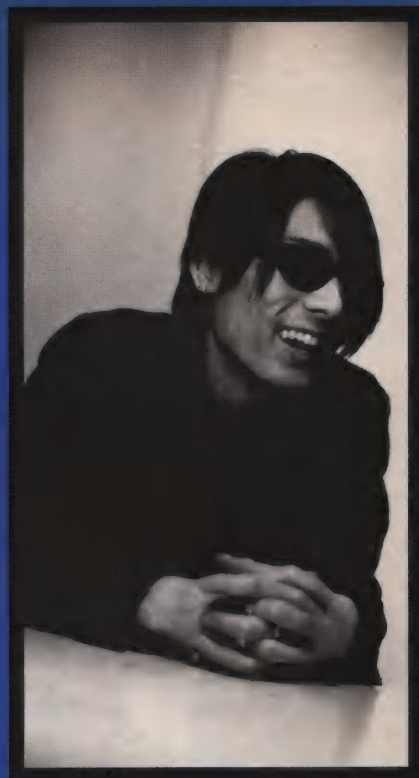
H:これはレコーディングをする度に実感することなんですけど、「俺らはスタート地点に立ってるな」って。ライブの面で考えると、それまでに作り上げて来たものがあってのことだから〃広げていってる〃という感覚があるんですけど、レコーディングに関してはインディーズでもいろいろ経験してきたけど、どんどんクオリティーの高いものになってるから、もうこれは常に一からの作業だなってかみしめましたね。

●ここからまた始まるっていうことだよね。

H:そうそう(笑)。だから余計インディーズの時のものが、成長うんぬんを別にして満足できなくなったっていうか。例えば「Walk」に関しても、どんどん自分らが成長していくことで満足できない部分が絶対に出てくるんで、それはまた逆に俺らが成長してるっていう自信にもつながることだと思うんですよね。

今回はライブ感覚で歌えた

●今回のミニアルバムとインディーズのものとを私なりに聴き比べてみたんだけど、Hirofumiさんのボーカルが、勢いに乗って力強さが前面に出ているインディーズのものに対して、今回は力強さと同時にソフトな表現がすごく充実してるなと思ったのね。Hirofumiさん自身、ボーカリストとしてインディーズのころと変わった、あるいは変えたというところはある?

H:「声を無理して作るのはよそう」って思ったことですね。インディーズのころは自分の声が、ちょっと軽すぎてイヤだったから声を作ろうとしてた部分があったんです。それが「歌をダメにしてるな。ただの自己満足でしかないな」って気づいた時に、素直に今しゃべってる声をそのまま大きく張り上げた声で歌おうって思ったんですよ。それを意識して歌ってた時期があったんですけど、自然にスコーンと抜けて

歌えるようになった時に「ああ、これが俺の声だ」と。それはメジャーとしてレコーディング作業を始めたころだったから、そういう意味では今回の5曲で、やっと身に着いてきたなって感じながら歌ってましたね。

●自然に歌えたことで、歌うことの気持ち良さを知ったと。

H：そうです。インディーズのころのライブでは〝ライブの楽しさ〟という、うわべの部分に惑わされた気持ち良さがあって、歌う事だけの気持ち良さに気づいてなかったんだなって思います。気持ち良く歌える、イコール自由に歌える。今回はライブのような感覚で歌えたんで、あえて丁寧に歌う必要もなくなってくるっていうか。リズムには気をつけても、ライブで歌っている気持ち良さをそのまま出すっていう感じ。だからハンドマイクを使って腕をカーッと振り上げたり、バーッと広げたりしながら歌った曲も2曲ぐらいあるんですよ(笑)。

●あと歌声にHirofumiさんの人間的な部分をふっとのぞかせてるなと。それは弱さだったり、強さだったり、優しさだったりするんで、詩の中にスーッと入っていけたんですよ。今の話を聞いたらそれかなって。

H：うん。しっかりした歌の中にも抑揚っていうか、そういうのがつけられるようになったなっていうのはあります。だから歌ってて楽しい。今までは何気なく歌ってたから、歌うっていうこと自体に何も意識してなかったんですよ。

●歌うことの気持ち良さが実感できた以上、Hirofumiさんの中で詞に対する受け止め方も変わってきたんじゃない。

H：そうですね。何気なく書いてた事がすごく重かったり、反対にすごく意識した言葉が「あっ、ここはサラッと歌えばいい」って思った事もあったり。そういう、いろんな事が身に着いて。何事もやっぱり勉強だなと思ってしまいました。人生勉強だなって(笑)。演歌ですね(笑)。歌心はやっぱり、ある意味で演歌を見習う点はありますからね。

やっぱり生音の一発がどれだけすごいかなんですよ

●サウンドに関してなんだけど、今回もライブ感を前面に出した形で作られたということで、今度は「Walk」と比べてみたのね。そしたら、ライブ感っていう部分に加えて、低音の厚みっていうか土台の部分がすごくしっかりしてきたなって。だから上に乗っているギターとボーカルの存在感が生きてるんだよね。

H：素晴らしい。ばっちりですね。

●全体的に聞くと、「Walk」よりさらに深みと広がりを感じた。

H：それが俺ら自身、「すごいものが出来た」って思えた一番の理由なんですよ。リズム隊というベーシックな部分を固めたっていうところで。それはもう単純にテクニックの成長の現れだと思うんですよね。「Walk」に比べるとリズム録りは細かい作業を一切してないんですよ。勢いで録ってるから、その分合わさってる部分が重いっていうか、強い。きっちりかみ合ってるからグルーブ感も出てるし。それが底辺にあるからギターの音色をポップに明るくしても、すごくロックに聴こえる。で、ギターの音色と歌がすごく耳に入ってくるけど、薄っぺらくない。これがロックの基本ですよね。「Walk」もそれを意識したんですけど、自分らの技量の部分で到達しえなかったところがあったと思うんですよ。

●それぞれの音色も、生音を前面に出しているよね。

H：それは絶対にあると思う。ボーカルも楽器もそうだけど、やっぱり生音の一発がどれだけすごいかなんですよね。それをこれからはもっと目指していけると思うんです。前作を絶対に越えないといけない点って、そこだと思うんですよ。越えてないと結局、何のためにいろんな経験をして、ライブでみんなにパワーをもらって、みんなにパワーを与えているのかっていうことになりますから。それが逆に俺らの一番の裏切りのような気がするんですよ。でも、それさえ押さえておけば、俺らがやりたいようにやっても、けっして心からの裏切りにはならないと思ってるんです。

●アインス・フィアの活動の流れとして、ライブがまずあって作品があるというスタンスなんだけど、その流れの変化はあった？

H：「Walk」はメジャーになって初めてのアルバムだったというのもあるから、レコーディングにすごく集中してた部分があるんですよ。変に固くなってた部分も絶対あると思う。今回は「Walk」のリリースがあって、そのツアーを回った結果のミニアルバムっていうことで自然に力を抜いてやれました。それが楽しめた要因でもあるんです。今回Lunaと言ってたことは、「ライブで蓄えたものをすべて作品として出す」っていう考えを、「自分たちの活動すべてをライブとしてやる」に変えようと。それって難しいし、最後まで成立しないかもしれないけど、気持ち的に「俺らは、ライブのためにこれだけやってるんだ」じゃなくて、「ライブをより楽しむために、すべてをライブとしてやりたい」みたいなね。ライブに向ける気持ちを、取材にも写真撮影にもテレビにもレコーディングにも、ぶつけたらいいんだなっていうことが今回のアルバムでつかめた部分でもありました。だから今までは「レコーディングは楽しめない」という苦しみがあったけど、今回は素直に楽しめましたね。結局、俺らの基本はライブであり、ライブで一番自分らを見せたい、それを実感したいっていうことなんですよ。

●前回のインタビューでは、まだ「Walk」が発売される前でメジャーの実感があまりないっていうことだったんだけど、「Walk」が発表されて、そのツアーが大成功に終わったところで、そろそろ実感というものが出てきたんじゃない。

H：メジャーになった実感というより、何があっても「音楽を楽しみたい」「これで生きていきたい」っていう思いが根本的にあるんで、それを煮詰められるからこそ、〝やるしかない〟みたいな感覚がわいてきましたね。

●それは力みじゃなくて？

H：そうです。「俺はこのために生まれてきたんだ」って思い込めるほどの自意識が強くなってきた。それはプロ意識とはまたちょっと違う部分でね。でも結局は、プロ意識につながるの

かもしれないけど。

ロックってプロフェッショナルなもの でも、パーフェクトなものでもない

●最近、アインス・フィアの雑誌でのビジュアルを見てるとすごく自然な感じに思えるのね。以前のインタビューでは、自分たちのビジュアルに対して「やりたいからやってるんだ」「それに対しての障害も受け入れられるようになった」という意志の固さを強調してくれたんだけど、最近、髪型にしても化粧にしてもナチュラルな感じになってきてるというのは、素直な自分達の気持ちの変化？　それとも何か理由が？

H:結果を言えば素直な自分達の心の変化なんですけど、ビジュアルのこだわりはまだ捨ててなくて。「ロック＝カッコいい」っていうのが確実にある。ビジュアルはビジュアル、音楽は音楽で完全に分けて、どっちも大事。「どっちもカッコよくないとダメ！」っていうのはすごく強くなってる。それは信念みたいな感覚で。今が前より派手じゃなくなったというのは、それが自分達が素直に思ったカッコ良さなんだってことなんです。これは4人ともに言えることですけど、昔から〝これがカッコいい〟っていう芯(しん)はあると思うんです。その芯を変えずに、目に見えるものを変えていってるって感じ。前のビジュアルと今のビジュアルで確かに化粧はみんな薄くなってるし、髪も立ててない。でも、俺らの中では対して変わってないんですよね。何を残したくて何が邪魔だったのかっていうところですよね。邪魔なものが見えれば見えるほど、それがかっこ悪いから、なくしていく作業。で、今のビジュアルなんですよ。

●じゃあ、また変わっていく可能性もあると。

H:そうですね。

●逆に増えたりするかもしれない？

H:その増えるものが邪魔じゃなければ、くっ付けたりすると思うんですけど。

●それは4人が同じ芯を持っているってことになるの。

H:音楽って4人で作り上げて来たものですけど、ビジュアルに関しては一人ひとりの芯がありますから、やっぱり違うんですね。トータル的なイメージは意識するけど、ビジュアルに関しては個人の芯がある。俺の中では、ビジュアルって単にファッションで今を提示するだけのものっていう、結構軽い考えなんですよね。それにプラス戦略がつくから多少の重みとか、それに対しての考えも働くけど商売を抜きにしたら、そんなに重要なことではないと思うんですよ。でも、音楽は商売抜きにしてもすごく重いし、深いじゃないですか。

●そういう中で、例えば音とビジュアルが全くかけ離れてしまうっていうことも考えられる？

H:でも、音楽が大事になればなるほど、多分ビジュアルは音楽に合わせていくような気がするんですよ。合わすというより、合っていくような。音楽をより感じてほしいためにはバンドである以上、ビジュアルを無視することは出来ないと思うし、聴く側の人からすれば「どんな人がやってるんだろう」って絶対意識するじゃないですか。それは俺もそうだし。「この曲いい。どんなヤツがやってるのかな？」って写真を見て「ゲェー」っていう時もあるし、カッコ良くて、どっぷりハマったりする時もあるから。特にロックには、それがあると思うんですよね。

●ロックはカッコ良さですからね。聴いてカッコ良くて、観てカッコ良い。

H:常に、その追求だと思うんですよね。だから、ある意味俺はロックってプロフェッショナルなものでも、パーフェクトなものでもないと思ってるんです。だからこそ、追求してる姿が気になる。音楽が自分の中で、どんどん自由になって、アインス・フィアの音楽っていうものを、どんどんつかんで行きながら広げていけるようになった時に、ビジュアルもそれに引っ張られていくような気がしますね。今は多分〝アインス・フィアって何なのか〟という部分が完全に見つかってない段階だと思うんですよ。その核をまだ自分らで把握していない、発展途上のバンドだと思ってるんですよね。

●でも今回のミニアルバムを聴いて、最新のアーティスト写真を見ると確実に一致してるよね。表現していこうとする音楽が明確になればなるほど、それに対する気持ちが自然とビジュアルにも出てくるような気がするけど。

H:そうですね。無意識のうちにあるんでしょうね。この写真(最新のアーティスト写真を見ながら)を見ていると余計にそれを感じますね。衣装にしろ、ポーズにしろ、それが出てるような。なんか自分らでも新鮮だったし、追求できる自信もわいたんですよね。それイコール、アインス・フィアの音楽への追求とつながるような…。だから多分、どっかで分けられなくなってきてると思いますね。前は分けられたんですよ。でも、もう自分らの中で音楽に対する比重がすごく重くなってきてるんでしょうね。後は、どんどん自分らがそれに気づいていけば、音楽への幅も広がるから、ビジュアルへの幅も広がっていって。いや、逆にビジュアルに飽きちゃうかもしれないですね(笑)。

●それは極端(笑)。

楽しいだけじゃダメ 幸せだけじゃダメ

●4月からまたツアーが始まるわけで、このミニアルバムを聴いてると「早くライブが観たい」と思ってしまうんだけど、次のツアーについての構想はもう出来上がっているの。

H:まだないですね。でも、思ってるのが、ステージセットとかを抜きにして、シンプルにやりたいなと。気持ちもシンプルなんで、もうそのままの思いをぶつける、「それでいいじゃないか、みんな～！」みたいな(笑)。

●なんだかライブ感覚になってきたね(笑)。

H:そんな感覚(笑)。それを俺らが出来れば、観てるみんなも1曲目から「もう、ライブは楽しい」って(笑)。ホールであろうとライブハウスであろうと、ライブっていうところに立ち返って次はやれるような気がするんですよね。

●次のツアーが当然、次のアルバムにつながるわけだから新曲もたくさん聴けるよね。

H:そうですね。新曲は出来る限りやりたいなっていう構想は…、あっ、唯一の構想がそれですね(笑)。

●で、そのライブのパワーが次のアルバムに詰め込まれていくと。

H:今はその作業でもあるし、アルバムに向けての曲作り。だから、全部が全部セカンドアルバムに向けての作業。シングルもそうだし、このミニアルバムもそうだし。『Walk』からメジャーとして始まったとしても、インディーズからのものが『Walk』になったように、『Walk』から引き継がれたものが次のセカンドで花開くように、全部が一つ一つのポイントのような気がしてて。それをつなげてみた時に、明らかな成長が見えてくるように頑張りたいし、その結果セカンドでしっかりしたスタートを切って結果を出す。で、またその結果で、次のスタートを見せたい。そういう意識で曲作りにも向かってるしね。それについてのビジュアルの変化もまたあると思うし。ただアルバムってリリースする何カ月も先にレコーディングをするところがネックですよね。やっぱり今を追求する俺たちとしては、それが一番痛いところです(笑)。でも、それぱっかりはどうしようもないことだから、変に意識して今を維持するようなバンドにはならないようにしようっていう気持ちはあるんです。ズレたらズレたでいいじゃないかと(笑)。良いと思うものは、その時に自信を持って出す。

●今回大阪は二度目のメルパルクホール、しかも2デイズということなんで成長し続けるアインス・フィアに、さらに期待が膨らむところなんだけど、ライブに対する意気込みっていうのを聞かせてほしいんだけど。

H:とにかく「楽しむぞ！」、なおかつ「グチャグチャには絶対ならない」みたいな。だから、自由に楽しむ場を単に自分らだけが楽しむんじゃなくて、自由に楽しむ場としてみんながそれを無意識に感じられるようにしたいなと。前までは俺らの「自由に楽しんでくれ」っていう言葉をみんなが受け止めて、「アインス・フィアが『みんな自由に楽しんでくれ』って言ってるから自由に楽しまないと」というルールがあったかもしれない。でも今はそうじゃなくて、何にも考えずにポケーっと来ても、自由に楽しめる場として見せてあげられるなと。それに、いつも言ってることだけど、与えてあげて、与えられて。それで〝楽しいプラス、幸せ〟っていうものがくっつくと思うから。この二つを組み合わせていきたい。楽しいだけじゃダメ、幸せだけじゃダメっていう、ライブは欲張りでないといけないと思う。すべてにおいて欲張りになれたらすごく強いんだろうけど、なかなか出来ないっていうのも分かってるしね。でもそういう気持ちで立ち向かっても全然損はしないと思うから。

●その勢いがミニアルバムとビジュアルからストレートに伝わるし、インタビューをする度に精神的にも確実に次へ進んでることが感じられる。

H:そうあることができるっていうのが、自分らの自信につながるし、幸せにもつながる。逆にそうじゃない時っていうのは分かるから、そういう時は、すごく辛いですね。でも今はそんなことを感じてる時じゃないし、実際そうだったら周りの人はついてきてくれないと思うから。こうやって良い状況で来てるってことは、自分らが前より良いって提示できてる証拠だしね。

FEATURE///

J-ROCKの掟

HAVE TO KNOW!!

世の中には法律が、学校にも校則(拘束?)があるように、「俺がすべてさ」という無法者が多いロック界にも最低限これだけは守らなければならないルールというものがいくつかある。その中には法律に関わるようなことも多々あるのだが、リスナーであるロックファンが守るべきルールのほとんどは常識の範囲で判断できることばかり。ライブに行けば「場内へのテープレコーダー、カメラの持ち込みは固く禁止されております」というアナウンスが毎回流れているし、オールスタンディングの会場では「後ろから押さないで!」「倒れた人がいれば助けてあげて下さい」とスタッフが叫ぶ。しかし、こんな常識レベルのことが守れないごく一部の人がいるがために、せっかくのライブの楽しさが半減したり、アーティストが多大な迷惑を被ったりしているのは事実だ。当人にしてみれば「好き!」という感情だけで突っ走ってしまって、周りの人やアーティストの迷惑など考える余裕がないのだろう。一番いい例がアーティスト自ら「露店で売っている俺たちの写真を買うなよ」と警告しているのに、「自分のお金で買うんだからいいじゃない」と買っているような人だ。しかし、そんな人はもちろん、ルールを守っている人の中にも「なぜ、そんなことをしてはいけないの?」「どうしてそんなさ細いなことが、周りの人やアーティストに迷惑をかけてしまうの?」という疑問を抱いている人も多いのではないだろうか。"なぜか"という理由が分かっていない人たちに、一方的に「ダメだ!」と言ってもこれでは説得力がない。そこで今回のフィーチャーはこの「Jロックの掟」について解説してみたい。また、「著作権」や「肖像権」など、なんとなくは分かるが今一つハッキリと内容がつかみ辛いことも説明するので参考にしてほしい。

ただ、いろんなケースについて詳しく説明すると、もっともっと深い解説が必要となり、かなり複雑になるので、ここで紹介することはあくまでも一般論である。しかし、これを理解するだけでもアーティストや周りの人に対して、どんな迷惑がかかってしまうかが分かるはずだ。「アーティストとレコード会社の関係」「レンタルCD」「カラオケ」などの仕組みについても触れておくので、予備知識程度に目を通してくれればと思う。

掟 No.1 LIVE編

FAN

【海賊グッズを買ってはダメ!!】

ライブの帰りに露店で売っているアーティストのロゴが入ったキーホルダーやステッカー、生写真といった通称〟海賊〟グッズ。ライブ会場のアナウンスなどで「海賊グッズは買わないで!!」とよく耳にするんだけど、「どう迷惑なの？〟海賊〟の方が種類も多いし、安いもん」と思っている人もいることだろう。

では、なぜダメなのか。まず、グッズを買おうと思った動機を考えてほしい。好きなアーティストの名や、写真、イラストが入っているからじゃないだろうか。このように、『商品の魅力=アーティストの存在』というケースでは、「氏名・肖像権利用権」でアーティストの権利が保護されていて、アーティスト名や写真を使う場合は商品の代金のいくらかをアーティストに支払わなければならない。でも、〟海賊〟の場合はそれが支払われておらず、売り上げはすべて露店屋さんの懐の中へ。

アーティストがライブツアーを行ったり、いい作品を作るにはお金がかかる。その活動をファンがライブに足を運んだりCDやオフィシャルグッズを買うことで支援しているんだから、〟海賊〟を平気で買っちゃう人はちょっと…。アーティストがいい音楽を届けてくれたら、それに応えなくちゃ。

【撮影してはダメ!!】

撮影したものを売るなんて言語同断。当然、アーティストにしてみれば肖像権の侵害問題でもある。

ライブで写真を撮ることの多い雑誌の場合はというと、許可を受けるのは当然、しかも静かな曲ではシャッター音に気を使ってシャッターを切らなかったり、照明効果の妨げになるフラッシュを使用しないなど、様々なルールと気配りで進行の迷惑にならないように心がけているのだ。

時々、ライブ中にファンの子が隠し持ったカメラのフラッシュらしきものが光る光景を目にするが、もちろんその光はステージからも見えている。それはアーティストのテンションダウンにもつながり、ライブのクオリティーを下げてしまう

【録音してはダメ!!】

多くのライブ会場ではテープレコーダーの持ち込みが禁止されている。でも、入口でのチェックをかいくぐって、録音している姿もちらほら。録ったものを公で、また、友人など知人に売るなんてことは著作権などの問題があると想像にたやすいことだからやっている人はまれだろうけど、「私は個人で聴いて楽しむだけだからアーティストには迷惑をかけていない」などと思っている人も考えを改めなければならない。演奏者の許可無く録ることは著作隣接権に設けられている録音権を犯したことになる。

しかも、テープレコーダーのモーターから出るノイズがPAと干渉し合うなど様々なトラブルの原因になる恐れがあるのだ。そうなると、百戦錬磨の音響スタッフでさえも犯人（隠し録りをしている人）がテープレコーダーのスイッチを切らない限り、どうしようもできない。せっかく、聴きに来てくれるファンのためにと、アーティストやスタッフが精一杯の音楽を届けようとしてくれているんだから、その行為を台無しにしてしまうなんてね。

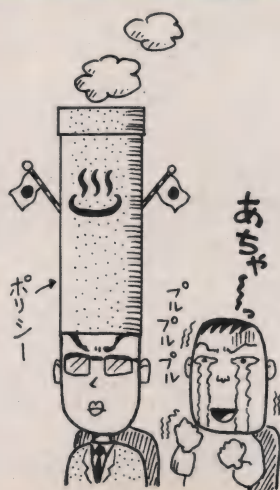
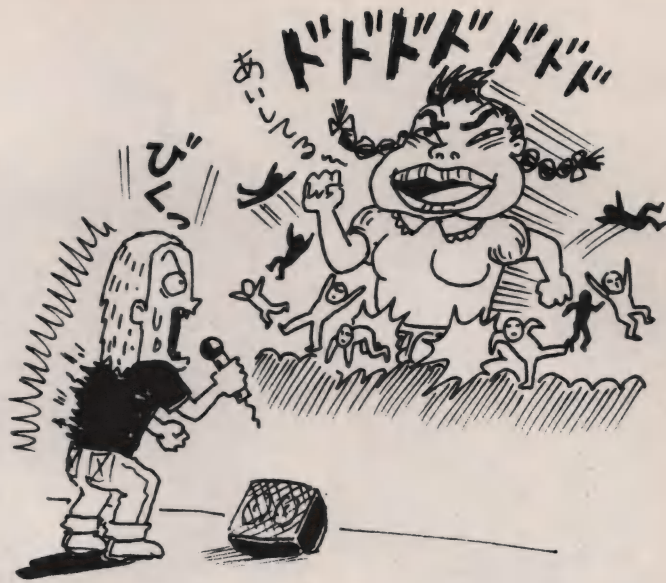
企画・構成 ジェイロックマガジン
all direction by J-ROCK magazine

イラストレーション 山木俊幸
illustration by TOSHIYUKI YAMAKI

【携帯電話、ポケベルをOFFに】

これは故意にしているという人は少ないだろうが、公演途中で呼び出し音が鳴り響くなんて迷惑極まりないし、これらの機器も音響設備と干渉し合う要因を持っているので、「うっかり切り忘れた」なんてないようにしたいものだ。こんなのは常識のレベルである。

【視界をさえぎるような帽子やモノは慎む】

本誌3月号のボイスに「大きな羽を背負った人、大きな帽子をかぶった人、かわいかったけど、ステージが見えない」という意見が寄せられた。ライブでは生の演奏と同時に、演出やステージングなど視覚的にも楽しみたいという気持ちはみんな同じ。自分の後ろにも、同じような気持ちを持ったファンがいることを忘れずにライブに参加してもらいたいもの。最近、客席からぬいぐるみやポンポンを持った手が突き出ている光景をよく見るが、あれは周りの人にはすごく迷惑なことだし、そんなことをされて喜ぶのはアイドルだけだ。

【むやみに押すな、暴れるな!!】

ライブハウスなどのオールスタンディング会場では、常に言われている注意事項。少しでもアーティストの近くに行きたいというファン心理は分かる。だけど、後ろから押されると最前列でステージや柵にしがみついているファンはどうなると思う? もし、後ろから押されて倒れたファンの上に人がなだれ込んだら? こういう意見に必ず返ってくる声は「アーティストは喜んでくれている」。でも、それは一方的な思い込みというケースが多い。本誌95年12月号のインタビューでラルク・アン・シエルのtetsuは「暴れに来ているのか音楽を聴きに来てるのか分からない。その子は俺らが喜ぶと思ってやってるんだろうけど、別にノリがいいっていうのはそういう意味じゃないと思う」と語ってくれているし、ライブ後に「俺はあおってないのにね」っていうアーティストの声も聞く。

それ以前に楽しいはずのライブが、悲しい事件となることはアーティストやライブ会場にとってもショッキングなこと。これは脅しでも何でもない。数年前に実際に大阪のライブハウスで、数十人が将棋倒しになり最悪の結果を招いた事件があったのだ。その後、バンドは喪に服して活動を停止し、ライブハウスは営業停止。バンドは数カ月後に活動を再開したもののライブのできる会場を失い、なんとかライブを行っても以前のような迫力を出せなくなってしまった。この事件の一番の原因を作ったのは、強引に後ろから前に行こうとしたごく一部のファンなのである。

【ゴミ、タバコの吸いがらを捨てない!!】

ライブの時だけに限らないが、会場周辺や駅から会場の道は特に注意したい。その日にだれのライブが行われたか分かるだけに、目に余る状態では、好きなアーティストの評判を落とすことになるぞ。

世間一般からは「怖い」「不気味」といった見方をされているコスプレ軍団だが、彼女たちの中にはライブ終演後、最低でも自分たちが散らかしたゴミは拾って帰る人も多い。それは彼女たちが本当にアーティストのことを考えているからであって、だれかに命令されたわけではない。そういうアーティスト側のことを考えられる人のことを「ファン」と呼ぶ。

【迷惑な追っかけはダメ!!】

エキサイティングなライブを終えたばかりのアーティストを、打ち上げ場所や、宿泊ホテルまで必要以上に追い回す〝追っかけ〟。時には車をチャーターして刑事ドラマさながらの追跡をする輩(やから)もいるようだが…。アーティストだってステージを降りれば普通の人だってことを忘れずに。度の過ぎる行為や、本人達はもちろん他人に迷惑がかかるようなことは慎もう。

【終演後いつまでもいるな!!】

大好きなアーティストが今までいた場所でライブの余韻を楽しむ、また、ひょっとしたら出てくるかもしれないという期待もあるだろう。実際、本誌96年5月号で筋肉少女帯がインタビューで語ってくれたように「エンディングのテープが終わったら特攻服を着て出ていくつもりだったのに、客は10分の1」といったケースもあるが、客電がついて終演を告げるアナウンスがあったら速やかに会場を出るようにしよう。ライブ会場は使用時間でレンタル料金が決められており、その時間が延長すると当然のように延長料金が発生、アーティストサイドに迷惑がかかるのだ。ちなみに大阪フェスティバルホールの13時〜21時の使用料は140万円(土・日・祝は160万円)で延長料は1時間につき2割増し。

【聴かせどころ、MCでは静かに】

アーティストが感情を込めて歌うバラードで、どういう神経をしているのか無礼極まりない声援を送るファン(こんなヤツはファンとは言えない)がいる。また、今までだれからも「人の話は静かに聞きなさい」と言われたことがないのか、MCの途中にも声を上げるファン(何度も言うが、そんなヤツもファンとは言えない)も多い。自分の声をアーティストに届けたいという気持ちは分かるが、アーティストがファンに向け何かを伝えようとしているときは静かに聴く方が楽しみが得られるはず。それ以外の曲と曲の間やアンコールなどでは思う存分、叫びまくってくれ。

【度を過ぎたヘッドバッキングをするな】

激しくヘッドバッキングし過ぎたライブの翌日、軽いむち打ち状態で首が痛い。その痛さも昨夜の名残だと思えばそれほどの苦痛じゃないのかも。

確かに、人間の脳は固い頭蓋(ずがい)骨によって守られており、脳と頭蓋の間にはクッションの役目を果たす髄液(すいえき)がある。しかし、限度を超えたヘッドバッキングは、髄液がその役目を果たせずに、一時的に脳の働きが止まるという脳震とうを引き起こす可能性があるのだ。ライブ中、それが連続的に発生することが脳ミソに良くない出来事だと分かるだろう。

また、首を支えているじん帯や筋肉などが損傷すると、血液の循環障害が起こり自律神経

失調症を起こす原因にもなる。また、海外では、ヘビーメタルのライブ中にヘッドバッキングし過ぎたファンが首の骨を折って亡くなったというウソのようで本当のショッキングな出来事もあった。

しかし、これはあくまでも最悪のケース。やっぱりライブではアーティストが大音量で放つ感情むき出しのサウンドに、ファンも全身全霊で返すというのが礼儀というやつだ。だから、度が過ぎない程度に頑張ってくれ。

【ノドの限界を超えた奇声を上げるな!!】

アーティストがステージに現れると客席からまるで超音波のような黄色い歓声が飛び交う。しかし、ライブがクライマックスを迎えるころ、そんなカン高い黄色い声が、ガラガラの茶色い声に変わってしまっている娘さんがいる。例え2時間そこらのライブとはいえ、普段鍛えていない声帯を酷使していいわけがない(カラオケで鍛えるのとはワケが違う)。ノドにポリープが出来てしまう恐れだってあるぞ。

ARTIST

【あまりに長々と待たせるな!!】

開演前の緊張感漂う空気ってなかなかいいものだよね。もうすぐ始まるライブに向けてソワソワしながらも気持ちを高めていくわけだが、それも度が過ぎれば話は別だ。この辺りの時間感覚は個人で違いが大きいだろうから、編集部でどれくらいなら楽しく待てるかを聴いてみた(ただし、取材じゃなくて、プライベートで遊びに行った場合)。

西原(時間感覚・常に余裕あり):20分は平気で待っているが、それを過ぎるとアーティストに不信感を抱く。

石田(時間感覚・うるさい):20分が限界。それ以上長くなると、無性に腹が立つ。

白栄(時間感覚・ジャストに到着):15分は楽しい。30分を過ぎるといい加減にせえ!!

村田(時間感覚・15分前を心がけているが遅れてしまう):15分くらいは待ってるが、その後は「まだか、まだか」とグチグチ言い続ける。

山田(時間感覚・いつもギリギリにかけこむ):開演時間に間に合うように必死で会場に行くのに、30分も待たされるとイラつく。

大西(時間感覚・感覚がたまに狂う):15分は楽しい。20分でそろそろかなと思いつつ、ここから30分くらいまでの間は少し眠くなる。スタンディングでのライブなら、40分を過ぎたころから足腰にだるさを感じだし、それに伴って怒りがわいてくる。45分を過ぎると、ライブの善しあしより待たされたことが大きな感想として残る。

【いきなりのダイブ】

ものごとにはなんでも心の準備がいる。なんの予告もなしに、いきなりダイブされても受け止められない。ましてロックの低年齢化が進んでいる昨今だ。か弱い女の子ばかりのところにダイブすると大変なことになるし、ダイブする方も非常に危険だ。一歩間違えると大きな事故につながることだから重々気を付けないとダメ。

【ものを投げるときはちょと気遣いを】

ラストナンバーのプレイを終えたアーティストがステージを去るときに、ピックやスティック、ペットボトルやタオルを客席に投げ入れる光景をよく見る。ピックやタオル、百歩譲ってペットボトル(空のヤツね)は許せるとしてもドラムスティックや水はちょっと…。ステージから勢いよく投げられたスティックは投げ方によっては凶器に変わることもある。実際に投げられたスティックに当たってケガをしたという人もいるのだ。自分たちはステージが終わるとシャワーを浴び、着替えられるが、ファンは濡れたまま家路につくことになるのだ。アーティストもライブの盛り上がりばかりでなく、終演後のファンのことも少し考えてみては?

掟 No.2 行程編

今度は、あなたが手にしている雑誌の1本の記事が出来るまでの行程、アーティストの作品であるCDができるまでの流れ、ライブが行われるまでの進行過程を簡単に解説しよう。一冊の雑誌、一枚のCD、一本のライブが完成するのにも"掟"は存在する。

雑誌ができるまで

①**取材依頼**:アーティストの事務所、もしくはレコード会社に取材の依頼を行う。

②**取材**:例えばライブレポートの場合は、関係者窓口でアーティストの担当者(大抵がマネージャー)にあいさつし、写真撮影をする場所や撮影NG曲(特に静かな曲などの場合は、シャッターの音が聞こえてしまうので撮影NGとなることが多い)などの説明を受け、ライブが始まるとライターはひたすらメモを、カメラマンはひたすらカッコいい写真を撮る。

③**写真チェック**:カメラマンから写真が上がってくると、それを本誌のデザイナーがいったんチェック、誌面で使いたい写真を数点選び出し、今度はアーティスト側に使用写真を選んでもらう(アーティスト側から「お任せ」といった写真チェックのない場合も多い)。

④**原稿上がり**:ライターはライブ中にとったメモを見ながら、ひたすら原稿を書き上げる。書き上がった原稿は、デザイナーの鋭い感性によってデザインされた誌面に組み込まれる。

⑤**写真チェック(明)**:デザイナーがチェックした"ライブ感があってカッコいい写真"を、アーティスト側も気に入って花マルを付けて「絶対に使ってください」というコメント入りで返してくれることも多い。「ジェイロックの写真はぶれている」と言う人もいるが、アーティスト本人がライブ感のある写真を選んでくれていたりするのだ。

⑥**写真チェック(暗)**:希望するのは"ライブ感があってカッコいい写真"だが、「ライブ感より顔がハッキリ写っていなきゃイヤ」というアーティストもいるため、表情はいいけどライブのインパクトに欠ける写真が選ばれてしまうケースもある…。最悪、他のメンバーはOKが出ているのに一人だけNGだったり、そこまでいかなくても、1枚しかセレクトされていないという場合も。こうなると、読者からの○○さんの写真だけ1枚しかないという怒りのお手紙を思い浮かべ、編集部では重い空気が流れるのだ。

⑦印刷

⑧製本:1カ月間の汗と涙の結晶である原稿の数々が1冊の本となり本屋さんに並べられる。

CDができるまで

①**ミーティング**:アーティスト、レコード会社、プロダクション(マネージャーなど)、音楽出版社(著作権の管理を行う会社)が集まりレコーディング前の話し合いが行われる。話される内容は「制作費について」「宣伝方法」「アーティストイメージ」「作品のテーマやコンセプト」「プロデューサーをどうするか」などで、これにタイアップが絡んでくるとテレビ局やCMディレクターなどの人間が加わる。

②**レコーディング**:制作費の調達も出来、楽曲も完成し、リハーサルも済めば、いよいよレコーディング。まずは"リズム録り(ドラム、ベース、バッキング・ギターなど)"、そして"オーバー・ダビング(リード・ギター、キーボードなど)"、"ボーカル録り(ボーカル、コーラス)"という手順で行われていく。

③**マスターテープ完成**:最後の仕上げであるTD(トラック・ダウン)の作業が終わると、マスターテープが完成。

④**ジャケット作成**:当然、CDにはジャケットが必要である。そのジャケットにもアルバムのコンセプトが反映されていたり、アーティストのキャラクターが押し出されたりして様々。アーティストとデザイナーが何度もミーティングを行い、制作に取りかかる。

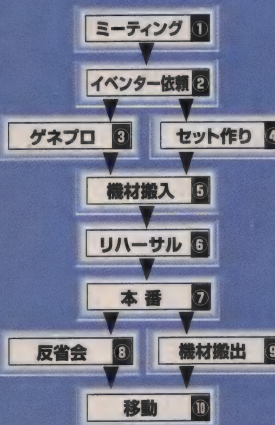
⑤**CDプレス**:マスターテープに収録されている曲を音質などの微調整を施し(マスタリング)、インデックス・ナンバー(CDプレイヤーに表示される曲のNo.)や演奏タイムなどの情報を加え、CDのプレス工場へ。

⑥**ジャケット完成**

⑦**パッケージ**:出来上がったCDとジャケットがパッケージされる。つい最近までは、ケースへのCD封入は手作業で行われていた。

⑧**CD完成**

⑨**レコード店へ**

ライブ開催まで

①**ミーティング**:アーティストの知名度や動員力、バイタリティーによって「全国何カ所にするのか?」「ライブ会場はどこにするのか?」などをアーティストのプロダクション、レコード会社などが決め、今度はアーティストやツアースタッフ(舞台監督、制作デザイナーなど)を交え「サポートメンバーはどうする? だれにする?」「セットはどんなイメージに? 演出効果は?」といった具体的なことが決められる。

②**イベンター依頼**:各地のイベンターに会場の手配や宣伝、チケットの販売、当日の警備や案内など、ライブを円滑に行うための作業を依頼する。

③**ゲネプロ(ライブ前の下準備)**:ツアー日程が近づくとアーティストはリハーサルに入る。まずは演奏曲の洗い出しと曲順の決定だ。そして楽曲をもう一度煮詰め直し、ライブ用にアレンジを施したり、実際のライブと同じように1曲目からラストまでの通しリハなどを行う。また、合宿などを行って入念に練り直すアーティストも少なくない。

④**ステージセットや照明のプランを考える**:舞台監督や制作のデザイナーはアーティストの希望を取り入れたステージセットをデザインし、いろんな演出や照明プランを考案し、制作に取りかかる。

⑤**機材の搬入、ステージセットの組立**:いよいよライブ当日。まずは機材が運び込まれ、ステージセットが組み立てられる。セットが出来上がると次は楽器が運び込まれ、各楽器のテクニシャンがセッティング。そして舞台装置、音響、照明などのチェックが行われ、だいたいその作業が完了したころにメンバーが会場に到着する。

⑥**リハーサル**:本番前のウォーミングアップも兼ね、ライブで不安な部分を確認したり、PAの音合わせや照明の最終チェックも同時に行われる。このリハーサルの終わるころが、客入れの時間(開場時間)ぐらいになる。

⑦**ライブ本番!!**

⑧**反省会**:例えプロのアーティストであっても本番でのミスやトラブルはある。そんな失敗を次のステージで繰り返さないためにも反省会が行われる。時には激論となるが、同じミスを絶対にせず、次回を最高のライブにするためには必須。しかし、名目上だけの"反省会"で、そのまま"打ち上げ"に突入してしまうケースも…。

⑨**機材の搬出**:ステージセットの解体ライブが終了すると即セットの解体が行われ、会場の清掃に入る。決められた時間内に会場を明け渡さないと会場使用料に延長料金が加算されてしまう。

⑩**移動**:ステージの解体が済むと次の会場場所へと向かって機材車は移動。アーティストも"打ち上げ"でガソリン補給し、ホテルでひと休みすると、次のステージへと旅立っていく。

掟 No.3 à la carte

【著作権って何？】

この言葉を初めて聞いたという人はほとんどいないと思うが、ちょっとその音楽的な内容をおさらいしておこう。アーティストがプレッシャーと戦い、こだわりを持ち続け、才能を信じて…。と新しい曲を生み出すのは困難で時間もかかるものである。それに対してあるものを盗んで曲を作るのは簡単だよね。そんな才能もこだわりもない人間が、マネた原曲の力で売れてしまったりしたら、苦労して作った人間にとってこんなバカバカしいことはないし、一生懸命、新しい曲を作ろうとするアーティストもいなくなってしまう。そんなことが起らないように作られたのが著作権。つまり、これはクリエイティブな本当のアーティストを保護する法律だ。この著作権に基づいて、許可が必要になったり、アーティストの元に印税が入ったりしている。

【JASRAC、その存在は…】

じゃあ、その数々の許可や支払いをするために、わざわざアーティストの元へ行くのかとなるとそんな面倒なことはやってられない。そこで、音楽に関する著作権を管理してくれるのがJASRAC（ジャスラック：日本音楽著作権協会）という団体だ。漫画の中で歌を歌うシーンが描かれていたら、ページの隅を探してみてほしい。JASRAC 出××××××-×××と書いてあるはずだ。これはちゃんと届けているという印とその許諾番号だ。

【他のアーティストの曲をカバーする】

筋肉少女帯の大槻ケンヂやデルジベットのISSAYのように、だれかの曲をアルバムの中でカバーした場合、著作権が発生するのは想像にたやすいと思う。では、昨年12月、ラルク・アン・シエルが大阪ベイサイドジェニーでのライブでデッド・エンドのナンバーをカバーしたケースではどうだろう。実は、そこにも著作権が発生する。アルバムではもちろん、ライブでカバーする場合でも、その曲の権利を持っている人にお金を支払わなければならないのだ。

【解散したバンドの曲をライブで聴くには】

去年は解散が異様に多い年だった。でも、たとえ解散しようともその曲は聴きたいというのがファン心理というもの。現に甲斐よしひろはソロになっても甲斐バンド・甲斐ファイブの曲をライブで演奏しているし、氷室京介、布袋寅泰のライブでもBOØWYの曲が飛び出したりするが…。

著作権上では「作曲者や作詞家はその曲を演奏する権利を持つ（演奏権）」となっているので、自作のナンバーを自らのライブでやるのはOK。そうでなくてもちゃんとした手続きとお金を支払えばなんの問題もない。あとは本人の気持ち次第だ。

【雑誌では】

雑誌に歌詞をそのまま掲載したり、原稿内で歌詞の一部を引用するには許可が必要。ここにも著作権が発生しているのだ。雑誌の発行部数、歌詞の引用度合いによって定められた料金をJASRACに支払わなければならない。だが、これには例外がある。レコード会社から発行されている雑誌（ビクターエンタテインメント（株）のN誌など）については、自社アーティストに限ってフリーになる。自社の報道はOKなのだ。

【カラオケでも】

手軽な遊びとしてすっかり定着したカラオケ。歌い狂っている人も少なくないことだろうが、ここにも著作権が発生する。つまりカラオケで歌うとその作詞、作曲者にはちゃんと印税が入るようになっているのだ。何気ないカラオケも巡り巡ってアーティストを支えていることになる。

【レンタルCD】

最近はやや落ち着いているようだけど、レンタルショップが出始めたころは大きな問題として騒がれたものだ。レンタルについての約束事は、CDのバックカバーに必ずと言っていいほど記入してある「このCDは〜」でうたわれている通りの貸与期間が設けられ、レンタル料がJASRACを通してアーティストに支払われる。だから、JASRACの調査によって〝実績なし〟と判断されると、そのアーティストには支払われない。また、レンタルショップに最新の洋盤がないのは、リリースして1年間はレンタルできないという法律があるから。

【レンタルビデオ】

映画やVシネマがずらっと並ぶレンタルビデオショップ。他店との競争が過剰な地区では笑ってしまうくらいマイナーでくだらない作品まで並べる所が少なくないのに、なぜかミュージックビデオは余り見かけない。それは日本のメーカーの取り決めで、ミュージックビデオのレンタルは基本的に禁止されているからなのである。

【アーティストとレコード会社】

メジャーデビューを果たしたばかりのアーティストが「○○レコードが僕たちのことを一番理解してくれていた」と言っているのをよく耳にする。そこでは、よく話し合った上で「○年契約」や「○年でアルバム○枚」という契約を交わすことになるのだが、契約更新時に、レコード会社を移籍してしまうケースも少なくない。それは、その○年の間にレコード会社の体制や、アーティストの音楽性が変わってたりして、より活動しやすいレコード会社を求めた結果なのである。レコード会社によっては、ロックは強いんだけどポップスが弱かったりと、得意とするジャンルが違い、それによってアルバム制作費や宣伝費などの条件が変わってくる。だからアーティストはより音楽に専念できる環境へとレコード会社を選択する訳だ。この他にもアーティストが何か新しいことをするためにレコード会社を移籍したり、アルバムセールスが思わしくなくクビにされてしまうケースもある。

【サポートメンバーって】

矢沢永吉のツアーでは元ドゥービーブラザーズの、ジョン・マクフィー（G）、キース・ヌードセン（Ds）が参加。また、吉田美和のソロでは、レコーディングに参加したニューヨークの超ベテランスタジオミュージシャンがこぞって彼女のツアーに登場することが決定。ワールドクラスのプレイを日本で体感できたりするわけだが、そもそもサポートミュージシャンの存在って何？ と疑問に思っている人もいるだろう。単純に言ってしまえば、メンバーがいないパートをフォローするために呼ばれるミュージシャンのことだが、その関係は一度だけの参加から、何かある度に必ずといったケースまで、バンドによって様々だ。

中でも、サポートの領域を越えてその人なしではサウンドがなり立たない存在にまでなっているといえば黒夢のそうる透とB'zの明石昌夫。黒夢の二人のインタビューには必ずと言っていいほど話題に上がるそうる氏は彼らのアルバムはもちろん、ライブにも必ず参加。明石氏はB'zのアレンジこそ外れてしまったが、昨年の「LIVE-GYM Pleasure'95 "BUZZ!!"」、アルバム『LOOSE』、そして現在開催中のツアーではベーシストとしてのプレイで以前以上にその存在をアピールしている。また、サポートからメンバーとして迎えられたパーソンズの田中詠司（G、元ガラパゴス）や、奥田民生のコンサートツアー『29・30』のサポートを務めた古田たかし（Ds）、長田進（G）、根岸孝旨（B）がドクター・ストレンジラブを結成したというケースもある。

【2枚組のCDがあるのは】

ベストアルバムやライブアルバムなどで見られる2枚組CD。これは値段をつり上げようとしてこうしているのではない。例えば60分テープなら60分以上の録音が出来ないのと同じで、CDにも1枚で記憶できる上限があって74分（実際にはあと数分入るらしいが）、CDシングルなら20分が限度。それ以上になるものは2枚組となる。例外として、アナログ盤からCDへと復刻される時、LPが2枚組だから、というケースもある。

【チャートはどうやってできる？】

いろんなチャートが出回っていて、それぞれに順位が違う。よく目にするチャートは、レコード店からの注文数…つまりレコード会社からの出荷数によって作成されていたりとそれぞれの取り決めた調査方法で集計しているので、一つの目安に過ぎないことをお忘れなく。ビッグネームのアーティストが音源をリリースする際に、絶対に売れることを見込んでレコード店が大量に注文し、チャートの上位にランキングされているが、各店で在庫が山のようにあるということもあり得る話だ。ちなみに、大手レコード店が作成しているチャートは、その店での売り上げ数、もしくは全国のチェーン店での総合売り上げ数によってランキングされている。

結局、〝チャート〟というものは、上位にランキングされていても必ずしもその音源が日本全国で〝売れている〟とは限らなかったりする。うのみにして踊らされるのではなく、あくまで楽しむ材料にするのがベストだろう。

本誌のオリジナルチャートはどうなっているのかも説明しておこう。まず、アーティストのベスト50だが、これはマガジンが発売された27日から1カ月（翌月の26日まで）の間に寄せられたアンケートハガキと、本誌が情報提供しているTV番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」の月間票数（4週間分のトータル票数）を集計し作成しているのだ。そして、パート別のランキングは本誌のアンケートハガキのみで作っている。だから、アーティストのランキングでは上位にいてもパート別では結構下位だったり、逆にアーティストのランキングでは下位にいてもパート別では上位だったりするので、どのアーティストがTVで強いのか、マガジンで強いのかというのが順位から推測できる。

TOMOYASU HOTEI

King & Queen TOUR

March 14th 1996 at Kyoto Kaikan Dai-1 Hall

「スリル」の分厚いビートが会場中を揺らしている!!

駅を降りる度に、いつも新しい文化と古来の文化が同居するかのような不思議な気分に陥らせてくれる街、京都。この時間の流れを超越した街に、作品に対する十分な音楽的評価と、それを象徴する十分なチャートアクションを手にしたニューアルバム『King & Queen』を携えて布袋寅泰のサイバー・ロックンロールショーがやってきた。穏やかで一種神聖なたたずまいを見せる古都の夜空に、今夜はポップでプラスティックなサウンドが響きわたる。

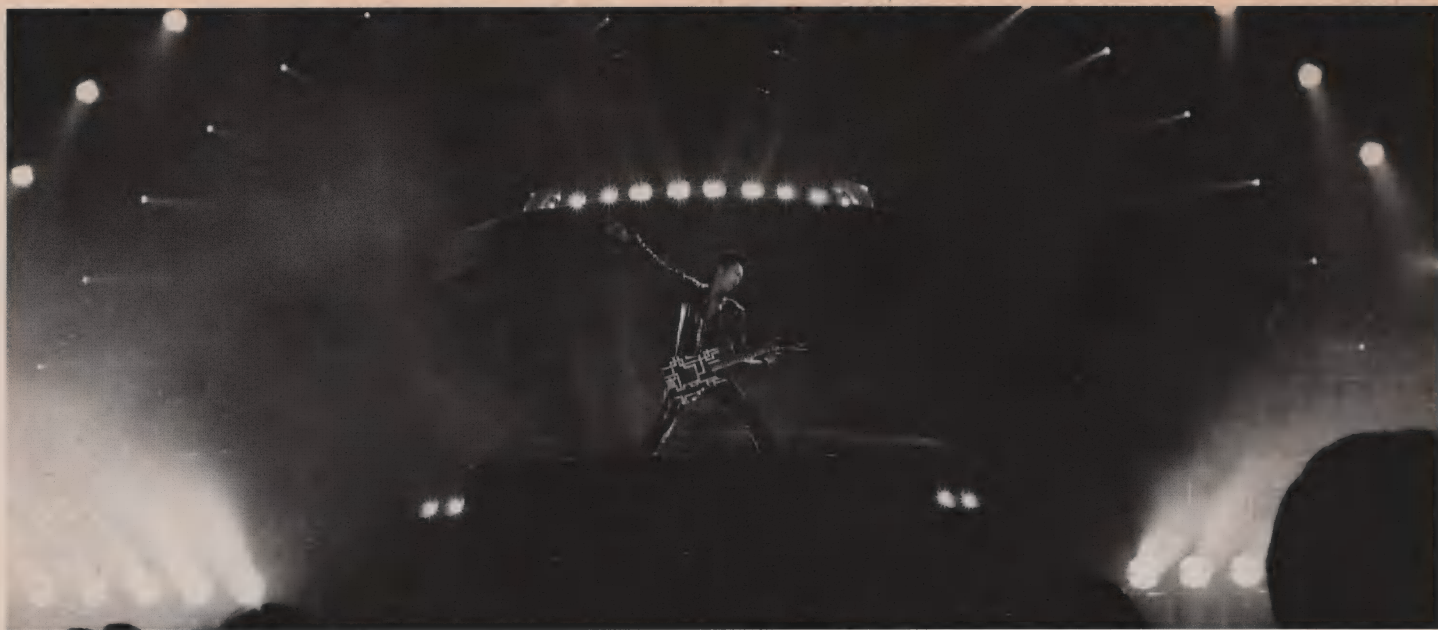
当然のごとく新作のナンバーをたくさん聴かせてくれる今回のステージは、『King & Queen』にさりげなく漂っていたロックの原点＝シンプルなロカビリーへの愛情を色濃く振りまいた。この音を生々しく表現するために集まってきた新しいサポートのメンバーは、ギターにエゴをむき出しにせずに気持ちいいくらい優柔不断なプレイで布袋を的確に支援する辻剛。キーボードにそのキャリアと音楽理論をかなぐり捨てたかのようなアクションを見せ、センスあるプレイを聞かせる富樫春生。ベースはモヒカンスタイルの頭に集約されるような攻撃的な重低音で暴れるヒロシ、ドラムはいい意味で荒削りでケンカっ早そうなビートをたたき出す中幸一郎。彼らがこのツアーだからこその生々しい骨格を築き上げる。

前回ツアーまでの職人的なバンドのち密さと比較すると、ステージ上で起こるハプニングでさえエンジョイしてしまえるような、より感情的な自由さと、腰の強さを印象付けた。このテのバンドには、こぢんまりとした安定よりも、瞬間的な爆発からなだれ込む奇跡のグルーブを期待するのが礼儀というものだろう。親愛の情を込めて布袋は彼らを「危なかしい連中」と評するが、こんな危なさならロックのライブには大歓迎だ。

ステージ上のSF映画を思わせるような変幻自在で強烈なイルミネーションが観客を照らしつける中、演奏される数々のナンバー。「スリル」で、黒のジャンプスーツに身を包んだ布袋がギターをかき鳴らしながら独特のスタイルで歌うと、音圧と同時に、彼のカリスマが発する存在感の波がステージから霊的なエネルギーのように流れだす。素晴らしいメロディーと並ぶ、この曲のもう一つの魅力である分厚いビートは、予想通りアルバムで聴かれるサウンドを超越し、ステージの上から、客席、そしてもしかしたら会場ロビーまでもを揺らしそうなほどだ。

身体が観客と交わり始め、布袋にロックンロールのベーシックなウォーキングスタイル、”ダックウォーク“を披露するノリが出始めたころ、彼はMCでこの『King & Queen』を”日本全国で100万人以上の人が聴くことになる“という喜びと、自身の作品が、チャートのトップを飾るものの中に見られる中身のない作品とは根本的に次元の違うものであることを自意識満点に語った。「俺の『King & Queen』はちょっと違うぜ」。中身のあるアーティストからあふれ出る自意識ほど説得力と美しさを持って響く言葉はない。

スピーディーな展開に心を躍らせている観客。しかし、富樫のジャージーなピアノと布袋のレイジーなボーカルが、空間をスルっとしゃれたダンスホールへ滑り込ませる。フランク・シナトラがステージそでから満面の笑顔で飛び出しそうな雰囲気に心が和む。会場中のラッキーなカップルやアンラッキーなカップルの片われは目を閉じて心の中のきらびやかなフロアでチークを踊っているのだろうか…。

重心の低いブギーにサイバーなエレクトロニクスサウンドを注入したニューナンバー「CAPTAIN ROCK」は、たくさんの”歌いたい“という感情に火をつけ、その声の大きな塊が轟(とどろき)となって再び会場を揺らす。「…SUPER STAR CAPTAIN ROCK COMING DOWN…」。会場中の爆音のような大コーラスが怒涛(どとう)のビートと相まって、観客は

1996年3月14日　京都会館第1ホール

TOMOYASU HOTEI

その完ぺきな一体感に自らのテンションをグッと上げる。ステージ中央で仁王立ちの布袋がサイボーグの雄叫びを思わせる過激にビブラートのかかったリードギターで客席に並々と油を注いだかと思うと、次のコーラスではさらに大きな声の塊がステージに向かって飛んだ。

ロンドンパンクの原型に近いパワーをまき散らす「BOYS BE AMBITIOUS」に心酔している僕の目に、一曲プレイするだけでピックがボロボロになってしまうとうわさに聴く布袋のウルトラ・ピッキングが飛び込んでくる。テクニックとセンスに裏打ちされた勢い優先のプレイが、音楽と素直に向き合える感性をキツく刺激。もうひたすら頂点を目指して急上昇を続けるしかない京都会館…。いかしたロックンロールのスピリッツとセンスあふれるポップフィーリングが織りなす、新しいはずなのにノスタルジックさを同居させた新旧のナンバーたち。時間を超越した布袋のロックサウンドが耳にとても熱い。しかし、観客の感覚はまだあくまでも「ほんの一瞬前に始まったばかり」なのに、冷静な時間の流れは早くも終盤を呼んでくる。僕たちの時間の感覚も本当にどこかに失(う)せてしまったようだ。

布袋の弾くエレクトリック・シタールの静かな調べが流れ始めると、ようやく心の荒波が鎮まり、ふと我に返る会場の熱気達。どうやら、〝時間〟という超現実的な束縛を乗り越えた、〝場所〟も〝音楽〟も〝観客〟も、これ以上登りようのない大切な場所に到達することができたようだ。

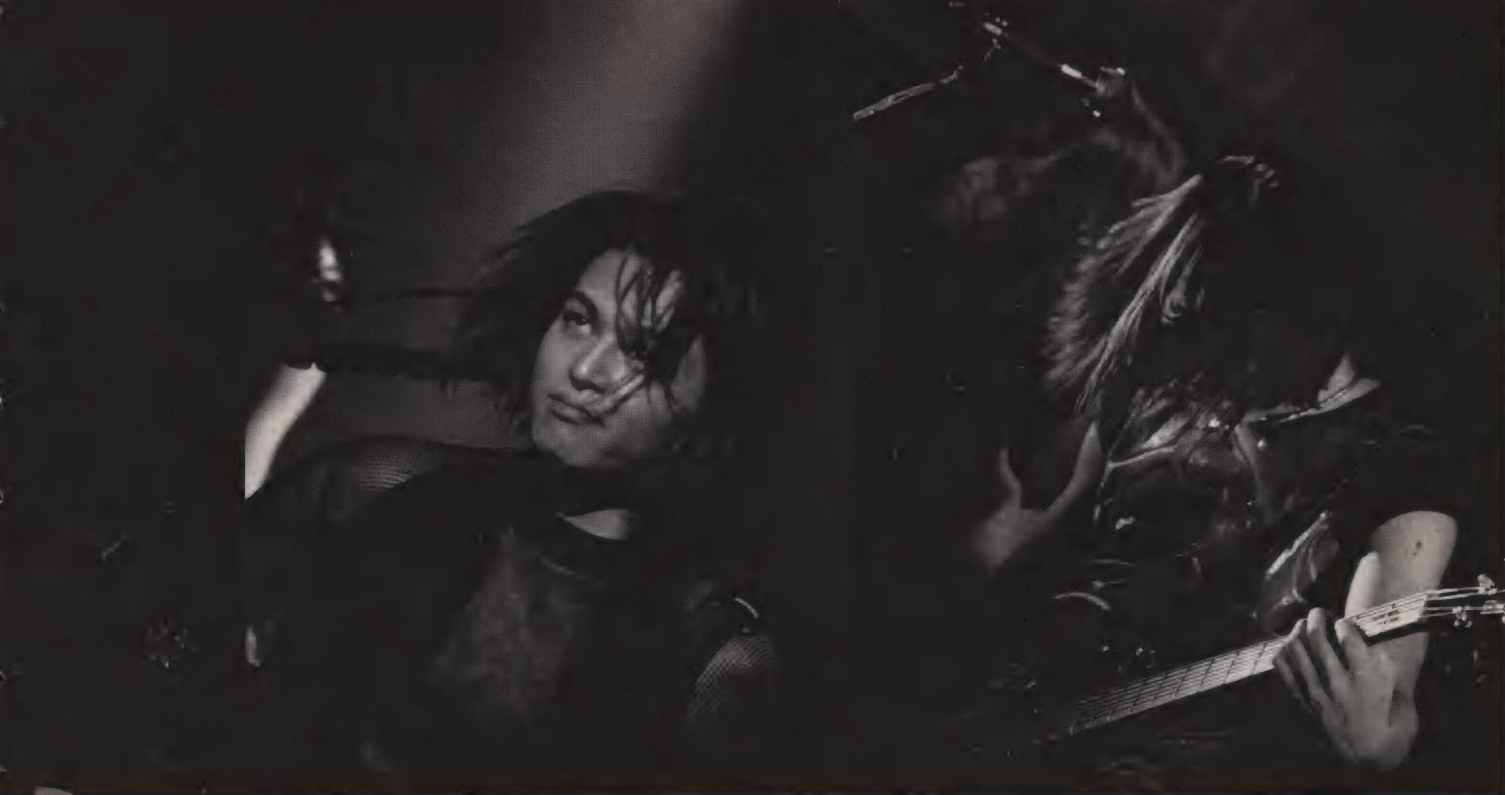
この静かな調べで、布袋寅泰と京都のファンが作り出した夢見心地なロックンロールショーは静かに幕を閉じていく。ツアーはまだ4本目。長いツアーの途中には、布袋自身があこがれるデイヴィッド・ボウイとのジョイントライブという至高の瞬間も待ち受けていると聞く。布袋とそのバンド、そして50人近いスタッフは、会場ごとに素晴らしい音楽をふりまき、熱狂という超高級なガソリンを吸い上げながら、巨大化し続ける。

今回のKing & Queenツアーには何だかそんな当たり前の言葉が今まで以上にピッタリとハマってしまうのだ…。

［文・西原 朗］

SIAM SHADE

スーパーKAZUMAウルトラ博士の大冒険'96春

March 16th 1996 at Osaka W'OHOL

ステージのパワーと客席のエネルギーが繰り広げたデッドヒート!

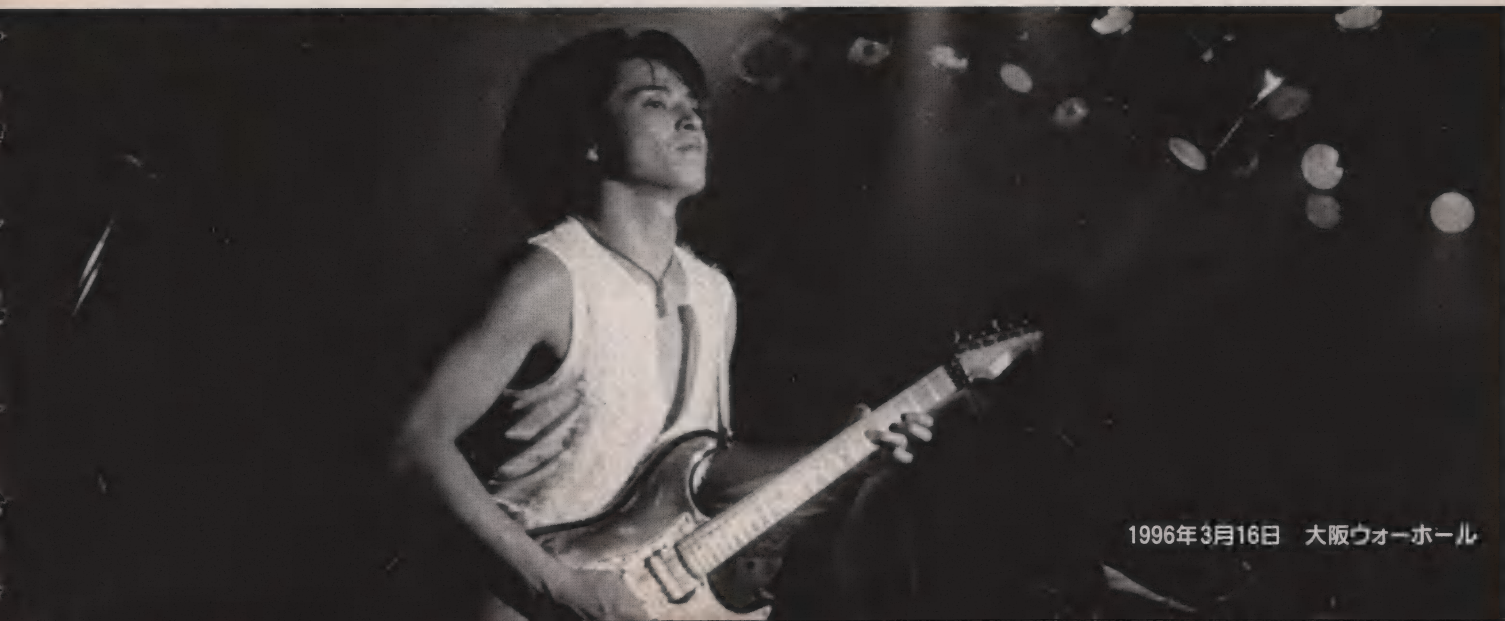
チケットも即日ソールドアウトとなった大阪ウォーホール。オールスタンディングの客席は、うれしさと待ち遠しさが入り混じり異様な熱気であふれ返っている。女の子の勢いに負けることなく、ステージ前に陣取る元気な男の子たち。型破りなシャム・シェイドというバンドがこんなところからも垣間見えるようだ。

客電が落ちると、メンバー出演によるビデオ「秘密戦隊ゴレンジャー」がスタート。オープニングテーマに合わせて役柄と共に各メンバーが紹介され、テンポよくストーリーが進んでいく。笑いの渦が巻き起こり、通常ライブ前に漂うドキドキした緊張感とは異なる、ワクワクした開放感で埋め尽くされる客席。「やりたいから、好きだからやっている。バンドマンだからこれもあれもやっちゃダメ。そんな概念をブチ壊したい」と、以前インタビューで力強く語ってくれた彼らの思いは、観客にまで確実に浸透しているようだ。彼らの個性の一つであるこの時間は、シャム・シェイドの音楽に対する言い訳にならないからこそ純粋に楽しめ、これから始まるライブへの期待の扉を一緒に押し開いてくれる。

ビデオの終了と共に観客たちは一斉にステージ前まで走った。例えようもない叫びが、ただステージに浴びせかけられる。

SEが観客のテンションを急上昇させる中、JUNJIのシンバルを合図に幕が落とされた。1曲目は「Imagination」。彼らには狭すぎるステージでサウンドが大きなうねりを持ち、客席を容赦なく飲み込んでいく。自分の体が音の迫力に一瞬浮き上がってしまう快楽。この快楽の存在は、今この場所で、この音の中でのみ確信することができる。「さあ、来い」何度も声をかけ、観客を挑発するCHACKは、KAZUMAとの揺るぎないボーカルコンビネーションで、ハードなサウンドに幾重にも色を塗り付けながら言葉をはっきりと突きつけてくる。「ヒマさえあれば練習している」と言う彼らの言葉を十分に納得させる歌声とプレイ。しかしけっしてテクニックだけにとどまらないのが、シャム・シェイドだ。ハードなサウンドの中にきちんとメロディーを盛り込み、一緒になって歌ったと思えばこれでもかとばかりにプレイで魅(み)せる。観客はそんな彼らの音楽に応えようと、リズムに集中して体を任せ、ただ自分を開放するのみ。そして同時にこの空間の中で、自分たちの感性を磨いているようにも見えた。

「このハコに合ったいい曲をいっぱい持ってきたから、おまえら覚悟してかかって来い。いいか～」CHACKの叫びから始まった「終わらない街」。NATINの疾走感漂うベースが全体をグイグイ引っ張り、DAITAの滑らかなギターソロが楽曲をギュッと引き締める。次々と襲いかかってくる「IMITATION LOVE」「今はただ…」。歌声とサウンドが絡み合いすき間を作らない彼らの楽曲は、常にだれかが前面で歌っているようだ。CHACK&KAZUMAが歌う。DAITA&KAZUMAのギターが鳴く。NATINのベースがうなる。JUNJIのドラムが力強く叫ぶ。そんな音と共に前へ前へと出てくるメンバーが、彼らの音楽をさらにダイナミックなものへと進化さ

1996年3月16日　大阪ウォーホール

SIAM SHADE

せていく。

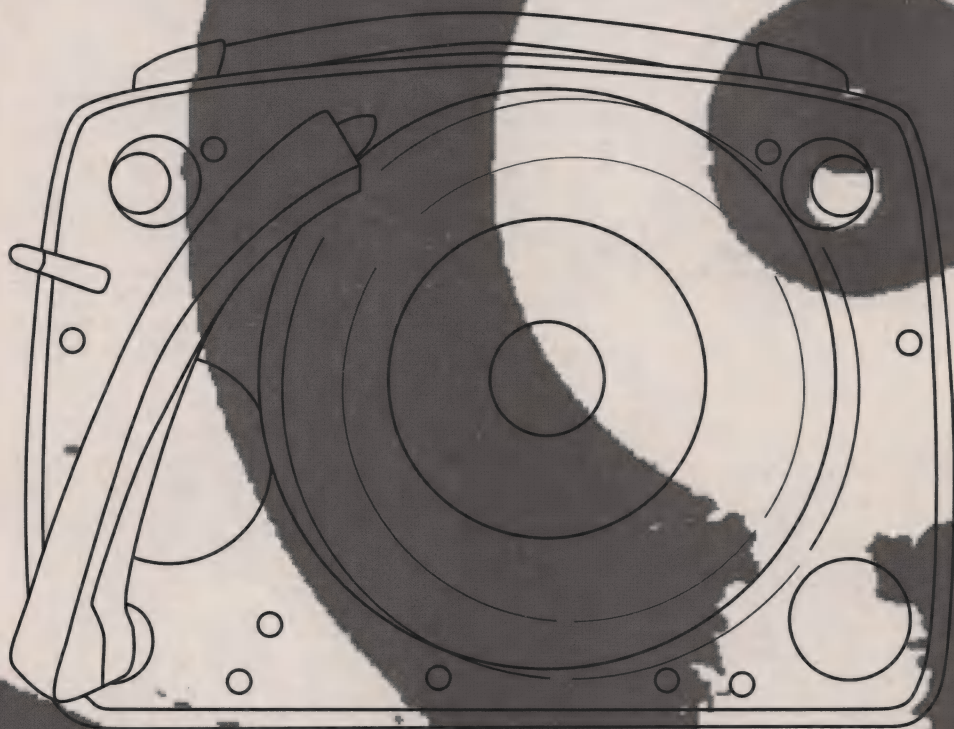
ポップで新鮮な印象を受けたKAZUMAの新曲の後は、「まだライブは始まったばかり」と今にも蒸気を吹き出しそうな会場をさらに加熱し、「今日は素顔のシャム・シェイドを楽しんでくれ」と「素顔のままで」へなだれ込む。上半身を前に倒し全身で歌うCHACKに、客席は「LOVE ME,KILL ME,TAKE ME」と声を一つにして応え、ステージから発散する彼らのすさまじいパワーと客席の強力なエネルギーがデッドヒートを繰り広げる。彼らの自然な姿は一生懸命のカッコ良さを伝え、そのカッコ良さが生み出す音楽は無法地帯に放たれた怪物のように暴れ回った。

「TIME'S」で大きく波打つ客席。無心に音楽に溶け込んでいるその姿には、何も言葉は見つからない。自然に反応する体や感情を止める術はだれも知らず、ステージの狭さに思うように動けなかったメンバーも辛抱し切れずに、モニタースピーカーを踏み越えてステージのギリギリまで乗り出してプレイしている。続く「RAIN」ではイントロからDAITAとCHACKが頭を振って体で大きくリズムを取り、ステージから吐き出された感情が怒とうの勢いで客席に攻め込んできた。「最高だあ」CHACKの叫びが何度も上がる。しかしどんなに感情をむき出しにしても、彼らは音楽を聴かせることを忘れたりはしない。がっちりと固められたリズム隊は崩れず、ギターは依然として軽やかにその上を踊り、歌声はしっかりと言葉を届けてくる。〝音楽のみで圧倒する〟。これが出来るからこそ彼らはビデオでふざけてもコミックバンドにならないし、シャム・シェイドであり続けるのだ。ありのままを見せるライブハウスで、彼らはそんな自分たちを証明してみせた。

シャム・シェイドのメジャーデビュー後初のツアー。確かにまだまだ粗さも感じられたが、自分たちのやりたいことを詰め込んだ彼らならではのライブは、彼らの音楽へのピュアな情熱がより浮き彫りになって伝わってくる。きっと彼らの自信はここにあり、無意味な概念をブチ壊し続けることでこの自信をさらに確固たるものにしていくはずだ。次回は彼らにしかできないライブを大阪のホールでも見せてもらいたい。

［文・山田純子　撮影・金原 誠］

PLAY LIST

1	Imagination	8	KAZUMA新曲	encore	
2	時の川の中で	9	素顔のままで	1	インスト
3	CAN'T FORGET YOU	10	CALLING	2	NO CONTROL
4	終わらない街	11	PRAYER	3	LOSE MY REASON
5	IMITATION LOVE	12	TIME'S	4	DON'T TELL A LIE
6	今はただ…	13	RAIN	encore	
7	大きな木の下で	14	SHAKE ME DOWN	5	レイプマン

ICE、Eins:Vier、ACTION、AMG（NEW SELECT）、THE YELLOW MONKEY、石田長生、忌野清志郎、Valentine D.C.、X JAPAN、大黒摩季、奥田民生、小沢健二、ORIGINAL LOVE、GARGOYLE、甲斐よしひろ、筋肉少女帯、久保田利伸、栗林誠一郎、GLAY、CRAZE、黒夢、QUNCHŌ、幻覚アレルギー、cornelius、米米CLUB、近藤房之助、ZARD、斉藤和義、坂本龍一、サザンオールスターズ、佐野元春、ZYYG、シーナ＆ザ・ロケッツ、sheen、シェラザード、塩次伸二、SION、SIAM SHADE、JUDY AND MARY、JUN SKY WALKER（S）、少年ナイフ、SUPER JUNKY MONKEY、THE STREET BEATS、SPARKS GO GO（NEW SELECT）、SPITZ（NEW SELECT）、SPAED、SLY、妹尾隆一郎、SOUL FLOWER UNION、Char、CHAGE＆ASKA、Chap Chimes、CHARA、TWINZER、D.T.R、DEEP、T-BOLAN、DEEN、DER ZIBET、DOG FIGHT、TOMOVSKY、DREAMS COME TRUE、永井隆、長渕剛、nuvɔ:gu、NOKKO、PERSONZ、HYPERMANIA、▲THE HIGH-LOWS▼（NEW SELECT）、BOW WOW、BUCK-TICK、浜田省吾、浜田麻里、PAMELAH、B'z、PIZZICATO FIVE、BIG LIFE、氷室京介、FEEL SO BAD、FIX、BLOODY IMITATION SOCIETY、BLANKEY JET CITY、布袋寅泰、松任谷由実、THE MAD CAPSULE MARKET'S、MANISH、Mr.Children、media youth、modern grey、THE MODS、矢沢永吉、山岸潤史、憂歌団、LOUDNESS、LA'CRYMA CHRISTI（NEW SELECT）、RUFFIANS、LAUGHIN' NOSE、L'Arc~en~Ciel、LUNA SEA、渡辺美里、WANDS（ニュースは96年4月現在）

CUT UP 101

artist news
featuring nice artists!!

12 小沢健二

ツアーも無事終了。5月16日にはニューシングル「ぼくらが旅に出る理由」をリリース。この曲はCX系「将太の寿司」の主題歌だ。

13 ORIGINAL LOVE

6月上旬にリリース予定のニューシングルをレコーディング中。大ヒット曲「プライマル」に続く新曲は、アップテンポでさわやかな曲になりそう。

14 GARGOYLE

ツアーもいよいよ終盤。5月3日大阪ウォーホール、4日京都ミューズホール、7日岡山ペパーランド、8日広島ネオポリスホール、12日東京日清パワーステーション。6月21日には、新曲1曲を含むベストアルバム『border-less』をリリースする。

15 甲斐よしひろ

現在は夏のレコーディングに向け、曲作りに没頭している。夕暮れ時には近くの公園でリフレッシュを兼ねて花見などをしているらしい。

6月28・29・30日、7月12・13・14日に東京日清パワーステーションで『ロッキュメントⅡ』を行う。

7 忌野清志郎

ニューシングル「世界中の人に自慢したいよ」をリリース。先日オンエアされたFM802の特番では、仲井戸麗市との共演でリスナーを楽しませた。

8 Valentine D.C.

熱いライブを見せつけた全国ツアーも終了。現在は次の活動に向けて準備中だ。

9 X JAPAN

3月13日の『DAHLIA TOUR』名古屋公演で、YOSHIKIが頚椎椎間板性(けいついついかんばんせい)ヘルニアを発症し、残念ながらその後の公演はすべて中止となった。当分の間安静にして治療を行うためコンサート活動は出来ないようだが、彼は絶対復活してくれるはず。とにかく元気な姿を見せてくれる日を待とう!

10 大黒摩季

年内発売のアルバムに向けて楽曲を制作中。

11 奥田民生

ツアー「イージューライダー」を展開中。5月1・2日福岡サンパレス、4日鳥取県民会館、6日香川県民ホール、8・9日広島厚生年金会館、11日倉敷市民会館、12日愛媛県民文化会館、14日静岡市民文化会館、20日京都会館、21日神戸国際会館ハーバーランドプラザ、23・24日大阪厚生年金会館、28日宇都宮文化会館、30日大宮ソニックシティ、31日市川市文化会館他。

5 THE YELLOW MONKEY

まもなくコンサートツアー『FOR SEASON"野性の証明"』がスタート。5月17日埼玉戸田市文化会館、19日鹿児島市民文化ホール、20日宮崎市民会館、21日熊本市民会館、23日長崎市公会堂、24日山口スターピアくだまつ、26日神奈川県民ホール、27日市川市文化会館、29日神戸国際会館ハーバーランドプラザホール、31日四日市市文化会館、6月1日岐阜長良川国際会議場、3日滋賀守山市民ホール、4日京都会館、6日群馬県民会館、7日新潟県民会館、9日石川厚生年金会館、11日宇都宮市文化会館、12日郡山市民文化センター、15日福岡サンパレス、18日山形県県民文化会館、19日秋田県民会館、21日岩手県民会館、23日旭川市民文化会館、24日北海道厚生年金会館、26日仙台サンプラザホール、28日青森市文化会館、7月1日東京北とぴあさくらホール、2日大宮ソニックシティ他。

6 石田長生

5月4日服部緑地野外音楽堂『春一番』、5月31日大阪厚生年金会館『Lightning Blues Guitar Fes』に出演。5月22日にはベストアルバム『DICTIONARY』をリリース予定だ。

2 Eins:Vier

4月22日に5曲入りミニアルバム『SONG REMAINS THE SAME』をリリースしたばかり。4月29日名古屋ダイアモンドホール、5月1・2日新大阪メルパルクホール、5月9・10日日本青年館のライブでは、きっと収録曲を聴かせてくれるはずだ。また、4月30日大阪ワタナベ楽器本店(サイン会)、5月11日WAVE渋谷店、12日ミュージックランドKEY渋谷店、6月2日三鷹楽器本店(サイン会)ではイベントも開催。待望のニューシングル「after」は、5月27日にリリースで、テレビ朝日「Jリーグ A GO GO」(毎週土曜日25:10〜)でもオンエアされる。

3 ACTION

未定。今後の動きを待つのみだ!

4 AMG

5月11日に1stアルバムをリリース予定。「J-BLUES BATTLE Ⅱ」にも楽曲参加予定だ。5月26日には、大阪グランカフェでライブを行う。現在は早くも次のレコーディングの準備にとりかかっているそうだ。

1 ICE

大好評を得てツアーも終了。発売されたばかりのニューシングル「GET DOWN,GET DOWN,GET DOWN」のカッコ良さに注目が集まっている。

cutup 1

cutup 2

PATA HIDE YOSHIKI TOSHI HEATH
cutup 9

cutup 6

cutup 3

cutup 14

cutup 12

cutup 10

cutup 7

cutup 4

cutup 15

cutup 13

cutup 11

cutup 8

cutup 5

artist news
featuring nice artists!!

cutup 26
cutup 22

cutup 19
cutup 17
cutup 16
cutup 27
cutup 23
cutup 20

cutup 18

cutup 28
cutup 24
cutup 21
cutup 29

cutup 25
cutup 30

16 筋肉少女帯

新作『ステーシーの美術』を引っ提げてのツアーが、5月3日新宿リキッドルーム、4日大宮市民会館、8日福岡スカラエスパシオ、9日広島アステールプラザ、11日名古屋ダイアモンドホール、13日大阪メルパルクホール、21日仙台青年文化センター、23日札幌ファクトリー、29日東京BLITZで行われる。14日神戸チキンジョージ、30日東京BLITZの追加公演も決定した。

17 久保田利伸

東京臨海副都心にオープンするライブスポット東京ビッグサイトで、5月25・26日に3年ぶりのコンサートを行う。5月13日には、ニューシングル「L・A・LA LOVE SONG」をリリース。

18 栗林誠一郎

Barbier、MANISHなど、他アーティストへの作品を手掛けながらも、自らのアルバムの楽曲制作も行っていて、間もなくレコーディングに入るようだ。

19 GLAY

5月7日「PLATINUMな夜」、8日ファンクラブ結成記念ライブ「HAPPY SWING」と、スペシャルライブが決定。両日ともに東京BLITZで行われる。また、夏のコンサートツアーは8月16・17日の東京厚生年金会館を皮切りに、19日宮城県民会館、20日新潟テルサ、29日広島郵便貯金ホール、30日福岡市民会館、9月1日大阪厚生年金会館、3日名古屋市民会館、6日北海道厚生年金会館。ツアーのチケット発売は、全国一斉で6月2日。今回こそチケットを手にしよう!

20 CRAZE

4月24日にビデオ「CRAZE FILM CUSTOMIZE」をリリースした。待望のニューシングルは7月末、アルバムは9月にリリース予定だ。

21 黒夢

4月17日にニューシングル「ピストル」をリリース。現在はニューアルバムのレコーディング中だ。6月7日札幌厚生年金会館からは、「FAKE STAR'S CIRCUIT」がスタート。6月11日青森市文化ホール、12日秋田児童会館、15・16日赤坂BLITZ(15日はBOYS、16日はGIRLS ONLY)、18日岩手県民会館、19日仙台イズミティ21、21日広島アステールプラザ、22日愛媛県文化会館、24日高知県民文化ホール、26日鳥取県民文化会館、27日岡山市民文化ホール、7月3日浜松市福祉文化会館、4日市川市文化会館、5日前橋市民文化会館、9日熊本県立劇場演劇ホール、12日鹿児島市民文化ホール、13日福岡電気ホール、16・17日大阪厚生年金会館、18日大宮ソニックシティ、22日金沢市文化ホール、24日新潟テルサ、25日長野県県民文化会館、27日名古屋市公会堂、8月17日沖縄コンベンション劇場。

22 QUNCHO

L.A.、ニューオリンズでレコーディングした待望のニューアルバム「Q」がついに完成。スティービー・ワンダー・バンドのネーザン・ワッツ(B)他、豪華メンバーが集結したファンク、グルーブファンには必聴の一枚だ。

23 幻覚アレルギー

全国ツアーも終了してホッと一息。現在は次のアルバムの創作期間に入り、夏ごろからレコーディングを開始する予定だ。

24 cornelius

6月9日にリミックス集「9669」をリリースする。

25 米米CLUB

ニューアルバム「H2O」とビデオ「OPERA BLUE」が好評発売中。

26 近藤房之助

夏前にリリース予定のTHE GRUB STREET BANDのレコーディングが終了。また、5月31日大阪厚生年金会館、6月16日日比谷野外音楽堂「Lightning Blues Guitar Fes」、6月7日名古屋ダイアモンドホール「Live Lighting Blues Guitar」に出演。

27 ZARD

5月6日にシングル「心を開いて」をリリースする。この曲は、現在ポカリスエットのCMソングとしてオンエア中。またTV番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」のエンディングテーマであるBarbierの「LOVE」に、坂井泉水が作詞とゲストボーカルで参加している。

28 斉藤和義

6月22日の彼の30歳の誕生日は、IMPホールでスペシャル・スタンディング・ライブ「お立ちなさい」を行う。「FIRE DOG」も大好評で、先日リリースしたビデオクリップでは、「砂漠に赤い花」までのシングル5曲とアルバムから「老人の歌」も収録。秋田で撮影を行ったが、これまた必見だ!

29 坂本龍一

トリオのアルバム「1996」が完成。5月17日リリースだ。

30 サザンオールスターズ

5月20日にシングル「愛の言霊～Spiritual Massage～」をリリース。この曲は、日本TV系で放映中の「透明人間」の主題歌だ。

PORTABLE PLAYER

CUT UP 101

cutup 45

cutup 43

cutup 40

cutup 36

cutup 31

cutup 44

cutup 41

cutup 37

cutup 32

cutup 42

cutup 38

cutup 33

cutup 39

cutup 34

cutup 35

41 少年ナイフ

渡米して8月リリース予定のニューアルバムのレコーディングを開始。6月21日にはシングル「WONDER WINE」をリリースする。

42 SUPER JUNKY MONKEY

ニューアルバム『地球寄生人』発売記念ツアーを敢行。5月8日盛岡劇場、9日仙台ビーブベースメントシアター、11日新宿リキッドルーム、13日新潟O-DO、14日金沢VANVAN V4、17日焼津JAM HALL、19日名古屋クラブクアトロ、20日岡山ペパーランド、22日博多BE-1、23日熊本DJUNGO.25日松山SALOON KITTY、26日神戸OTOYA、29日大阪クラブクアトロ。

43 THE STREET BEATS

ツアーを展開中。5月10日京都ミューズホール、11日神戸チキンジョージ、13日松山サロンキティ、15・16日広島BAD LANDS、18・19日福岡BE-1、28日札幌ベッシーホール、30日仙台ヤマハプランズ6Fホール、6月7日名古屋クラブクアトロ、8日大阪ウォーホール、21日東京日清パワーステーション。

44 SPARKS GO GO

ツアーも好評を得て終了。創作期間に入った。

45 SPITZ

ニューシングル「チェリー」も大好評。5月8日東京NHKホール、24日大阪フェスティバルホール、26日名古屋センチュリーホールでは、『カゲロウの集い』と題した、総勢20人近いストリングス&ホーンセクションと共に、今回限りのスペシャルライブが繰り広げられる。

37 SION

アコースティックツアーが決定。5月23日長野J、24日富山もみの木ハウス、26日新潟O-DO、27日山形ミュージック昭和セッション、30日函館金森ホール、31日札幌ペニーレイン24、6月1日帯広レベル、4日八戸パラボラ、5日仙台ビーブベースメントシアター、6日会津若松ジャンダルム、8日水戸サントピア。普段はなかなか来ない小さな街までシオンがやってくる!

38 SIAM SHADE

5月25日に日比谷野外音楽堂で春のツアーの再追加公演を行う。チケットの発売は5月5日。野外ならではのパワフルなライブを見せてくれることは間違いなし。

39 JUDY AND MARY

全国ツアー終了後、東京日清パワーステーションでのライブを経て、現在は久しぶりのオフを楽しんでいる。

40 JUN SKY WALKER(S)

ロスレコーディングを順調に終え、昨年から続いていた長い長いレコーディングも終了。6月21日にシングル、7月1日にアルバムのリリースが決定。乞うご期待!

34 sheen

4月2日に大阪バナナホールで行ったライブも大盛況。その前日には京都のメトロで打ち込みメインのハウス系ライブをメンバー4人だけで行った。DJはボーカルの達也が担当したそう。

35 シェラザード

ギターの平山のソロプロジェクト、テルズシンフォニアのファンクラブが設立され、記念ライブが6月18日に大阪ミューズホールで行われる。また、キーボードの永川率いるジェラルドが5月26日にオン・エア・ウエストで行われるイベントに参加する。

36 塩次伸二

5月11日高円寺ジロキチ、12日横浜ブルースカフェ、23日新大久保サムディ、26日山梨ギブソンハウス(近藤房之助出演)でライブを行う。

32 ZYYG

ライブツアーを大成功に終えた彼ら。5～6月は、次のシングルのレコーディングの作業中。今後の動きにますます目が離せなくなりそうだ。

33 シーナ&ザ・ロケッツ

5月4日に大阪服部緑地野外音楽堂で行われる「春一番」にシーナ&鮎川誠が出演する。現在は引き続きレコーディング中。

31 佐野元春

アルバム発表に先駆けて、5月22日にニューシングル「ヤァ! ソウルボーイ」をリリースする。ニューアルバムは、6月下旬リリース予定だ。

artist news
featuring nice artists!!

53 CHARA

映画の撮影中。5月25日からはシネセゾン渋谷にて『PICNIC』が公開になる。

54 TWINZER

アルバム『STRANGE BLUE』をリリースしたばかりだが、早くもニューシングル「LAZY」を5月22日にリリースする。この曲はTV朝日系『NBA FAST BREAK』テーマソングとしてオンエアされる。そして、7月26日博多DRUM BE-1、28日大阪クラブクアトロ、31日渋谷オン・エア・ウエストにてライブが決定!

55 D.T.R

活動休止状態になっている。今後の動きを待とう!

56 DEEP

残念なことに、音楽的指向の違いによりギターの渡部充一とドラムの小松広之が脱退することになった。現在DEEPとしての今後の活動は未定。また、渡部と小松は個々に活動を始め、今後自らを中心としたプロジェクトも進めていく予定だ。今後のDEEP、そして渡部と小松の活動に注目しよう!

57 T-BOLAN

通算15枚目となる両A面シングル「Be Myself /Heart of gold 1996」をリリースしたばかりだが、すでに次作のレコーディングに入っている。

58 DEEN

フジテレビ系アニメ「ドラゴンボールGT」のエンディングテーマとしてオンエアされている「ひとりじゃない」が、4月15日にリリースされた。現在はアルバムに向けてのレコーディング中。

59 DER ZIBET

3月にリリースした新作『キリギリス』とベストアルバム『アリ』は、聴いただろうか。ツアーが中止になってしまった分、元気なHALの姿と彼らのライブが見れる日まで、今はしばらくガマン! ISSAYは5月24～26日に池袋文化座ル・ピリエにてマイム公演を行う。

46 SPAED

3rdアルバムに向けて創作活動中の彼らが、4月の初めに恵比寿のCLUB MILKで飛び入りライブを行ったらしい。今後もどこかのライブに飛び入りする可能性があるらしいので、情報は要チェック!

47 SLY

3rdアルバムのレコーディング状況は、3月末段階でリズムとサイドギターを終了。ギターソロ&ボーカルを残すのみとなった。曲数は予定では10曲、各タイトルやアルバムタイトルは未定。気になる詳細は次号に期待!

48 妹尾隆一郎

5月7日神戸楽屋、8日横浜ブルースカフェ、11日江古田パイナップル・カウンティー、15日高円寺ジロキチ、25日京都福知山市OAK、26日下北沢251にてライブを行う。

49 SOUL FLOWER UNION

6月1日にベストアルバム『GHOST HITS 93～96』をリリース。ソウル・フラワー・ユニオンとしてのライブは、6月6日名古屋ダイアモンドホール、9日日比谷野外音楽堂。ソウル・フラワー・モノノケ・サミットとしてのライブは、4月28日上野水上音楽堂『命どぅ宝・平和世コンサートⅢ』、5月4日大阪服部緑地野外音楽堂『春一番』、6月30日有明コロシアム『琉球フェスティバル'96』。

50 Char

5月31日大阪厚生年金会館、6月16日日比谷野外音楽堂で行われる『Lightning Blues Guitar Fes』と、6月7日名古屋ダイアモンドホール『Live Lighting Blues Guitar』に出演。

51 CHAGE&ASKA

4月22日にアルバム『Code Name.2 Sister Moon』をリリースした。

52 Chap Chimes

今回はちょっと変わった方法でレコーディングをやろうとアイデアを絞り出している所だ。

CUT UP 101

68 HYPERMΛNIA

半年の沈黙を破り、活動を再開した彼ら。5月1日市川CLUB GIOからは、『"Together along" TOUR Vol.-1』を行う。5月2日熊谷VOGUE、5日新潟O-DO、6日横浜7thアベニュー、13日名古屋ハートランド、14日大阪ロケッツ。7月上旬には作品の発表も予定されている。

69 ▲THE HIGH-LOWS▼

ツアー『KING BISCUIT TIME』を展開中。5月1日浦和市文化センター、8日熊本フィーリングホール、12日長崎平和会館、15日富山教育文化会館、15日富山教育文化会館、17日新潟フェイズ、18日長野市民会館、23日郡山市民文化センター、24日仙台イズミティ21、28日名古屋市公会堂、29日栃木県教育会館、6月1日高崎市文化会館。3日函館金森ホール、5・6日札幌ファクトリーホール、9日神戸ハーバーランドプラザ、10日京都会館、18日座間ハーモニーホール他。

70 BOW WOW

新ドラマーとして初代メンバーの新美俊宏を迎えた。現在制作中の2ndアルバムは、7月21日発売。8月にはライブツアーも予定されている。

71 BUCK-TICK

6月21日にリリースされるアルバム『COSMOS』の先行シングル「キャンディ(c/w チョコレート)」を5月22日にリリース。また7月4日川口リリアメインホールを皮切りにコンサートツアーがスタート。7月6日松戸森のホール21、8日金沢観光会館、9日長野県県民文化会館、13日北海道厚生年金会館、15日群馬県民会館、17日新潟テルサ、19日静岡市民文化会館、22日栃木県総合文化センター、26日岩手県民会館、28日宮城県民会館、8月5日鹿児島市民文化ホール、7日福岡サンパレス、13日大阪城ホール、15日名古屋国際会議場センチュリーホール、19・20日日本武道館、26日高松市民会館、27日倉敷市民会館、29日松山市民会館、30日広島郵便貯金ホール、9月2日沖縄コンベンションセンター劇場。

72 浜田省吾

3月25日に遅れていた浜田省吾辞典が出版された。4月中は、撮影のため渡米している。

73 浜田麻里

現在オリックスのイチロー選手が登場するミズノのCMで「LONG LONG WAY FROM HOME」が、大量オンエア中。さわやかな歌声が聴ける。

60 DOG FIGHT

プロデューサー佐久間正英氏と共にレコーディング中。次の新譜は夏から秋にリリースの予定。

61 TOMOVSKY

5月5日梅田タワーレコード、6日名古屋近鉄タワーレコード、12日市川クラブGIO(有料)で一人弾き語りライブを行う。

62 DREAMS COME TRUE

ニューアルバム『LOVE UNLIMITED∞』が注目を集める中、5月15日東京NHKホールを皮切りに、吉田美和のソロコンサートツアー『beauty and harmony』がスタートする。18日福岡サンパレス、22・23日名古屋センチュリーホール、25日北海道厚生年金会館、27日仙台サンプラザ、29・30日大阪フェスティバルホール、6月3・4日東京オーチャードホール。

63 永井　隆

5月中旬までニューオリンズで行われるジャズヘリテイジュコンサートのため、渡米。帰国後、5月17日大阪ウォーホール、18日三重県松阪市MAS-A G、19日名古屋ラブリィ、26日高円寺ジロキチに出演。また5月発売予定の「J-BLUES BATTLE II」に参加予定だ。

64 長渕　剛

6月5日にビデオ『LIVE いつかの少年』を発売。5月25・26日大阪城ホールからは、『LIVE'96-KAZOKU-』がスタートする。5月30・31日名古屋市総合体育館レインボーホール、6月6・7日横浜アリーナ、12日山形市総合スポーツセンター、21日愛媛県民文化会館、24日広島サンプラザホール、29日岡山市総合文化体育館、7月2・3日日本武道館、6日福岡マリンメッセ、9日鹿児島アリーナ。

65 nuvoːgu

ツアーが終了したばかりだが、6月25日に東京日清パワーステーションでのライブが決定。このライブは結成3周年を迎え、ファンへのお礼の意味が込められている。

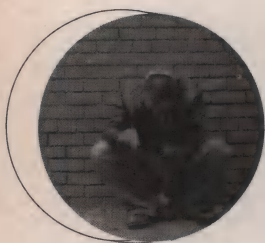
66 NOKKO

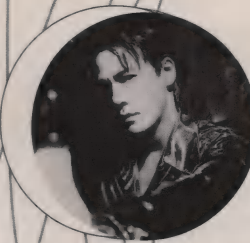
4月いっぱいレコーディングの予定。夏にシングル、秋にアルバムをリリース予定だ。

67 PERSONZ

5月9日にシングル「blue heaven」をリリースする。どんな音に仕上がっているのか楽しみだ。

artist news

featuring nice artists!!

cutup 85

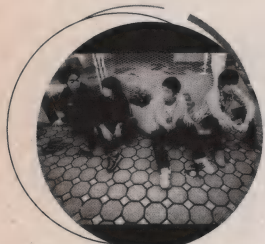
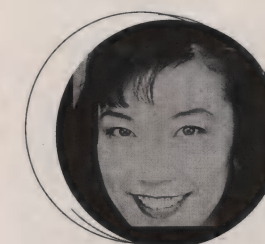
cutup 82

cutup 78

cutup 74

cutup 86

cutup 83

cutup 79

cutup 75

cutup 87

cutup 84

cutup 80

cutup 76

cutup 81

cutup 77

84 松任谷由実

コンサートツアーを展開中。5月7・8・10・11日名古屋レインボーホール、15・16日仙台体育館、22・23日真駒内アイスアリーナ、29・30日盛岡市アイスアリーナ、6月3・4日長野ビッグハット、7・8日神戸ワールド記念ホール、14〜16・18・19・21〜23日代々木第一体育館。

85 THE MAD CAPSULE MARKET'S

4月29・30日赤坂BLITZで、ツアーファイナルを迎える。5月からは7月にリリース予定のベストアルバムの制作にとりかかる。すべて新録になるのでお楽しみに!

86 MANISH

現在、テレビ朝日系「トゥナイトⅡ」のエンディングテーマとしてオンエアしている「君の空になりたい」を5月下旬にニューシングルとしてリリースする。アルバムも引き続きレコーディング中。

87 Mr.Children

ニューシングル「花〜Memento-Mori〜」が好評。夏前には、ニューアルバムの完成も期待できそうだ。

81 BLOODY IMITATION SOCIETY

6月に都内ライブハウスに出演する。詳しい日程は次号で発表!

82 BLANKEY JET CITY

いよいよ各メンバーがソロ活動へと動き出し、ニューバンドを結成する。照井利幸のバンドはJOE BROWNN。元DEEPの渡部充一やDOG FIGHTのKI-YANが参加。浅井健一のバンドはSherbets。メンバーは決定間近。中村達也はLove Shop ROSALIOS。メンバーや詳細は全く未定。しかし本人はラブホテルの廃墟でバンド用の曲作りに励んでいるらしい。Bay-fmのレギュラー番組『3104丁目のダンスホールで…』(日曜・26:00〜)で情報がつかめるかも。各バンド共に、ライブも行い、7月中旬から8月にかけて作品をリリースする予定。どんなサウンドを聴かせてくれるのか、今から楽しみだ!

83 布袋寅泰

アルバム『King&Queen』を引っ提げて、全国ツアー中。5月2・3日大阪厚生年金会館、12・13日仙台サンプラザ、16・17日札幌市民会館、22・23日大阪フェスティバルホール、28・29日福岡サンパレス、31日・6月1日広島厚生年金会館、8・9日名古屋センチュリーホール、12日愛媛県民文化会館メインホール、14日香川県県民ホール、23日NHKホール、28日岩手県民会館、29日青森市民文化会館、13・14日NHKホール。

77　BIG LIFE

バンドとしての活動は未定。ギターの手島は、ミュージシャン仲間のライブやレコーディングに参加する。

78 氷室京介

5月末までアルバムのレコーディング。夏前ころシングルをリリース予定だ。

79 FEEL SO BAD

4月27日に4thアルバム「IN TRANCE」をリリース。このアルバムを引っ提げて、5月16日福岡博多DRUM BE-1、18日大阪ウォーホール、25日渋谷オン・エア・イーストにてライブを行う。また、テレビ朝日系アニメ「地獄先生ぬ〜べ〜」のオープニングテーマ曲に「F・S・B」が決定。4月13日からオンエアされている。

80 FIX

ギターのSHOJIが元DIE IN CRIESのベースのTAKASHI、元LADIES ROOMのドラムのJUNの3人で、ユニットとして何か面白いことを仕掛けようとしているらしい。詳細発表に注目!

74 PAMELAH

5枚目のシングルのレコーディング中。

75 B'z

現在読売TV・日本TV系連続ドラマ「俺たちに気をつけろ」の主題歌として流れているすべて英詞によるナンバー「Real Thing Shakes」が5月15日にリリース決定。サウンドプロデュースにANDY JOHNSを迎えロスでレコーディング。そして同日に松本プロジェクトによるそうそうたるミュージシャンを迎えレコーディングされたハードロックカバーアルバム『ROCK'-N ROLL STADARD CLUB』もリリースされる。また、B'zが進化していく。

76 PIZZICATO FIVE

6月21日にEPを2枚同時リリース。1枚は、「ベイビー・ポータブル・ロック」や「東京モナムール」などのセルフカバー曲やリミックス曲などを収録した5曲入り。もう1枚はビーチボーイズの「passing by」のカバーと新録4曲の計5曲入り。両方ともアナログ盤が限定発売になる。

PORTABLE PLAYER

CUT UP 101

99 LUNA SEA

シングル「END OF SORROW」もオリコン初登場一位を獲得。4月22日には、彼ら5人の感性が火花を散らすニューアルバム『STYLE』もリリースされた。待望のアリーナツアーの詳細発表はまもなく。

100 渡辺美里

6月17日に、日本テレビ「アトランタ五輪」のイメージソングになっているシングル「My Love Your Love」をリリースする。 2年ぶりのオリジナルアルバムも夏にはリリース予定だ。また、2年ぶりの全国ツアーも決定。彼女の誕生日でもある7月12日に松戸森のホール21よりスタート。8月3日には、11年連続の西武球場コンサートも行われる。

101 WANDS

シングル「WORST CRIME～About a rock star who was a swindler / Brind To My Heart」、ベストアルバム『SINGLES COLLECTION+6』リリース後、楽曲制作に没頭しているメンバーだが、合間を縫ってビデオ撮影などを行っている。横浜、上野など屋外でのオフショットを撮っているとのこと。

97 LAUGHIN' NOSE

5月12日宇都宮BIG APPLEより全国ツアー。13日仙台バードランド、15・16日札幌カウンターアクション、18日山形ミュージック昭和セッション、19日会津若松ジャンダルム、25日前橋club FLEEZ、26日新潟WOODY、28日金沢バンバンV4、29日長野J、6月4日神戸チキンジョージ、5日広島ネオポリスホール、7日博多BE-1、8日黒崎マーカス、9日大分TOP'S、11日松山サロンキティ、12日高知キャラバンサライ、13日岡山ペパーランド、18日名古屋ダイアモンドホール、19日大阪ベイサイドジェニー、23日クラブチッタ川崎。

98 L'Arc～en～Ciel

5月26日に「クリスマスボックスセット」の写真集のみを発売。現在は全国ツアーを展開中だ。4月27日名古屋市公会堂、5月1日京都会館、3日広島アステールプラザ、5日熊本県立劇場、6日鹿児島市民文化ホール、8日福岡市民会館、10日愛媛県民会館、12日岡山市民文化ホール、13日高知県民会館、15日栃木県総合文化センター、16日郡山市民文化センター、21日浦和市文化センター、23日長野県民会館、26日東京ベイN.K.ホール。

92 山岸潤史

5月中旬までニューオリンズジャズヘリテイジュコンサートのため渡米中。2月にリリースされたオムニバスアルバム『Lightning Blues Guitar Fes』に参加している彼だが、そのイベントが5月31日大阪厚生年金会館、6月7日名古屋クラブダイアモンドホール、16日日比谷野外音楽堂で行われ出演する。

93 憂歌団

5月13日今治ジャムサウンズ、14日岡山アリゲータサン、18日日比谷野外音楽堂、24・25日神戸チキンジョージにてライブを行う。

94 LOUDNESS

7月10日にリリース予定の高崎晃のソロアルバムをレコーディング中。完成を待とう!

95 LA'CRYMA CHRISTI

4月29日川崎クラブチッタ(イベント)、5月11日大阪ミューズホール、6月1・2日目黒鹿鳴館でライブを行う。

96 RUFFIANS

デモテープ制作中。

88 media youth

4月15日にニューシングル「Damageの甘い罠」をリリースしたばかり。5月10・11・12日は、新宿LOFTで3DAYSライブを行う。このライブでは、「Damageの甘い罠」のプロモーションビデオをプレゼント。現在は、夏に発売予定の2ndアルバムのレコーディング中だ。

89 modern grey

展開中のツアーもいよいよ終盤。4月27日大阪クラブクアトロ、28日名古屋クラブクアトロ、5月17日渋谷オン・エア・イースト。このツアー前にキーボードの田中が脱退したが、サポートメンバーを加えモダングレイサウンドを聴かせている。ラジオパーソナリティーも好評で、FM-FUJI「POWER 222」(毎週月曜・深夜12:00～)や北海道AIRG「2500 MUSIC POWERS」(毎週火曜・深夜1:00～)で聞ける。

90 THE MODS

「LIVE TOUR ESPECIAL 5.」がいよいよスタート。5月4日名古屋ダイアモンドホール、6日神戸チキンジョージ、7日福岡クロッシングホール、10日大阪ウォーホール、12日東京BLITZ。6月21日にはシングル「今夜は決めよう」、7月21日にはアルバム『ZA MOZZ』をリリースする。

91 矢沢永吉

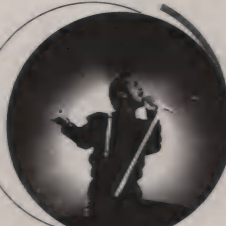
5月16日にシングル「MARIA」をリリース。4月に行った公開レコーディングにて収録されたニューアルバムは、7月に発売の予定だ。楽しみに待っていよう!

cutup 98

cutup 94

cutup 99

cutup 95

cutup 91

cutup 88

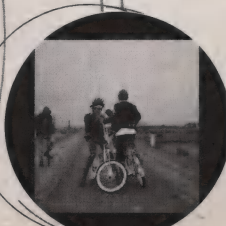
cutup 100

cutup 96

cutup 92

cutup 89

cutup 101

cutup 97

cutup 93

cutup 90

THE ROOTS OF ROCK

明石昌夫グループ First Album「AMG」

うわさのAMG(明石昌夫グループ)がついに6曲入りミニアルバム『AMG』を発表する(5月11日発売予定問い合わせはブルージー:06-212-0660まで)。

クリーデンス・クリアウォーター・リバイバル(C.C.R)、グランド・ファンク・レイルロード、ディープ・パープル、レッド・ツェッペリン、マウンテン、これらは明石昌夫が4月号のインタビューで語った自身のルーツとも言える70年代ハードロックを代表するバンドたちである。そして彼のフェイバリット・アルバムはそんな中のツェッペリンの1stと2nd。これを読んだ瞬間、私は彼とは遠く離れた場所で同じようにそれらの音楽をわくわくしながら聴いていた自分の姿を彼の言葉の中に探してしまった。同時代を同感覚で過ごした彼の音楽が今の私にどのように聞こえるのか、音源としてとりあえず届いた4曲からAMGの音楽を探ってみた。

今回耳にすることができた曲は①「SEVEN FOURTHS」②「THE THRILL IS GONE」③「I PUT A SPELL ON YOU」④「I HEARD IT THROUGH THE GRAPE-VINE」の4曲。

①は作詞・曲とも明石昌夫オリジナル。②はB.B.キングの演奏で知られる曲。③はオリジナルがデイル・ホーキンスだが、私の耳にはC.C.Rのファースト・アルバム『スージー・Q』(68年)でのバージョンがこびり付いている。④は68年に邦題「悲しいうわさ」として、ソウルシンガーのマーヴィン・ゲイが大ヒットさせた曲。(最近ジーンズのTV・CMに使われている)この曲は彼が初めて買ったという、C.C.R 70年のアルバム『コスモス・ファクトリー』にも収録されている。

まず、オリジナルの①は、テーマリフを刻むギター、ベース、オルガンのハードなユニゾンがグランド・ファンク、マウンテン、そして私見だがクリーム(エリック・クラプトンが在籍した60年代の3人組ハードロック・バンド)をほうふつとさせる。それに絡む団篤史のワウ・ギター、千葉恭司のボーカルがこれまたクラプトン的な武骨さをふりまき、この曲を聴くだけで時間は60年代にタイムスリップする。中間で明石のひずんだベースがソロを取り次第に盛り上がる様は、まさにロックの神髄だ。

②は打って変わってアナログ・リズムマシンのゆったりしたリズムにトレモロのかかったギターとエレピの音がひと味違うブルーズの世界を創り出している。千葉のボーカルは少しけだるく、団のギターは泣きの表情を、ソロもある明石のベースは生音のままに、この4曲の中では唯一バラード系の曲だ。

C.C.Rの③は8分の6拍子の淡々とした進行で次第に盛り上がる曲だが、彼らはそれをハード・ブルーズにアレンジ。セブンスのコードを入れることでオリジナルよりも数段重い音に仕上がった。この雰囲気はツェッペリン1stの「ユー・シュック・ミー」「幻惑されて」のそれだ。しかも千葉のボーカルはC.C.Rのジョン・フォガティも真っ青のパフォーマンスを披露し、ロバート・プラントも完全に射程距離に入れている。

④は明石のベースとエレピが繰り出すテーマリフに、団のボトルネック・アコースティック・ギターとスライド・エレクトリック・ギターが創りだすルーズな世界と、ドラムが加わったハードな世界を股に掛ける不思議なロック&ソウルの空間を創り出している。バックのソウルフルな女性コーラスに後押しされた千葉のボーカルもロックとソウルの狭間を行き来している。

こうして彼らの音楽を聴いてみるとAMGの音楽が60年代、70年代のロックを十分自分の中で咀嚼(そしゃく)した結果の音を自然に気負わず表現しているものだということが分かる。私自身彼らの曲を聴いて当時にタイムスリップしてしまうのであるが、このテの音にはもしかすると「ただ単にその時代を写したロックは今のロックではない」などと口幅ったい意見もぶつけられることになるかもしれない…。

しかし、ここに聴かれるAMGサウンドは、確かに明石昌夫が、ルーツを明確に打ち出したものだが、現在のシーンに生きるアーティストのフィルターを通すことでしか完成しえない作品に仕上がっている。ノスタルジーが全然ないと言うとウソになるが、彼自身、70年代という空気とは全く違う90年代の空気の中で、あのころの音を単純にコピーすることがいかに意味がなく、つまらないことであるかは良く分かっているのだ。

ロックは〝生き様〟の音楽だと言われる。同様の言葉を明石もインタビューの中で力強く語っていた。ルーツを見せて原点回帰をするのも、今の音楽をハイクオリティーにアレンジするのも、明石昌夫の生き様の一つの側面だということだ。

[文・中伏木 寛　毎日映像音響システム]

これでいいのか、日本のロック。

大丈夫。みんなはちゃんと分かってる。

●私は、5月号のオピニオンを見て思わず筆を取りました。最初に言っておきますが、私は小室さんのファンでも何でもありません。B'zのファンです。が、彼の曲を売れ線狙いだと言うのは失礼だと思います。TM時代からああいう曲を作っていたんです。突然売れるために曲作りを変えたわけではないでしょう? 元からプレーヤーの彼が一緒に演奏したっておかしくないし。それを少し売れ出したからって批判するのは、彼の今までの功績に対して失礼だと思います。ただ単に、ダンスミュージックという風潮と小室さんの音楽が合ったという、大半の若者のニーズに答えられた唯一の人物だったってことじゃないでしょうか? カラオケで盛り上がれる音楽、踊れる音楽を、はやっていなかった日本に出してヒットさせたことはすごいこと・・・。H Jungle with tは、浜ちゃんのあの歌い方だからハマったんだとか思ったことはありませんか? 確かにあれはロックじゃない。でも、ダンスミュージックという分野として確立している。ロックをやっている人だけがアーティストだと言うのはやめてほしい。音楽ってくらいだから、自分なりに音を楽しめばいいんです。その楽しみ方も楽しむ音も人それぞれってだけで。

（埼玉・Dec・♀・15歳）

●読んでて思うんですけど、やはり小室否定派の文章がちらつきますね。僕は彼が嫌いではないし、彼の作品も好きなものばかりです。そして対照的なロックやメタルも好きなものが多いです。読者のみなさんって後者の方の傾向が強いみたいですけど、小室バッシングの理由として彼のビジネス先行主義を挙げている人が多いですね。いや僕は肯定、否定を説いているんではなくて、みんな純粋に生み出された音楽は受け止めるべき。様々な背景抜きに音楽に耳を傾けてほしい。そう言いたいんです。

（滋賀・Humanity・♂・16歳）

●「同じ人間が作るのだから似た曲になるのは仕方ないし、それが個性だと思っている」と言っていた小室氏。では何故アーティストをバラバラにする必要があるの? dos、trf、小室、globe、同じメロディー、同じ声質、それならどれかひとつのアーティストに歌わせればいいじゃない。そして、それを受け入れる人々へ。何を気に入っているの?。曲? 詞? どれをとってもそれはアーティストから出ているものじゃないんだよ。

（岐阜・砂原藤緒・♀・20歳）

●オピニオンのコーナーじっくりと読んでみた。いろんな考えの人がいるんだなーとつくづく思った。その人によって、「良いと思う音」「ムカつくと感じる音」・・・というのは違う。今、プロデューサーというのが注目されているが、なんだかんだ言ってもやっぱり良い音を求め続けている人なんだと思う。ちょっと行き過ぎかなと思うこともあるが、世間に認められているから売れるのだと思う。自分にとっての良い音を見つけて聞いていれば、プロデューサーがだれであろうと関係ないのではないのでしょうか?

（栃木・一条涼・♀・15歳）

●「今の日本はプロデューサーが売れているから、その歌手は売れる」みたいなことが多く言われているようですが、それはそれでそのプロデューサーの実力だと思うから、私はいいと思うんです。ただ、リスナーの方がその「上位」とか売れ行きで判断しすぎるんじゃないかと思います。それはよくないな、と。それにとっても飽きやすい。すぐに「もうこの曲は古い」とか「新曲、新曲」。やっぱりせっかくの音楽なんだから、クラシックのように長くずっと愛され続けてほしいなと思います。私が思うことは、ロックは飽きにくいなということ。ポップスはすべてではないけれど、メロディーが頭に残りすぎてすぐに飽きてしまう。いつまでも残る曲を聴いていきたい。

（広島・M・♀）

●カラオケで歌いたいから聞くというのも、小室がはやりだから聞くのも、ラジオから流れてくる歌をなんとなく聞くというのも、聞く側の楽しみ方は人それぞれでいいんじゃないの? ただ、小室、小室とはやし立てるマスコミや、今だとばかりにどんどんと同じようなシンガーを売り出す音楽業界には疑問を感じる。確かに音楽もビジネスなのは分かるけど、音楽ってやはりやっぱ芸術なんだから、多くのリスナーを振り回すのはやめてほしい。プロデューサー全盛なんてのはマスコミと業界が勝手に祭り上げたんだと、僕は思うけど。

（北海道・西崎達也・♂・20歳）

●音楽は芸術活動だから、どんな音を生み出すかには当然そのクリエーター側の価値観が投影されるものだ。そしてこれはリスナー側がどんな音を好み、選びとるかにおいてもまたしかりである。私がWANDSや浜田麻里のCDを好んで聴き、彼らを応援したいと思うのもそれはつまり彼らの価値観に大いに共鳴を覚えるからに他ならない。そういう視点から邦楽シーンを眺めると、このところのリズムが上滑りするデジタル音楽のはんらんは、現代人の価値観の薄っぺらさや短絡さを反映している気がして、なんとも暗たんたる気持ちにさせられる。

（福岡・いぬきち・♀・26歳）

●ダンスミュージックがはやるのも、ラップがはやったのも、ある種時代を反映しているわけで別に構わないと思う。ただ僕としては、アーティストたちが自分たち自身で作るロックンロールが盛り上がっていってくれた方がうれしいだけだ。

（兵庫・ロビン・♂・17歳）

●プロデューサー音楽についてたくさんの意見、どうもありがとう。プロデューサーがクローズアップされ、アーティストの存在が薄れてしまう風潮を懸念して始まったこのオピニオンだったけど、肯定、否定を初め、本当に様々な意見が寄せられた。けれど、結局プロデューサーがだれだとか、売れ線だとか、はやりだとかそんな次元で音楽をとらえることはないって、みんなはちゃんと分かっているようだ。多くの意見が交わされた結果行き着いたのは、本物のアーティストには個性のある音楽を生み出し、送り出してほしいし、リスナー自身は他人や仕掛けられたはやりに流されず、自分の好きな音楽を見つける耳を肥やすべきだということ。音楽に熱いJ-ROCKフリークたちは、いつもロックが元気であることを望んでいるのだ。
さて、次号からは新しいテーマ「タイアップについて」。たくさんの意見を待っている。

企画・構成　村田圭子

インディーズジャンクボム

INDIES JUNK BOMB

Shadow Trap Of Mirrors

今、自分たちの感情を音に声に吐き出して音楽を表現しているインディーズ・バンドは果たしてどれだけいるだろう。私は、そういう本当のロックバンドの原石を探し求めている一人だ。ここに、そんな気持ちを満足させてくれそうな大阪出身の3ピースバンド、シャドー・トラップ・オブ・ミラーズがいる。結成して4年。現在のメンバーは、作詞作曲を手掛けるICHIRO(Vo&G、以下I)、藤原利夫(B)、仁井貴章(Ds)。私は今回、彼らが6月にリリースを予定しているミニアルバムの収録曲を聴いて、その音楽に心を奪われたのだ。

「自分の中から出てくる、例えば何かを見たり聞いたりしたときに、言葉には出来ないけどハッとする瞬間、それってだれにでもあると思うんですけど。僕は、そのハッとして生まれたものを音楽で表現しているんです。だからウソやフィクションは作れない。詞も曲も全部自分の中から湧き出る感情なんです。それを聴く人それぞれに感じてもらいたいんですよね」(I)

彼らのサウンドはギター、ベース、ドラムの音が絶妙なバランスで絡まり、激しくストレートな中に、たまらない人間的なノリの気持ち良さを感じさせる。そこには、まるで一つの人格が生まれているような生命力さえあるのだ。中でもICHIROのギターワークは、まさに生きている。

「ギターは、あくまでも自分の感情の一つだと思ってるんですよ。それは手が速く動くとか、ビシッと決まるというより、躍動するリズムですね。限りなく生身に近い表現としてギターを使いたいから大げさなことは一切なしで。ギターと僕はつながってるって感じです。ライブでは楽器を演奏しているという意識はなくて、曲の感情の中にいるんですよね。だから悲しいときは、とびきり悲しい音になるし、うれしいときは、とびきりうれしい音になる。ただ、音楽を表現する一部なんだけど、そのもの自体は最高級のパーツだと思ってるし、そうありたいと思ってやってます」

ICHIROのボーカルとギターをしっかり支えるベースとドラムはシャープなビートを刻み、低音の迫力を縦横無尽に聴かせる。

「曲の感情については最初にディスカッションをして分かってもらうんです。それ以外は同じ方向に向かっていくだけですから、お互いで頼ることはないですね。音楽の中では僕自身もその一部なんで。もし僕らの中で表現し切れない曲が出てきたら、その曲はボツになります」

三人の感情が一つにならない限りバンドの曲として誕生しないという彼らの音楽。だからこそ一つになった時に、計り知れないパワーとなって聴く者の心に深く伝わるのだ。その感情はICHIROの書く詞の一つ一つにもあふれていることは言うまでもない。

「詞は強調するものでも押しつけるものでもなくて、コミュニケーションをとる手段として歌ってるだけだから。これからは自分の感受性をもっと高めたいというか、何かを感じることの受け口を広げたい。それが出せればいいなと思いますね。だから音楽に対する可能性も無限大にあるんですよ。別に僕は"ロックをやるんだ"という気持ちはなくて、ただ聴いてるものがロックだからロックに聴こえるというだけなんです。それより"ポップ"という言葉が好きなんですよね。それは直訳的にいうポピュラーということではない。"ポップであること"っていうのは、はじけてて力強いことだと思ってますから。セックスピストルズだってポップだと思いますからね。はじけてるし、力強いじゃないですか。それは若さっていうか、その一形態がポップじゃないかなって」

そんなシャドー・トラップ・オブ・ミラーズのミニアルバムは、ICHIROが語る"ポップ"をライブ感いっぱいに聴かせている。彼らは表現しようとするものを、より深く追求し音楽としてストレートに放出するバンドなのだ。だからこそ音楽に強烈な存在感があるし、ライブではそれをダイレクトに体験できる。彼らの音楽は、人間の持って生まれた感情で満ちあふれているのだ。

レディースバンドも熱い！

SELAPHY

87年に名古屋で結成された女性ばかりの五人組バンド、セラフィー。93年にボーカルが、95年にギターが脱退するという二度のメンバーチェンジがあったもののバンドの歴史は10年近くになる。現在のメンバーは、アキ(Vo)、ツゲちゃん(G)、カッパ(B)、シオン(Ky)、ドカ松(Ds)。〝ジャンルに捕らわれることなく、自分たちの好きな音、気持ちいい音だけをプレイし続けたい〟という彼女たちが放つサウンドは、分厚く疾走感あるビート、ハードなギター、ストレート&パワフルなボーカルが重なる、たくましく骨太なロック。曲によっては、ファンキーな要素も盛り込み、幅広い音楽性をうかがわせている。

セラフィーは地元名古屋のライブハウスを中心にライブを重ねながら、イベントの参加や関西方面へも定期的に足を運ぶなど、その活動範囲を広げている。またコンテストにも積極的に参加し、NHK主催の『全日本勝ち抜きロック選手権 BSヤングバトル』の審査員特別賞受賞をはじめ、これまでに数々の入賞を経験。

今、メジャー、インディーに関わらず女性だけのいいロックバンドは数少ない。その中でセラフィーは、素直に〝カッコいい〟と思わせてくれるバンドだ。

GLAD ALL OVER [Rebirth]

GLAD all ÖVER

グラッド・オール・オーバーは、関西で人気が広まりつつあったバンド、ディヴァージュの元メンバーG、B、Dsが、これまでのイメージをぬぐい去り新ボーカリストと「より自然体のバンドを作ろう」と今年2月に結成したバンドだ。そんな彼らのありのままを表現したこの1stミニアルバムは、ドライブ感あふれるビート、ハードなギターリフとメロディアスでストレートなボーカルがポップにはじけている。粗削りな部分がまだまだ目立つ彼らだが、楽曲には、はちきれんばかりのピュアな勢いがいっぱい。生まれたばかりのグラッド・オール・オーバー。彼らがこれからバンドとしてどう磨かれていくのか興味津々だ。

※このアルバムを5名の方にプレゼント(応募方法は下記のand so onをご覧下さい)。

APRIL FOOL [April the 1st]

April Fool

April the 1st

彼らのサウンドは分厚く激しいビートと、エッジの効いた野太いギターがうなるゴリゴリのハードロック。躍動感みなぎるパワフルさで迫り来る楽曲には、テクニック重視でガンガン聴かせるという印象よりも、ノリと勢いを前面に押し出したロック本来の気持ち良さがある。また、自由自在に声色を変えるボーカル、曲のイントロに本格的なジャズを聴かせるといった意表を突く演出など、遊び心も多彩に織り込まれていて、なかなかニクイ。ライブでは、音を発した瞬間から我を忘れて狂い出すといった暴れようを見せるエイプリル・フール。その〝熱さ〟と〝やんちゃ〟を感じさせる存在は、インディーズシーンでは貴重だ。

※このアルバムを1名の方にプレゼント

インディーズ情報

●I・Z・M
5月 5日　神戸チキンジョージ
　　13日　大阪ミューズホール
6月15日　尼崎ライブスクエア
☆パンク、ハードロックをミックスさせたサウンドをグルーブ感たっぷりに聴かせるイズムのミニアルバム『A・I・MA・I』を1名の方にプレゼント(応募方法はand so onをご覧下さい)。

●APRIL FOOL
5月14日　大阪クラブクアトロ
　　20日　大阪ロケッツ
　　31日　目黒ライブステーション
※5月31日の目黒ライブステーションでのライブでは、東京初進出を記念してロゴ入りハンドミラーを入場者全員にプレゼント。

●GLAD ALL OVER
5月3日　大阪ベイサイドジェニー
5月14日　大阪ロケッツ
　　16日　京都ミューズホール
　　25日　大阪ロケッツ(ワンマン)
　　30日　池袋サイバー
6月16日　池袋サイバー

●SHADOW TRAP OF MIRRORS
5月 3日　大阪ベイサイドジェニー
　　25日　大阪ロケッツ(ゲスト)

●JUBILEE
5月 6日　大阪ロケッツ(SADIE ソロライブ)
☆80年代のニューウェイブ、ゴシック、ポジティブパンクなどに影響を受け〝狂気〟をテーマに独特の世界を聴かせるジュビリーのギタリストSADIEのソロアルバム『Specimen From "Psychic Planet"』を1名の方にプレゼント。

●SELAPHY
5月26日　名古屋ELL
6月12日　大阪ブーミンホール

●TAB
5月11日　2丁目劇場(バンドライブイベント)
　　30日　大阪ベイサイドジェニー
☆ポップの要素をふんだんに織り込み、ストレートで軽快なロックを聴かせる彼らの最新テープ『super TAB』を5名の方にプレゼント。

●THE HARPER ST. BAND
5月22日　京都ラグ
　　23日　大阪ウォーホール
6月 5日　大阪ロケッツ
　　25日　吉祥寺マンダラ
　　30日　大阪パンセホール

●ぱるぽら
5月11日　京都拾得
　　12日　大阪ファンダンゴ
　　27日　下北沢シェルター

●THE FILM
6月14日　大阪ウォーホール
※1stCDシングル「大人になって/うまれてはじめてだった」(両A面)を全国のタワーレコードにて発売中。

●THE PORT
4月30日　大阪クラブクアトロ
5月25日　名古屋クラブクアトロ
☆アコースティックな世界をポップに、そして繊細に聴かせる彼らのテープ『a bee and me…day ep』『～night ep』の2本を1名の方にプレゼント。

●ここに登場しているバンドの音源(テープ、またはCD)は下記のレコード店で店頭販売及び、通信販売を行っています(ただし音源があるバンドに限る)。在庫の確認及び、通信販売方法などは各店へお問い合わせください。

JEEZ大阪心斎橋店　TEL 06-211-0063　FAX 06-211-9656
JEEZ京都北山店　TEL 075-702-6888　FAX 075-702-6999
JEEZ名古屋栄店　TEL 052-241-7676　FAX 052-241-7747

〈購入可能なバンド … APRIL FOOL、GLAD ALL OVER、TAB、THE PORT〉

●プレゼント応募方法
官製ハガキの裏には聴いてみたいと思ったバンド名を1バンドと、あなたの住所・氏名・年齢、ハガキの表には「ジェイロックマガジン インディーズ・ジャンク・ボム プレゼント係」と明記の上、ジェイロックマガジン社宛に送ってください。尚、当選者の発表は発送をもって代えさせて頂きます。締め切りは5月26日(必着まで)。

CYBER J-ROCK magazine誕生！

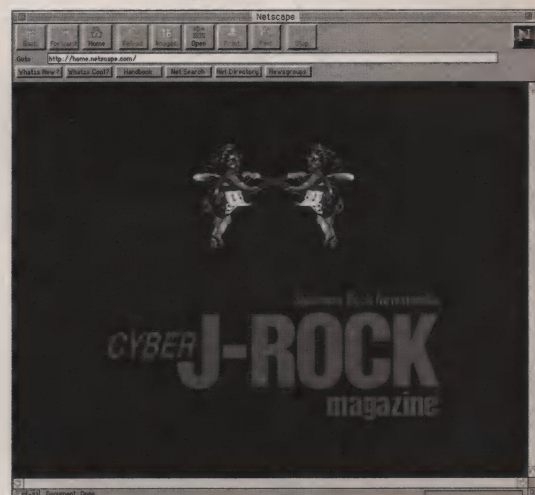
ROCK IN THE INTERNET

ジェイロックマガジン社は、読者のみなさんが雑誌をよりいっそう楽しめるよう、協力TV番組等で情報を提供し、メディアミックスを実践してきました。今回、4月27日をもって全国創刊1周年を迎えるに当たり、新たな情報チャンネルとして、インターネット上にオンライン音楽雑誌「CYBER J-ROCK magazine（サイバー・ジェイロックマガジン）」＝写真（ホームページ）＝を展開します。

これにより、月刊誌のタイムラグをなくし、最新情報をお届けできるようになります。また、「CYBER J-ROCK」でしか読めない情報や映像、音声にアクセスできます。絶版になったバックナンバー記事や週変わりで更新される「電子chatter box」など企画も充実。将来は英語版も用意し、世界にジェイロックの素晴らしさを伝えます。また、ロック音楽ウェブ専門の検索サイト「ROCK GATE（ロック・ゲイト）」（5月下旬スタート予定）との強力なリンクによって、日本にとどまらず世界のロック情報への水先案内を務めます。これまで以上に音楽情報の充実に努めますので、今後ともジェイロックマガジン共々、よろしくお願いします。

CYBER J-ROCK magazine http://www.J-ROCK.com

インターネット上に

アクセスは、http://www.J-ROCK.comまで。

ROCK IN THE

ROCK IN THE INTERNET

筋肉少女帯 〜本城聡章インタビュー〜

前ページのお知らせの通り、ジェイロックマガジンのインターネット・バージョン「CYBER J-ROCK magazine」（URLアドレスは http://www.J-ROCK.com）が4月27日からスタートした。これを記念して、本誌では新企画「ROCK IN THE INTERNET」コーナーをここに開始する。テーマはもちろん、インターネット上のロック情報だ。第1回目は筋肉少女帯がインターネットにサイトを立ち上げたとのうわさを聞きつけ、そのサウンドを支えるギタリスト、本城聡章氏に本誌編集長がインタビューを敢行。本城氏は、なんと筋少のサイトに自らのホームページをリンクし、自分自身で情報を発信しているのだ。すごい！　このインタビューの模様を「CYBER J-ROCK」では、オリジナルの映像や音声で読者にお届けし、プレゼントまで用意している。もちろん、ここから直接本城氏のホームページにリンクしており、楽しめるぞ！　では、まず本誌上でのインタビューからお届けしようか…。

●インターネットで筋肉少女帯のホームページ（注1）が立ち上がったと聞いて、早速行ってみたら、本城さんのページがいきなりリンクされてて、そこにいくとアットホームな感じで本屋の写真なんかも張ってある。ずいぶんマメに更新してるんですね。

本城氏（以下H）：いや、まだまだ。基本的にホームページの考え方として、新聞みたいに毎日変わるべきだと思うんですよ、理想としては。でもそれはなかなか。

●でも1、2週間に一度は…。

H：2週間に一度は目指したいなっていうところです。でもとにかく自分で作ることにこだわっていたいから。

●HTML（注2）なんて、どこで覚えたんですか。

H：全部独学です。

●すごいですね。もともとそういうのは好きなんですか？

H：っていうか。マック（注3）を使い始めて7年目ぐらいなんですよ。それで昔はハイパーカード（注4）にハマった時期があったんです。1年ぐらい。スタック（注5）作るのをずっとやってたんです。インターネットが始まって初めてホームページを見た時に、基本はそれとまったく同じだったんで、すごく入りやすかった。で、後は言語が違うだけですから。それはもう本屋さんに行ったらいくらでも本があったんで、ほんの2冊くらい使ってね。

●なかなか出来ない。よくぞここまで（笑）。

H：ハイパーカード好きが良かったんじゃないかな。

●本城さんのページがあるから筋少のページが、すごくアットホームに見える。宣伝ぽくないんですよ、根本的に。

H：他の人のページを悪く言うつもりはないんですけど、どれもこれも変わりばえしないっていうか。そこで、何か違うこと出来ないかなっていうのがすごくあるんで。

●ああいうページが2週間に一度でも書き変えられてるっていうのが魅力です。いくらいいページでも更新されてないと魅力が薄いと思うんですね。

H：今までは思い立ったことを、何か言いたいことを、何か面白かったことをだれかに言いたい時に伝える手段というのがなかったわけ。ファンクラブの会報とかそういうのは確かにあるけれども、それって「こういう映画がすごく良かったんだ」って思ってそれを書いたとしても、会報が出るころには映画が終わってたりしちゃうじゃないですか。

●そうですね。

H：で、インターネットがいいなーって思ったのは、やっぱり速効性っていうか。思ってポンって載せたらもうすぐにそれを見てくれる。その速さがやっぱりすごく魅力だから。

●ホームページを始めた動機はその辺があったわけですか？

H：そうですね。でも最初は別にミュージシャンが普段何やってようが、どうでもいいなーと思ってたんですよ。だけど、ファンの子達の手紙とかを読んでると、結構「最近どういう音楽が好きですか？」とか「どういう映画が面白いですか？」「どういう本が面白いですか？」っていうのを聞いてくる。僕らが子供のころって、テレビとかでもいっぱい音楽が流れてたし、もっと自分の目で見て「ああ、こういうのが面白いな」とか思って入っていくことが出来たけど、今の人達はあまり自分で探したりすることをしないじゃないですか。そこで「自分の好きなアーティストの人がこういうのを聴いてるから私も聴いてみよう」となっても、僕はそれでもいいと思うんですよね。それがきっかけで、広がっていろんなものを聴いてもらって、いろんなものに興味が出てくればいいなと。そういう手紙があまりにも多かったんで、ファンクラブの会報の上でコツコツ書いていたんですよ。もう2、3年になるんですけど。で、いろいろ好きなものとか、面白かったものとかをどんどん書いていくうちに、さっきも言ったように会報が発行されるころには情報が古くなってる。それをなんとか速効性のあるように出来たらいいなっていうところに、ホームページ開設のお話をいただいて「ああ、これしかないな」と。

●実際に本城さんのホームページに行ってみて見つけたんですけども、電子メールを打てるようになってますよね。ちなみにどれぐらい、どんな内容が来てます？

H：やっぱりファンの子が中心でメールが来るわけですけど、それだとCDの感想だったり、コンサートの感想だったりすることが多い。まあ、思ったよりホームページを開くのを待っていてくれたっていうか、ファンレターはちょっと照れくさくて書けなかった大人の人が、電子メールだったらいいやって書いて、会社からそれを送ってくれたりとか。そういう新たな人が書いてくれてるんだっていうのが分かったし。また、ファンでない人からのメールに、シビアに喝（かつ）入れられますね。

●そうですか。

H：やっぱりファンじゃない人が見ても面白いものを作んなきゃいけないなっていうか。うん、そこが今一番思案どころで。どうしてもファン向けになってしまうから。今ぶら下がっている情報は、「一昨日ぐらい更新したんですよ」好きなプロレスの話がバーッと書いてあって、そのプロレス団体のホームページにちゃんとリンクするようにした。そういうところから、筋少聴いたことない人も見てくれて、なんとなくそこから（音楽を）聴いてくれたらいいなーって思うんですよ。少しずつそうやって、ファンじゃない人にも何かしたいな。

●送られてきた電子メールに返事を書いたりするんですか？

H：んー、時間がある時は出来るだけねー。

●あっ、やってるんですか。

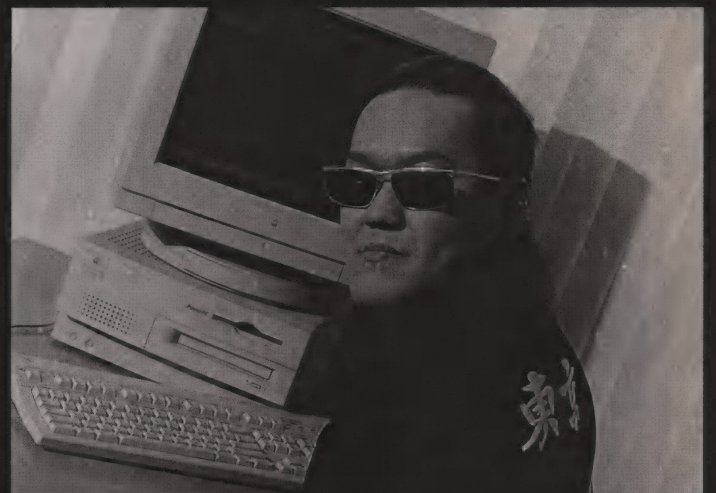
H：っていうか、手紙より全然ラクですからね。

●でもファンとの付き合い方が、今までだったら一対多だったのに一対一の関係になっちゃうじゃないですか。

H：一歩間違ったら文通になりますからね（笑）。

●返事1回書いちゃうと、もう味しめちゃって「やったー」って言うわけで、「本城さんと話できるー」みたいなノリでガーッとメールが来たりしません？

H：返事書いたら確実に返してくれるけど、こっちはやっぱり100パーセント返事書けるわけじゃないし。さほど辛くはなってないですよ。まだ面白がってる。

●ネットに乗っかっていってるわけですから、ネットサーフ（注6）もするんでしょ。最近面白かったサイト（注7）

注釈

（注1）インターネット上のサーバーにアクセスしたときに最初に表示されるページ。そこに置かれた情報を指す。

（注2）インターネットで情報発信するためのコンピュータ言語。

（注3）アップルコンピュータのパソコン、マッキントッシュの愛称。

（注4）アップルが供給するカード型データベースソフト。

（注5）ハイパーカードで開けるカード情報のこと。

（注6）インターネット上の情報を見て回ること。

（注7）インターネットで情報を発信する拠点。

（注8）サイトのうち、特にwwwサーバーで公に情報発信するもの。

（注9）音楽でもおなじみ、大容量の情報をデジタルで収容し、書き換えの出来ないようにしたCD

（注10）商用パソコン通信ネットワークのニフティー・サーブのこと。いわゆるパソ通の典型。インターネットと違い、情報の管理者がいる。今のところ文字情報が主流。

（注11）READ ONLY MEMBERの略。自分で情報発信せず、ただ人が書き込んだ情報を見るだけの人のこと。

とか。

H：一番面白かったのは、おイモを作っている農家のおじさんのサイト。

●そんなのあるんですか？

H：これは八百屋さんをネット上でやろうという目論見があるらしくて、ほんとに農家でジャガイモとサツマイモを作っている人の息子さんがやってるらしい。で、「親父のおイモを買いませんか？」っていうのがあって。その人が今膨大な企画でネット八百屋を作ろうって言って、米屋を募集とか何屋を募集とかやってるわけ。いろんな産地の生産者の人が集まったら、そこでネット上に八百屋を開くっていう。ほんとに買えるんですよ。今はとりあえずジャガイモとサツマイモしか買えないんですけど。

●へぇ。

H：あとは普通にミュージシャンのサイトは結構な数見て回ったし…。

●おすすめの音楽サイトってありますか？

H：キッスとU2は結構やってるなと思いましたね。

●これはウェブ（注8）なんですか、両方とも？

H：キッスのはそうですね。ギターの譜面とか載ってる。結構いろんな細かいものとかやってて。グッズがいろいろ書いてあったり、そういうのが充実してます。U2は何よりも、そのオフィシャルでないページの多さにびっくりしましたね。「いいなー、こんなにファンの子が作ってくれるのか」っていう。

●複数あるわけですね。

H：複数というより何十とありますね。それがオフィシャルのページに行くと、そこから全部にリンクが張ってあるんですけど。まだまだ国内のアーティストの方のページとかだと、そこまで力入ってるのはあんまり見られないから。

●僕が最近見たので面白かったのは、本城さんと同じく自分で作ってるシーナ&ザ・ロケッツの鮎川誠さんのホームページ。

H：鮎川さん自分でやってんですか。

●やり始めてます。そういう自分で作ってる人のネットワーク作りたいなって思うんですよ。お互いにサイトでリンクを張り合えたら、面白いネットワークになるんじゃないかな、と。

H：そうですよね。

●ちなみにキッスとU2って言われましたけども、これは特に本城さんが好きな音楽とかに関わってたりするんですか。

H：もちろん通ってきて聴いて育った音楽ですけども。とりあえず自分でホームページ作ろうと思った時に、いろんな人のを自分で見て歩いて、中で印象に残ったのがそれっていうだけです。

●本城さんが自分のルーツを語る場というのがあまりなかったようなんですが、ここで何か話してもらえませんか。

H：ルーツっていうか。ちゃんこ鍋のような音楽の聴き方をしてるんで（笑）。

●では、本城さんにとっていい曲とは？

H：何でもありですね。最近は坂本冬美さんの「夜桜お七」もいいなーと思うし。長山洋子さんの「捨てられて」もいいなーと思うし（笑）。そういうとこまで行っちゃうんですよ。

●これから音源にそういう曲が入ったりする可能性もあるわけですね（笑）。

H：いや、それはないかもしれないですけどね（笑）。ふっと思ったりするんですよ。なんか自分がぐっと持っていかれる曲があるんですよね。

●つい耳を傾けてしまう。

H：そうそう。そういうのって結構聴きますからね。ジャズでも何でも。

●それでサイトの話に戻りますけど、仕事の素材っていうか、情報源としてネタ探しに、ネットワーキングを利用することはあります？

H：基本的に僕は楽器持って曲作ったりする人じゃないんで、どっちかって言うと手ぶらでブラブラ歩いてる時に曲が出来てるとかそういうタイプなんで、あんまりこうネタ探しとかいうのはやったことがないんですよ。

●音に触れながらやるタイプではないということは、作曲の発想というのは常に頭の中だけで行われる。それも珍しい…。

H：それを修正していくためだけに楽器があるんです。

●普通は音のラインみたいなものを決めて楽器の上で音を拾っていって、「あっ、この線かな」っていう感じで作曲する方が多いみたいなんですが。

H：長いことギター弾いてると自分の手癖ってのがあって、だんだんコード進行とかみんな一緒になっちゃうんですよ。そうすると「こらいかん」と。そうじゃなくてメロディーだけを頭の中で浮かべて。メロディーとかも楽器で弾こうとすると自分のスケールの手癖があるから、みんな一緒になっちゃう。そうじゃなくてもっといろんなものを作りたいと思ってる時には楽器を持たない。

●オリジナルを作るには楽器を手放さなくちゃダメだということですね。

H：だからネタを仕入れたりはしないですね。

●インターネットは主にファンとのアクセス。

H：と、CD-ROM（注9）の仕事やらしてもらってるんで、そのためのデータをやりとりとか（笑）。そういうのには使いますけどね。

●パソコン通信なんかも当然やってた…。

H：これがほんとに恥ずかしいんですが、マックを触って6年弱ぐらいまで通信というものに手を出したことがない。

●いきなりインターネットの方に。

H：いや、一応伏線としてニフティ（注10）に、寸前で入りまして。3カ月ほどパソコン通信を経験して。それで結局フォーラムとか見て回って、プロレスだったら試合結果がすぐ入ってるじゃないですか、その日の夜にもう。それで「おおっ」て思って。これは僕らのライブの感想とかも、手紙だったらずっと待ってなきゃいけないけど、電子メールだったらライブのその日に送ってくれるやつは送ってくれると思ったんですよ。「これいいや」と思って、ニフティー上でファンクラブ用に僕のIDを開放しようかなって考えたんだけど、多分見ても文字情報だけだから、大して面白がってくれないかもしれないなって時にホームページのお話が来たわけで。

●ニフティーではROM（注11）。

H：そうですね（笑）。それでまあ電子メールのやりとりをニフティーでやって、「ああこんなに面白いんだ」「こんな速いんだー」って。

●味しめちゃった。

H：便利さに。

●こうしてホームページ開いたり、サイトにいったり、パソコン通信やったりした経験の中で何かエピソードがあれば。

H：通信上の話をまだまだ語れるほど熟練してないからなー（笑）。

●きっとジェイロックマガジンの読者層って、パソコンはまだまだこれからの人が多いと思うんですよ。そういう意味ではみんな勇気が出せないところがあると思うんですが。

H：その人なりに一つは絶対に面白がれるものがあると思うんですよね、何かしら。だからパソコン買ったら、最初の3カ月4カ月は死にもの狂いでやってほしいですよね。そしたらきっと何か絶対面白いものが見つかる。大抵買って1週間ぐらいで「分かんないやー」ってやめてしまうじゃないですか。でもそんなに考えてるほど、難しいもんではないと思う。楽しんでやってればいいんじゃないかなーと思いますね。苦労してないと言ったらウソになりますけどね（笑）。

●ネットワーク上で全然違う分野の友達とかできません？

H：できるって言うんですけど、なかなか。フォーラムとかで発言しないとダメなんですかね？あれって。

●自分で書き込みやんないとダメみたいですね。本城さんが実名でやっちゃうと結構問題があるかもしれませんけど。

H：なかなかそういうのがないですね、まだ。ミュージシャンの人とかにメール送ってみようかなとか思ったりするんですけど。

●いいなあ、ファンのふりして（笑）。

H：何かね、素性を、僕はこういう者ですけどって言って、送ってみたらいいのかなって思うけど、突然そんなものももらってもびっくりするかなって思っちゃうじゃないですか。自分もアーティストやっててなかなか。でもこれ電子メールだったら気楽に送って気楽に返事くれるかもしれないなと思うんだけど。こないだ小室哲哉さんに送ってみようかなーとか（笑）。

●やってください。

H：思ったこともあったんだけど（笑）。

●ぜひやってください。

H：ちょっと怒られそうな気がしたんで（笑）。

●後で結果を聞かせてくださいね（笑）。

（インタビュー・里居正裕　撮影・金原誠）

筋少サイト評価

	評価	コメント
面白さ	★★★★★	本城氏のホームページの存在が光ります。
充実度	★★	意外と筋少の紹介ってことだけで終わっているのが残念。
操作性	★★★★	ストレートで軽いリンク。
ロック度	★★★	筋少のページなのにマトモすぎない？

余談のコラム

本城氏のホームページは、筋肉少女帯のサイトにぶら下がっているのだが、本文でも紹介した通り、すごくアットホームな雰囲気でユニーク。3月中旬から筋肉少女帯のニューアルバム「ステーシーの美術」の販売促進キャンペーンを橘高文彦氏と共に行っていたが、4月に入ってからはそのキャンペーンの模様を日記として、ホームページの中で写真入りで克明に時間を追って記録している（きっと本誌のインタビューもその中に入ることだろう）。

ちなみに4月1日更新の日記の札幌、仙台編をのぞいてみた。札幌到着後、寿司を食べに行った二人だが、「橘高は白子のネタに初挑戦、あえなく惨敗」したと伝えている（笑）。また、次々と訪れる放送局などの取材先ではインタビュアーの女の子の写真をしっかりゲット！　何しろ電子カメラを衝動買いしたばかりの本城氏。これを使ってページを作るのがうれしくて仕方ないようだ。ともあれ本城氏のホームページ、アーティスト自身による記録としては、卓越した出来だと断言する。アクセス可能な読者は、すぐにも行ってみるべし。

サイバーJ-ROCK読者プレゼント

本城氏愛用のピックをサイバーJ-ROCK読者5名様にプレゼントします。詳しくはサイバーJ-ROCKにアクセスすれば分かります。

筋肉少女帯のサイト
（http://www.kids.co.jp/KingShow.html）

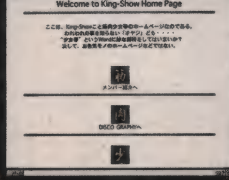
本城氏がインタビューで挙げた音楽サイト

KISS
http://www.galcit.caltech.edu/~aure/strwys.html

U2
http://www.ecst.csuchico.edu/~edge/u2.html

J-ROCK TRIBUNE

JUNE Vol. 13

illustration : Asako Tashiro

voice
X JAPANを信じて…

私はX JAPANファンです。私は3/27・28・30の横浜アリーナライブに行く予定でした。しかし、3/13にYOSHIKIが病気になってしまい、その後のライブは、すべて中止となってしまいました。私は「X JAPANに会えない」という思いが心を突き刺して、1日中泣いてしまいました。その時の私は、YOSHIKIの体調の事などはそっちのけで、ただただ「Xに会えないんだ」「次のライブまで、また耐えなくてはならないんだ」と、自分の事しか考えられずにいました。泣いている途中で「こんなに辛いなら、もうXファンはやめた方がいいのではないか」と思った時もありました。しかし、私は2日目にして、やっと自分自身が自己中心的になっている事に気付きました。こんな自分を、すごく恥ずかしく思いました。そして、それと同時に初めて、YOSHIKIの体調を気にし始めました。YOSHIKIが病気になっているのに…。

何よりもだれよりも辛いのは、X JAPANのメンバーであり、YOSHIKI本人なんだって思いました。もちろん、今はライブはやらないで、YOSHIKIは病気を治す事だけ考えてほしい…。ライブでX JAPANに会えないのは本当に辛いけど、こんな時こそ、私達ファンが次の復活を信じて、待たなくてはいけないと強く心の中で思いました。

このボイスを読んでいる人の中にも、X JAPANコンサート in 横浜アリーナに行くはずだった方がたくさんいることでしょう。中止になってしまった事は本当に悲しいです。しかし、次X JAPANが復活を遂げるライブが来た時、今回のライブで会えなかった狂おしい悲しみ…そしてX JAPANに届けたい愛など、何もかもをその時のライブでメンバーにぶちまけようよ!

「起こる事すべてに、意味がある」。この、TOSHIの言葉を信じて…。今まで通り、私はX JAPANに愛を送り続けようと思う。

[栃木・ペンネーム愛狂・♀・16歳]

voice
同じファンの違う意見

4月号のボイスで「X JAPANが物足りない」と意見したことに対し、反発している記事があったが、彼らが「X JAPANが物足りない」と思ったのは、以前のヘビーなサウンドが少し影をひそめたことに対するXファンの本音ではないだろうか。彼らは以前からXを聴いているのだから、けっしてXを否定しているのではない。アーティストには多くのファンがいるのだから、いろんなファンの意見があるのは当然のことだ。私はFEEL SO BADのファンだが、「ちょっと好きじゃないな」という曲が、わずかだが数曲ある。小田真弓さんの意見は「Xは今も以前もカッコイイ」と読み取れた。小田さんのように考える人だけを、Xのメンバーが喜んでいるとは思わない。いろんな意見も知りたいはずだ。

私は完全無欠なアーティストなど存在しないと思っている。もし、そう思っているアーティストがいるならば現状の自分に満足しているのだと思う。どのアーチストも自分が、カッコイイと思う場所に向かって進んでおり、常に上を目指しているのだから、そのために曲のイメージが変わることも多い。最近ではWANDSがそうだ。でも、ファンの中には「今もやっぱりいい」という人もいれば「前の方がよかった」という賛否両論の意見がある。私は今のFEEL SO BADに不満は全くないが「1stアルバムのころが好きだった」という友人の意見を聞き、「確かにグループ感が変わったから、そんな人もいるな」と思った。仮に自分がアーティストの立場になったら、自分がいいと思う方向に進んでいくけどリスナーの多くの意見も聞きたいと考えるだろう。

日本には、いろんなアーティストのファンがいるが、自分と違う意見にもソフトな感覚で耳を傾けてほしい。けっしてアーティストを否定しているのではないのだから。

[富山・ペンネームFIRE・♂・20歳]

WHAT'S HAPPEN!!

IN OUR EDITOR'S ROOM

●背中に"筋肉少女帯"と刺繍(ししゅう)された特効服で編集部を訪れてくれた橘高&本城の二人。知らない人が見たら、とうとうジェイロックマガジンになぐり込みか…という光景だったが、二人はいたってアットホーム。インターネットに凝っている本城はデジタルカメラでスタッフや取材風景を撮影しまくり、橘高は大阪弁を交えてたくさんの話をしてくれた。初めてデジタルカメラなるものを目にした編集部スタッフは興奮しまくり、撮ってもらっては大喜びだった。

●本のデザインが大きく変化した今月号。本誌の基本姿勢やこだわりはまったく変わっていないのだが、外見がかなり変わっただけにいろんな意見が寄せられるだろうなと、好奇心半分、心配半分。現在の心境は、ビジュアルが変わったうんぬんとファンにいろいろ言われるアーティストに近い。「自分たちの根本にあるものは変わってない」という彼らの言葉を、声を大にして言いたい!

●当然のことと言えば当然のことなのだが、今月号の撮影やインタビューページの打ち合わせ段階からメンバー全員集合で、どんどん自分たちの意見や希望をぶつけてくるルナシーの五人。「こういうのはやったことがないから面白そう」「どんな紙質になるんですか」と、最終的には印刷の方法にまで話が行き、彼らの真剣さとこだわりにただただ感心。撮影当日は思いっ切り時間を要したけれど、誌面のような結果を得ることができたのだった。

●本誌TRIBUNEやインタビューで構成した単行本『J-ROCK'Sバイブル』が発売。これを読んでもらえば一目瞭然だが、読者の声や、盛り上がった論争などをアーティストにインタビューで聞くのがジェイロック流だ。だからこそどんどん素直な意見や疑問をぶつけて、大好きな音楽を真剣に見つめてほしい。普段ホメ言葉に慣れているアーティストも、シビアで本音の意見に注目している!

●シャム・シェイドのライブ前の楽屋では、彼らの楽曲がガンガン鳴り響き、それに合わせてメンバーが歌ったり楽器を弾いて、テンションをグイグイ引き上げていた。中でもボーカルのCHACKは、ボディがサルの顔になったかわいいギター(?)を弾きながら、楽屋いっぱいに声を響かせて歌っている。しかしそのギターは、アンコールで無惨にも真っ二つになり、ステージ上に砕け散った…。かわいかったのになあ…。

voice

FAN脱退者の手紙

「アーティストの音楽性やルックスが変化すると、"変わってしまった"という理由だけでファンをやめる人が多くて悲しいです」っていう意見の人が出現する。確かに、そういうしょーもない理由でファンをやめる人もいるだろうけど、ファンをやめた人=変化についていけない人という風に勝手に解釈するのはやめていただきたいなあ。まあ今日は、"ファンをやめた"人の意見にも耳を傾けてみてよ。

私は、この前あるアーティストのファンをやめました。"ファンをやめた"っていうよりは、そのアーティストに対する情熱がなくなってしまったのに、「今まで応援してきたんだから」という気持ちや、そのアーティストのファンであるというスタイルを守るだけのためにファンを名乗るのは、いつも真剣にやっているそのアーティストに対しても、そのファンのみんなに対しても失礼だと思って、そのアーティストから離れたんです。

まあそんな言い訳がましい前フリは置いといて、なぜそのアーティストへの情熱がなくなってしまったのかということだけど、確かに彼らのルックスは変化していった。今では私がファンになった時とはずいぶん違う。けど、私はそんなケツの穴の小さい女ではない。カッコ悪くなったんなら文句を言うが、私がホレた時とルックスが変わっても、カッコ良くなるならOK。好きなアーティストが男前になるのは喜ばしい事だった。彼らはTVにも出演しだし、たくさんの新しいファンが仲間になった。これもOK。TVに出てくれればくれるほど、「こんなにカッコいいアーティストがいるんだよ」っていう事をたくさんの人に知ってもらえるし、仲間が増えれば増えるほど、そのアーティストの「みんなで大きくなろう」という夢にどんどん近づく事ができる。これも大変好ましい出来事だった。曲もライブも変わっていない。変わっていないと言っても成長していないという意味ではない。どんなに広いホールでやろうと、彼らは天狗にならず初めのころと変わらず、どんどん次の高みを目指している。今よりもっと大きくなれるアーティストだといつも思った。そう、彼らは、何も変わっていなかった。変わってしまったのは、私の方だったのだ。私の求めてる音楽が変わってきてしまったのだ。

私はあるイベントで、今まで自分が聴いていた曲と違うものを与えてくれるアーティストに出逢った。そのアーティストが与えてくれたものというのは、心からの笑顔と優しい気持ちだった。私はその日から、このアーティストが作り出す世界を心から愛しく思うようになってしまった。今までのアーティストは(他のファンの方々はどうか分からないが)、私には、勇気と自分を信じる気持ちを与えてくれた。それは、本当にかけがえのないものだ。だけど、私の心は優しい気持ちも求めるようになってしまったのだ。今まで聴いていた曲が嫌いになったわけじゃない。それ以上に心を動かされる世界に出会ってしまったのだ。ただそれだけだった。

"私は一生○○さんのファンよ"と若い身空から心に決めちゃったアーティストがいる人には、「他のアーティストに乗り換えただけやん」と言われちゃうかもしれないけど、それは違うのよ。じゃあ、あなた達は、アーティストの変化は"成長したんだ"と許せても、ファンの求める音楽性の変化は許せないの? 私は、アーティストからいろんな気持ちを与えてもらって成長していきたいんだよ。その成長が"すごくステキな事"だと思うのは、私だけなのかなぁ?

[兵庫・ペンネーム有紀・♀・17歳]

voice

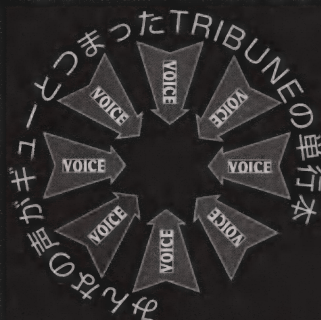
ナマイキ言います

ドリカムのニューアルバムを聴いた。聴いた直後の感想は「カラオケで歌えそうな曲があんまりないなあ」というものだった。そう思った後、はっとした。そして「これが日本の音楽界の現状なんだ」と気づいた。つまり売れることをあまりにも意識して、歌手の方が私達に合わせているのではないかということだ。そして私達の方も「私達が歌える歌」を支持してしまうのだ。

でも、歌手ってそういうものじゃないと思う。歌手っていうのは、歌うことを仕事にしているんだから、私達が歌えるような歌を歌っていても話にならない。

大工は家を作る。コックは料理を作る。歌手は歌を歌う。それぞれ「職人」なんだと思う。だからその人にしか出来ないことをやらないといけない。歌手は歌手にしか歌えない曲を、持っている才能を最大限に生かす曲を歌ってほしい。ドリカムのニューアルバムは美和ちゃんのその独特な声をめいっぱい生かした、素晴らしいアルバムだと思う。私はあんなに表情豊かに、ステキに歌えない。でも、それでいいと思う。私は歌手にずっとあこがれていたいと思うから。

だから売れることに集中しすぎて、歌手の質を落とさないでほしい。いい曲は、私達が歌えない曲でも、絶対受け入れられると思う。それが普通だ。アーティストのみなさん!「売れる曲」はいりません。良い曲をくださいね。

[熊本・ペンネームしそまきこ・15歳]

5月号のTRIBUNEにひと言!

●5月号のBUCK-TICKに対する意見を読んで、B-Tの一つの意見でこんなにもいろいろな意見が来て「ああ、B-Tって愛されとるんやな〜」と一人でしみじみと思ってしまった。私はまだファンになって3年ほどなので、まだ知らんB-Tがいっぱいあると思う。でも、B-Tを愛してる気持ちはだれにも負けないつもりです。とにかく今井寿が好きやねん!
(兵庫・ひなんゴーゴー・♀・16歳)

●群馬のグロスさんに言いたい。アンコールを言ってくれない人が気に入らないの? それはおかしい。アンコールは心からもう一度聴かせてほしいから言うものであって、義務ではないのです。だから自分が「もう一度」と思って言えばそれでいいのではないでしょうか。
(大阪・KAORU・♀・17歳)

●chatter boxでの「上昇」という時に杉を入れてしまうワタナベさん。私も全く一緒です。私もしょっちゅうやっては喜んでいます。「さ細な喜び」って感じで楽しいですよね? あと社会の歴史で「上杉氏」って出てきますよね。もう先生が「上杉氏が…」とか言うだけでドキドキします(これは私だけ?)。とにかく仲間がいて、うれしいですぅ! (京都・高岡朋子・♀・14歳)

●5月号のVOICEに載っていたマリーさん、怒ってましたねえ。分かるけど、こういう自分が好きなアーティストをボロクソに言われたり、ロックに対する偏見って永遠になくならないような気がする。そんな周りにカリカリしてるくらいなら、ライブに行って発散して、同時に仲間を作りましょう。好きなアーティストのライブに行けば皆同類だあ! (長野・DUAL・♀・21歳)

●私もマリーさんの意見に同感! みんな、うるさいよ。人が好きなものにゴチャゴチャ言うな! どんな気持ちになるのか分かってんのか。 (千葉・ちか・♀・17歳)

●最近恋愛ものの曲に対立するように、世の中の矛盾をテーマにした曲が出てきて、私はうれしいです。 (兵庫・ラヴラヴグレイン・♀・16歳)

●ロックっていうのはただ音楽が楽しめたらいいんだろうかって思う。まずは音楽にのれる事は大切だとは思うけど、日本人なら日本語で堂々と言葉を届けてほしいと思う。これでカッコイイと言えるなら本物だと思う。それに個性を生かしたら、もっと良くなるバンドはたくさんいるはず。
(京都・シノビアシ・?・14歳)

●テレビでたまに「あなたが選ぶ名曲」みたいな番組をやっているけど、どうも見る気がしない。紹介される曲は、その時代に売れた曲がほとんどで「売れる」=「名曲」みたいな感じがしてならない(俺だけ?)。ちなみに俺が選ぶ名曲は、Xの「Unfinished」です。
(大阪・RIKUO.X狂い・♂・20歳)

●私はGLAYが好きなのですが、周りの友達などはアイドルが好きな人ばかりで、ロックのことについて話せません。一人で「TAKURO〜」とか言ってたら、それが変化して今ではGLAYのギターの人は宅八郎なんて言われてます。悲しい。気の合う友達がほしいと、心から願う毎日です。
(高知・グローリー・♀・15歳)

●ロックは髪が汚い、化粧しているとかで、母はいちいちうるさいです。こんな良い音楽をなぜ母は嫌うのでしょうか。
(神奈川・金太子スーパー・♀・13歳)

●CD聴いてて涙が出てきた。自分にもやっと詞や音の奥深くにあるモノに気づけるようになったのかなあ…。 (新潟・桜彰・♀・15歳)

●特に「こうしたい」とか「こうあるべきだ」とは言わない。ただ私は自分自身が好む音楽を聴いているだけ。だれが何と言おうが、私には関係ない。…でも考えることも必要かもしれない、最近の音楽。 (三重・brother・♀・17歳)

●このごろチャートで好きなアーティストを1位にするために、J-ROCKを10冊ぐらいまとめて買う人がいる。1位にしたいのは分かるけど、そんなにまとめ買いしたら、他の人が買えなくなるし、この投票の意味が薄れてしまうと思う。みんなはそう思いませんか? (山梨・橋本友美・♀・15歳)

●私は長いことBUCK-TICKのファンをやっているので、BUCK-TICKを客観的に見られません。B'zやWANDSは私から見ればさわやか熱血系のバンドに見えるのですが、そういう熱血系バンドのファンの人から見て、BUCK-TICKはどういうバンドに見えるのでしょうか。昔のイメージとかが、今だにこびりついているようにも思いますが…。教えて下さい。互いに誤解をときましょう!
(愛知・雑魚・♀・22歳)

●何で日本は何でも型にはめようとするの? ロックバンドとかポップスとかビジュアル系とか。ビジュアル系っぽいカッコしたって、ポップス歌ったっていいと思うし、偶然作ったものがロックのひと言じゃ納まらないアーティストもいるんじゃない? どうしてそんなにこだわるの? こうでなきゃいけないなんてこと絶対ないはず! そう思わない?
(千葉・LOVE ME・♀・15歳)

●違法でグッズを買ってる人がいたから教えてあげたのに、「ううん、もう違法でも何でもイイ! もう○○大好き!」だって…。よくそれでファンだって言えるよね。 (山口・SPOON・♀・15歳)

●ライブに行って暴れた次の日、腕がメチャクチャ痛い。ライブ中ず〜っと腕を上げているから。でも、腕は下ろさない! (東京・サリー・♀・15歳)

●雑誌やTVにすごく出ていて、ライブが少なくて、アルバムが売れているバンドがありますけど、それって売り方のいい方法なんでしょうか? 雑誌やTVにあんまり出てなくてもロックしているバンドもあるのに、知名度がないのはちょっと悔しいと思う。 (秋田・有沙・♀・27歳)

●私は学校での授業の音楽は、歌うのも嫌いだし、やってるのも大嫌いなんです。でもなぜかロック音楽には、興味があるんです。特に今はGLAYにはまっています。今はロックの時代ですよね。
(茨城・R.J・♀・15歳)

●5月号のプレスマニアで思ったのだけど、どうして立ち上がりたくなる気持ちが分からないの? もう開演時間も迫り、心臓はバクハツ寸前、スタッフのギターテストの音に「オオッ」とどよめきは上がり、もう座ってなんかいられない。早く早くとメンバーを舞台へ引っぱり上げたくなる衝動。ナマの音に飢えている。どうしてそれを嘆くの? どうして分からないの? (兵庫・夕陽・♀・31歳)

●ビジュアル系が嫌いな私の両親は、LUNA SEAのアルバムとシングルをすべて捨てた。何でLUNA SEAを好きなだけなのに、私は息苦しい思いをしなければならないのだろう。親は先入観だけで決めつけていると思う。
(長崎・DADA・♀・15歳)

●私の学校はROCK系は男、女は絶対ジャニーズみたいなのがあるんです。私はROCK系が好きだからJUDY AND MARYやGLAYの話をしたら、みんな「女のくせに…」とか言うんです。こんなのおかしいですよね、絶対。 (沖縄・サラ・♀・13歳)

●ミーハーでもいいじゃん! そのアーティストの音楽と雰囲気が気に入ってるってだけで、のめり込まなくったって…。いいもん!
(東京・ぐるぐるエミコ・♀・15歳)

chatter BOX

●YOSHIKIが倒れてしまった。でも、私はX JAPANが復活する日を祈りながら、何年かかっても待ち続けてやる!　（愛媛・maiko・♀・12歳）

●友達がジェイロックマガジンを見て、「この人達って全然ロックじゃない!」と何人かのアーティストについて怒っていましたが、私にはどれがロックでどれがロックじゃないのかよく分かりません。ロックって何ですか?　（山梨・ジャイ子・15歳・♀）

●最近次から次へとCDを出して1位になって（売れて）また出して…というアーティストがすごく目につきます。いい曲なのか、良くないのか、1位になる曲が本当にいい曲なのかときどき分からなくなったりします。私はT-BOLANが大好きです。T-BOLANはそうなったりしないよね?　急いで出さなくてもいいから、いつまでも1曲1曲を大切にするT-BOLANのままでずっといてほしいです。
（島根・レモン・♀・15歳）

●僕は筋肉少女帯が好きです。しかし周りには筋少のファンはいません。「あれは歌ではない」などという人が多いのです。おまえら黙って最後まで聴いたことがあるのか、コラー!　これを読んだ人達も一度聴いてみてください 。そして曲の良さが分かったら、周りの人達にも勧めてあげてください。
（宮城・洋・♂・17歳）

●chatter boxをいつも楽しく読ませてもらっているのだが、載っているのは女の子の声ばかりではないか。間違っているのは分かっているが、この際言わせてもらうと『ロックは男のモノだ!』。野郎ども!　「邦楽なんか…」とか言ってんと、邦楽をもっと良くするためにもっと意見しろ!（『』内に関しては許して下さい）　（京都・真王・♂・17歳）

●LUNA SEAが好きだ。ハンパじゃなくはまっている。親は「そんなヤツラのどこがいいんだ!」と言うが、めっちゃくちゃ好きだ。14歳のガキでも、ファンでいていいのかなー。（岩手・LUNAR・♀・14歳）

●この前学校で面接の練習の時に、趣味が音楽鑑賞の場合「何を聴きますか」って言われたら「ロック」と言ってはいけないと言われた。ロックが好きだから好きって言って何が悪い。面接の先生は「ロックと聞いてあまり良い印象がない」って言うけど、それは学校と関係ない!　くそじじいのワガママじゃん。　（岐阜・ヒロさんのネコ・♀・17歳）

●私はもう32歳で小4の息子がいるけど、清春くんが大好き!　ライブ大好き!　音楽大好き!　10代の子が隣で同じ雑誌を手に取っているのを横目で見つつ、私もしっかり買っています。オバサンだってROCK大好きな人もいるんだゾ!!
（神奈川・辺見和代・♀・32歳）

●念願のGLAYのライブに行ってきた。学年末テストの真っ最中だったけど、何カ月も前からずっと楽しみにしてた。ライブは本当に最高で涙が止まらなくて十二分に私の気持ちに応えてくれた。でも開場が50分遅れたのはとても残念だった。私のように親が時間を気にする人もいるので、出来るだけ開場・開演時刻を守ってほしい…。
（愛知・HISASHI狂・♀・17歳）

●僕は何事にも個性を持ちたいと思っている。好きなマンガ、好きな小説、好きなアーティスト…。そうすれば本当の自分らしさが、自然に見えてくると思う。その自分らしさを、これからも大切にしていきたい。教科書通りの人生を歩むのではなく、自由に生きてこそ本当の夢が見つけられるはずだ。
（兵庫・桜生司・♂・15歳）

●THE YELLOW MONKEYは、アルバムごとにスタイルが違うって思える。けれど私はどのアルバムも好きだ。これからどんな風に変わっていくか想像できないけれど、でもTHE YELLOW MONKEYの好きなようにしてくれさえすれば、それでいいと思う。私は信じる。（静岡・高木いずみ・♀・19歳）

●このごろライブは値段が高い。1カ月にいくつも行けない。少なくとも1回4000円はする。これは音楽への興味を抑制させていると思う。
（京都・平井淳子・♀・20歳）

●ここ何枚かのシングルで「WANDS、変わったね」ってよく言われるんだけど、私の中ではあまり「変わった」という意識はない。前よりも増してカッコ良くなっただけです。　（山口・Wohta・♀・23歳）

●本当に良い音楽に出会った時、思わず顔がニヤリってなったりしてしまうけど、この瞬間が最高に幸せなのは私だけではないはず。世の中にあふれている音の中から、たった一つ巡り会えるというのは奇跡だね。これからもいろんな音楽に出会いたい。　（愛媛・みきお・♀・16歳）

●chatter boxでBUCK-TICKがど～のこ～のとみんなが言っているので、興味を持って聴いてみた。みんながあ～だこ～だ言う訳が分かった。BUCK-TICKはいい音楽を作っていると思う。"アーティスト"だね。うれしくなっちゃったよ。
（群馬・愚麗誇・♀・19歳）

●最近すごく疑問なんですけど、バンドのメンバーの名前をローマ字で表しているのはどうしてですか。呼びやすいからなのかなあ～。姓名の日本語でもいいと思うし、私はその方がかっこいいと思います。　（静岡・平田幸子・♀・16歳）

●高校生でCHAGE&ASKAのファンは珍しいとよく言われる。「あんなおじさんどこがいいの?」とも言われる。私はそんなこと関係なく、チャゲアスの作る音楽にホレただけ。今ではチャゲアスがないと生きていけない。ルックスとか関係なく、純粋にチャゲアスの音楽を愛してる!
（兵庫・C-0044220・♀・16歳）

●最近面白いバンドないよね～、つまんな～い!なんて思っている人。バンドやってるヤツっていろんな人いるけど、みんな一生懸命だよ。「つまんない」はあなた自身が「つまんない」ヤツになってるあかしです。早く目覚めて楽しくなろうよ。
（新潟・みゅう・♀・20歳）

●この前学校で友人に「え～、Xのどこがいいの?」って言われた。すっごく悔しくて悲しかった。でも家で「DHALIA」を聴いてると、そんなことどうでもよくなった。自分が一番だと思ってるんだから、それでいいじゃんって。でもその時は本当になぐったろかと思った…。　（大阪・遠桜夜・♀・14歳）

●音楽を出す人の中に、自分を表現したいがために一人の世界に入り過ぎちゃって、結局聴いててもワケ分かんない人とかいるじゃないですか。でも最近すごいと思うのがTHE MAD CAPSULE MARKET'Sで、彼らの世界はちゃんと存在するし、しかも聴いててしっかり伝わってくるのですよ。そこがパワーですよね。（北海道・かずき・♀・15歳）

●今、大人気のバンドのことを「あまり好きじゃない」と言ったら、友人にお説教されてしまった。最後に「何で好きじゃないの」と言われて「何か合わない」と答えた。彼女は「分かってないね」という顔をした。でも、合わないんだもん。聴きもしないでキライって言ってんならまだしも、聴いた上で「合わない」と判断したのに、そのバンドの良さをいくら語られても困ってしまう。「合わない」って言っても別にけなしてるんじゃないんだよ。こればっかりはどうしようもない。私には私の愛するバンドがあるからいいの。　（兵庫・朝美・♀・15歳）

●ベースのHALさんが急病でツアー全公演が中止になったDER ZIBET。ファンクラブからのDMには、「メンバー4人でベストな形のライブをファンの皆様にお観せすることが一番大切なことだと思い、今回のツアーの中止に踏み切りました」とありました。ツアーが中止になったことはとても残念ですが、だれか一人欠けてもDER ZIBETではありません。この4人じゃなきゃデルジサウンドは生まれません。HALさん、今はゆっくり休んでください。そして1日も早く元気になって、最高に気持ちい～いベースを聴かせてください。
（東京・R・♀・29歳）

●インタビューなどでアーティストが「影響を受けたアーティスト」について語ってくれることは、とても良いことだと思う。後に音楽を聴く時、同じアーティストの同じ曲でも今までとは違う深さが感じられるだろうし、音楽性の視野も広くなると思うからです。　（神奈川・YUKA・♀・18歳）

●つい最近、ロックに目覚めた。こーんなに楽しいモノが身近にあったのに、何で今まで気づかなかったのか不思議でなりません。一生音楽についてゆくぞ!!　お～!（←気合）（大阪・NAO・♀・16歳）

●前まで私のクラスには、GLAYファンは私一人だった。だけど、みんなにGLAYを知ってもらおうと思って、昼食の時「グロリアス」とかを流して、テープとかもいろんな人に渡しているうちにファンが増えて、私のクラスは今GLAY一色に染まっててすごくうれしい。　（奈良・じろ魚・♀・14歳）

●どんなに汚い手（失礼かな）を使っても売れればいい。ピュアなままじゃ人はいられないし。でもどれだけみんなの心の中に残り続けていくかは分からないよ。　（愛知・かぽ・♀・17歳）

●3月7日GLAYのライブに行ってきました。すっごく楽しかったし、みんなカッコ良かった～。特にJIROさんの姿が印象的だった。TVや雑誌で見るJIROさんとライブで見るJIROさんは全く別人のような…。でもそういうユニークなJIROさんが私は大好きだ。　（兵庫・Manami・♀・17歳）

●「チャートで1位になるのが夢」だったら、1位になった時点でその人の夢は終わってしまう。きっとその後は、チャートで落ちるのをおびえる日々が待ち構えているのだろう。夢ってそういうもの?
（福島・JUNK・♀・17歳）

●最近ライブに来る子の年齢層が低くなりましたね。それは良いことだと思いますが、マナーを知らない子も多くて迷惑です。ライブハウスでポンポン振ってる某バンドのファンの皆様。今度やったら取り上げますよ。気をつけてください。
（埼玉・柳原文・♀・20歳）

●私はX JAPANが好きだけど、だからと言っていつもハードロックしか聴かない!　ということはない。友達とかからいろんなアーティストのCDを借りてテープにダビングして、その日の気分によって聴いてる曲もジャンルもバラバラ。テスト前にはシブヤ系も聴いて勉強するのがgood!　でもやっぱり一番はXだなあー。　（京都・都築朋子・♀・14歳）

●私は今めっちゃくちゃ黒夢にはまっています。だから私の持ち物（筆箱、バインダー）の中には必ず黒夢のものが入ってるし、カバンには写真やステッカーやバッジをたくさんつけています。けれど友人は「恥ずかしいから止めとけ」って言うんですよ。自分が本当に好きだからやっているんだけど…。
（兵庫・いの・♀・17歳）

●売れたら変わっていくと言われるけど、そんなの売れようが売れなかろうが関係ないよ。LUNA SEAも髪切ったり化粧薄くなったりしてるけど、売れたからしたんじゃなくて、偶然時期が重なっただけ。彼らの思いは何も変わってないんだよ。それどころか、今彼ららしいところに行こうとしてると思う。Jなんか昔より今の方が、Jらしくてカッコいいよ。外見だけで判断するのはやめようよ。　（神奈川・RYUICHI'S SLAVE・♀・18歳）

●卒業式の次の日に先輩達とみんなでライブをやりました。私らは先輩とCRAZEやD'ERL-ANGERなんかをやったんですけど、改めて好きな音楽を弾くことっていいことだなと思いました。CRAZE最高っス!　（北海道・瀧子・♀・16歳）

●ウエービーヘアのhydeくんとっても好きでした。ストレートロングのhydeくんもすごく好きでした。セミロングのhydeくんもやっぱり好きでした。そしてボブヘアのhydeくんも、ショートになった今もやっぱり好きなのでした。　（埼玉・まり・♀・19歳）

J-ROCK Original Chart

top 10

Rank	Artist	Votes
1st	X JAPAN	1544 votes
2nd	GLAY	1256 votes
3rd	B'z	1004 votes
4th	WANDS	972 votes
5th	氷室京介	929 votes
6th	LUNA SEA	901 votes
7th	L'Arc〜en〜Ciel	885 votes
8th	BUCK-TICK	826 votes
9th	T-BOLAN	782 votes
10th	Eins:Vier	733 votes

Rank	Artist	Votes
11	THE YELLOW MONKEY	711 votes
12	DEEN	689 votes
13	黒夢	624 votes
14	modern grey	581 votes
15	大黒摩季	575 votes
16	CRAZE	542 votes
17	筋肉少女帯	511 votes
18	THE STREET BEATS	487 votes
19	DER ZIBET	471 votes
20	ZYYG	456 votes
21	ZARD	431 votes
22	FEEL SO BAD	416 votes
23	甲斐よしひろ	410 votes
24	FIX	375 votes
25	布袋寅泰	362 votes
26	SIAM SHADE	358 votes
27	BLANKEY JET CITY	337 votes
28	THE MAD CAPSULE MARKET'S	305 votes
29	Valentaine D.C.	299 votes
30	media youth	282 votes
31	nuvo:gu	276 votes
32	GARGOYLE	275 votes
33	奥田民生	272 votes
34	PAMELAH	257 votes
35	SUPER JUNKY MONKEY	243 votes
36	D.T.R	231 votes
37	DEEP	225 votes
38	Southern All Stars	222 votes
39	斉藤和義	221 votes
40	TOMOVSKY	219 votes
41	忌野清志郎	196 votes
42	Mr.Children	187 votes
43	JUDY AND MARY	185 votes
44	MANISH	184 votes
45	SLY	164 votes
46	PERSONZ	152 votes
47	小沢健二	150 votes
48	DREAMS COME TRUE	148 votes
49	矢沢永吉	141 votes
50	CHAGE & ASKA	136 votes

本誌4月号アンケートハガキによる読者投票と全国32局で放映中の本誌協力テレビ番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」の3月8日から3月29日（4回）オンエア分の投票による月間総合順位をお届けする。次回締め切りは5月26日、さあ、キミの投票でチャートを変えよう。本誌とじ込みのアンケートにセレクトアーティストの名前を1名書いて送ってほしい。抽選で毎月30名様にオリジナルステッカーをプレゼント！

Guitarist 20

1st HIDE X JAPAN
2nd 松本孝弘 B'z
3rd 柴崎浩 WANDS
4th HISASHI GLAY
5th 田川伸治 DEEN

6 PATA [X JAPAN]
7 五味孝氏 [T-BOLAN]
8 TAKURO [GLAY]
9 今井寿 [BUCK-TICK]
10 SUGIZO [LUNA SEA]
11 Yoshitsugu [Eins:Vier]
12 INORAN [LUNA SEA]
12 ken [L'Arc~en~Ciel]
14 布袋寅泰
15 SEIZI [THE STREET BEATS]
16 菊地英昭 [THE YELLOW MONKEY]
17 浅井健一 [BLANKEY JET CITY]
18 吉田光 [DER ZIBET]
18 星野英彦 [BUCK-TICK]
20 倉田冬樹 [FEEL SO BAD]

Vocalist 20

1st TOSHI X JAPAN
2nd TERU GLAY
3rd 上杉昇 WANDS
4th 稲葉浩志 B'z
5th 池森秀一 DEEN

6 RYUICHI [LUNA SEA]
7 森友嵐士 [T-BOLAN]
8 櫻井敦司 [BUCK-TICK]
9 hyde [L'Arc~en~Ciel]
10 氷室京介
11 Hirofumi [Eins:Vier]
12 吉井和哉 [THE YELLOW MONKEY]
12 坂井泉水 [ZARD]
14 清春 [黒夢]
15 OKI [THE STREET BEATS]
15 甲斐よしひろ
17 大黒摩季
18 ISSAY [DER ZIBET]
18 川島だりあ [FEEL SO BAD]
18 浅井健一 [BLANKEY JET CITY]

Bassist 20

1st HEATH X JAPAN
2nd JIRO GLAY
3rd J LUNA SEA
4th 上野博文 T-BOLAN
5th 人時 黒夢

6 Lüna [Eins:Vier]
6 tetsu [L'Arc~en~Ciel]
8 栗林誠一郎
9 沢田大司 [D.T.R]
9 樋口豊 [BUCK-TICK]
11 TAKESHI"¥"UEDA [THE MAD CAPSULE MARKET'S]
12 照井利幸 [BLANKEY JET CITY]
13 大橋雅人 [FEEL SO BAD]
13 廣瀬洋一 [THE YELLOW MONKEY]
15 TOSHI [GARGOYLE]
16 恩田快人 [JUDY AND MARY]
17 HIKO [nuvɔ:gu]
17 中村正人 [DREAMS COME TRUE]
17 飯田成一 [CRAZE]
20 HAL [DER ZIBET]

J-ROCK

2月27日から3月26日の間に寄せられたアンケートハガキを基にチャートを作成した各パート別のランキング。お目当てのアーティストは入っているだろうか?

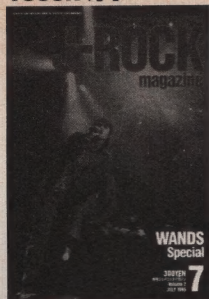
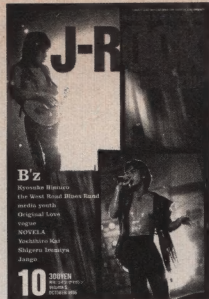
Drummer 20

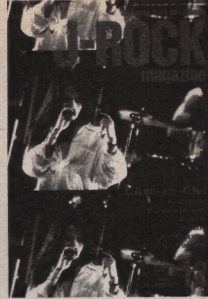
1st YOSHIKI X JAPAN
2nd 真矢 LUNA SEA
3rd sakura L'Arc~en~Ciel
4th 青木和義 T-BOLAN
5th 宇津本直紀 DEEN

6 ヤガミトール [BUCK-TICK]
7 Atsuhito [Eins:Vier]
8 菊地英二 [THE YELLOW MONKEY]
9 五十嵐公太 [JUDY AND MARY]
10 山口昌人 [FEEL SO BAD]
11 中村達也 [BLANKEY JET CITY]
12 MOTOKATSU [THE MAD CAPSULE MARKET'S]
13 KATSUJI [GARGOYLE]
14 MAYUMI [DER ZIBET]
14 菊地哲 [CRAZE]
14 樋口宗孝 [SLY]
17 JUN [nuvɔ:gu]
17 JUNJI [SIAM SHADE]
19 太田明 [筋肉少女帯]
19 藤本健一 [ZYYG]

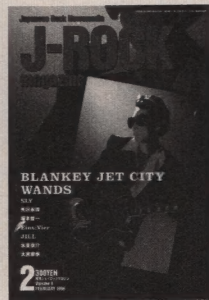
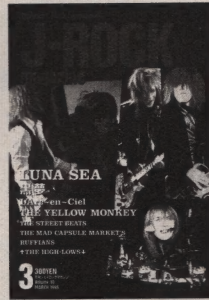
Another Player 5

1st 木村真也 WANDS
2nd 山根公路 DEEN
3rd 西本麻里 MANISH
4th 妹尾隆一郎
5th 坂本龍一

1995.7月号〜

WANDS / GARGOYLE / PERSONZ / Eins:Vier / THE STREET BEATS / 外道 / 近藤房之助 / SOUL FLOWER UNION / DOG FIGHT / HISTORY OF INDIES BOOM

B'z / media youth / Original Love / vogue / the West Road Blues Band / NOVELA / 甲斐よしひろ / 泉谷しげる / Jango / HISTORY OF 氷室京介

筋肉少女帯 /SOUTHERN ALL STARS / BUCK-TICK / BLANKEY JET CITY / FEEL SO BAD / GLAY / BOW WOW/ nuvo:gu / TOMOVSKY / J-ROCK GUITARIST特集

L'Arc~en~Ciel / 大槻ケンヂ / 忌野清志郎 / Eins:Vier / BIG LIFE / ハイパーマニア / BLOODY IMITATION SOCIETY / THE HARPER ST. BAND / VISUAL WORK SHOCK

1996.1月号〜

T-BOLAN / 黒夢 / CRAZE / DEEP / THE MODS / CHAGE & ASKA / Chap Chimes / PIZZICATO FIVE / FIX / 斉藤和義 / 明石昌夫グループ / SIAM SHADE / BEST ALBUM特集

BLANKEY JET CITY / WANDS / SLY / 矢沢永吉 / 坂本龍一 / Eins:Vier / JILL / 氷室京介 / 大黒摩季 / THE SPACE COWBOYS / 95年度J-ROCK新聞

LUNA SEA / 黒夢 / L'Arc~en~Ciel / THE YELLOW MONKEY / THE STREET BEATS / THE MAD CAPSULE MARKET'S / RUFFIANS / ♠THE HIGH-LOWS♥ / J-ROCK BASSIST特集

X JAPAN / GLAY / DEEN / 明石昌夫 / CHAGE & ASKA / 甲斐よしひろ / Eins:Vier / THE MAD CAPSULE MARKET'S / ZYYG / GARGOYLE / LAUGHIN' NOSE / 真心ブラザーズ / ALBUM CREDIT特集

GLAY / X JAPAN / 筋肉少女帯 / TWINZER / TOMOVSKY / 尾崎豊 / 甲斐よしひろ / 佐野元春 / 音楽雑誌用語マニュアル

上記以外は売り切れです。詳しいお求め方法は下記をご覧ください。

定期購読&バックナンバーの申込方法

■本誌の定期購読を希望される方は、とじ込みの郵便払込用紙に必要事項(郵便番号・住所・氏名・電話番号)を記入の上、最寄りの郵便局よりお申し込みください。半年間(6冊)、2700円(税・送料込み)でお届けします。

■「J-ROCK magazine」バックナンバーを希望される方は、下記注意事項をご覧のうえ、とじ込みのバックナンバー専用払込用紙に必要事項を記入し、希望冊数分の本代と送料の合計金額を最寄りの郵便局より振り込んでください。なお、希望されるバックナンバーが売り切れた場合は、返送料を差し引いて切手または小為替で返金させていただきます。ご了承ください。

※注意

◇本の価格は、95年7〜96年5月号は1冊300円です。(売り切れもあるのでご注意下さい)

◇送料は、1冊160円、2冊220円、3〜5冊600円、6〜12冊850円です。

◇希望する号数(必ず何年何月号かを記入)・冊数・郵便番号・住所・氏名・電話番号を必ず振込用紙に記入してください。

◇書店でも注文によりお求めになれます。

ロック音楽ROOTS・J-ROCK ARTIST BEST 50

■TV音楽番組「ロック音楽ROOTS」(J-ROCK magazine提供、全国31局ネット)では、番組に対するご意見・ご要望をお待ちしています。官製ハガキにご意見・ご要望・住所・氏名・年齢・職業を明記の上、50円切手をはってお送り下さい。毎月抽選で50名様に番組オリジナルグッズを差し上げます。

■「J-ROCK magazine」は、全国32局ネットで放映中の音楽番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」に協力しています。この番組は、新譜の売り上げチャートではなく、皆さんの投票によって決まるアーティストの人気ランキングを、毎回発表していく番組です。読者の皆さんも番組づくりに協力してください。投票方法は、官製ハガキに投票したいアーティストを1組と、住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88 KBS京都「J-ROCK ARTIST BEST 50」係宛お送りください。投票者には、毎回抽選で番組からの記念品が贈られます。

大　募　集

■J-ROCK magazineの「INDIES JUNK BOMB」コーナーでは、オリジナリティーを持った意欲あふれるインディーズのバンドやソロアーティストを紹介しています。我こそはと思う人は、編集部まで音源、プロフィール、写真、ビデオなど活動内容が詳しく分かる物を送って下さい。取材をお願いする場合は、こちらからご連絡します。推薦もOKです。

■J-ROCK magazineでは、新企画『PLAYERS FILE』を構想中。この企画は毎月1アーティスト(バンドの場合はその中の一人)に注目し、編集部や読者でそのアーティストを追求しようというものです。そこで今月もアーティストに対する読者の意見を大募集！「この人こそは…」と自分が思うアーティストの作詞や作曲、プレイやステージングなどに対しての具体的な意見を送って下さい！「○○という曲のこの音、この演奏がスキ」「○○という曲を聴いて、考えが変わった」という素直な意見から、「○○という曲のあの部分は一体どうやって弾いているのか。歌っているのか」などの疑問までアーティストに対するものなら何でもOK。投稿の際は、ペンネームを希望する人も、必ず住所・氏名・年齢を書いて下さい。

■「J-ROCK magazine」では、音楽にこだわりを持ったいろいろな人達が「だれかに伝えたい」と思いながらも、自分の中に葬り去っている「こだわり」「ネタ」「意見」「批判」などを発表する場になりたいと考え、VOICEというコーナーを設けています。ライブレポート、ディスクレビュー、アーティスト評、アーティストへのメッセージなど、どのようなスタイルでもOK。このページ下のあて先まで本音を投稿してください。採用させていただいた方には、CD券(3000円分)を差し上げます。

【投稿規定】

◇文字数:1600字程度まで。　◇原稿用紙での投稿を基本としますが、フロッピーディスク(MS-DOSファイル)、FAXでも構いません。　◇ペンネームも可能ですが、必ず住所・氏名・年齢・タイトルを明記してください。

■視覚的表現から音楽へのこだわりを伝えたいというカメラマン、イラストレーター、芸術家(平面・立体)の持ち込み歓迎します。事前に電話連絡の上、編集部まで作品をご持参ください。

次　号　予　告

J-ROCK magazine 96年7月号は、5月27日発売。

登場予定アーティストは、バクチク／ルナシー／デル・ジベット／幻覚アレルギー／モダン・グレイ／ラルク・アン・シエル／斉藤和義／スーパー・ジャンキー・モンキー 他。

株式会社ジェイロックマガジン社・編集部　〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル8F　TEL.06-214-1751 FAX.06-214-1761

MODS HOUSE
KBS京都

それなら、

J-ROCK ARTIST BEST 50

この番組は、視聴者からのハガキ・街頭アンケート・J-ROCK magazineの読者人気アンケートを総合的に集計し、毎週番組独自のJ-ROCK ARTISTのベスト50をいち早く紹介すると共に、ARTISTの最近の活動状況をお知らせする視聴者と一体型の音楽情報番組です。
4月から番組名が［J-ROCK ARTIST COUNT DOWN 50］から［J-ROCK ARTIST BEST 50］に変わりました。

だったら、

ロック音楽 ROOTS

すべてのROCK音楽の原点である「ブルーズ」。数年前から関西を中心にブルーズのムーブメントが全国に広がってきています。この番組は、「ブルーズ」から始まりすべての音楽へ広がっていく「音楽ルーツ」を深く探り音楽の素晴らしさ・楽しさを全国へ発信する番組です。

J-ROCK ARTIST BEST 50

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	23:30〜	テレビ新潟	金	26:25〜
岐阜放送	土	23:30〜	テレビ愛媛	木	24:50〜
びわ湖放送	金	22:25〜	長崎文化放送	金	24:25〜
三重テレビ	金	17:15〜	熊本朝日放送	日	24:00〜
奈良テレビ	土	23:30〜	仙台放送	火	24:10〜
サンテレビジョン	木	08:00〜	テレビ静岡	金	25:05〜
テレビ和歌山	金	17:00〜	福島テレビ	木	24:50〜
岩手めんこいテレビ	水	25:00〜	北陸朝日放送	日	24:25〜
秋田朝日放送	日	23:55〜	山口放送	土	25:25〜
群馬テレビ	木	23:45〜	日本海テレビ	木	24:45〜
北日本放送	日	24:45〜	沖縄テレビ	木	25:45〜
テレビ埼玉	金	23:30〜	高知放送	水	24:45〜
千葉テレビ	金	23:30〜	テレビ神奈川	日	23:30〜
長野朝日放送	日	23:55〜	青森放送	金	25:15〜
鹿児島読売テレビ	土	25:35〜	大分朝日放送	土	25:55〜
広島テレビ	水	25:15〜	札幌テレビ	火	25:40〜

ロック音楽ROOTS

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	24:00〜	長野朝日放送	日	24:25〜
岐阜放送	土	24:00〜	テレビ新潟	月	25:35〜
びわ湖放送	金	24:30〜	テレビ愛媛	月	25:20〜
三重テレビ	火	24:35〜	長崎文化放送	土	25:30〜
奈良テレビ	土	24:00〜	熊本朝日放送	土	24:30〜
サンテレビジョン	金	24:30〜	青森テレビ	日	24:35〜
テレビ和歌山	土	24:10〜	テレビュー山形	日	25:15〜
岩手めんこいテレビ	木	25:00〜	テレビ山梨	火	24:35〜
秋田朝日放送	土	24:40〜	テレビ高知	土	25:26〜
群馬テレビ	土	24:00〜	大分放送	月	24:30〜
北日本放送	金	25:15〜	琉球放送	日	24:50〜
テレビ埼玉	金	24:00〜	日本海テレビ	金	25:15〜
千葉テレビ	日	23:30〜	南日本放送	月	25:00〜
静岡第一テレビ	月	25:00〜	札幌テレビ	日	25:15〜
テレビ金沢	日	25:15〜	福井放送	火	25:15〜
山口放送	土	25:55〜			